

昭和三十年一月十日
昭和二十六年九月四日
第三種郵便物認可

林業技術



155

— ◆ —
1955.1

日本林業技術協会

林 業 技 術

— 155 —

1955 ・ 1 月 号

・ 目 次 ・

巻頭言 林力の充実.....松川恭佐.. 1

尾瀬の柳と唐檜.....武田久吉.. 2

新春 所感

田村 剛・小口義勝・四手井綱英
脇田 豊・弓削 晃・桑原 宏
福岡俊正・清瀬豊明・山上太一郎
加納一郎・坂田善三郎・真宮次雄
長井英照・平井信二・牧山義郎
原田 泰 一到着順一

.... 8

主要樹種の天然分布 (講演).....林 弥栄..23

John James Audubon のことども.....成沢多美也..29

ヤマメの話.....伊藤莊之助..36

椀からコケシへ.....横田精一郎..40

〔林木育種講座〕

1. 林木の品種改良.....岩川盈夫..42

「間伐50年」の正誤表について.....45

質疑応答.....48



・ 表紙写真 ・

早 春

林業試験場

坂口利夫

林 力 の 充 実

松 川 恭 佐

時の刻みは世の変転とは関係なく、規則正しく永遠に流れてゆく。流れ来り、流れ去る、時の反復に区切りをつけて、人はこれを日と呼び、年と言う。

そして一方この世では、この悠遠なる時の回転が一と刻みする毎に、新しい生が現われ、古い生が葬られてゆくのである。この生成発展と、退滅解消との差引きが、特定の人類にもたらす幸福と不幸によつて、あるいは進歩と唱えまたは後退といわれる。

このように、人類社会にあつては、森羅万象ことごとく時と無関係に考えられるものはないが、とりわけ年暦の改まる場合に、関心が特に深くもたれることは、東西その軌を一にしているようである。静かに除夜の鐘を耳にして、新しい年を祝福し、人間的希望に胸をふくらますことに、誰しも変りはないと思われる。

これが希望して止まぬ所のものは、林業技術の振興によつて、国家寄与をより大ならしめたいことである。平常の念願をこの改暦に当り、心を新たに、一層の推進を図りたいことである。

林業技術振興の内容については、各専門分野によつてそれぞれ異なるであろうが、そのうちで、林業の基盤をなす林力の充実が、絶対優先に取り上げらるべき問題であることは、言うまでもない。迂遠のようではあるが、林力の充実こそ林業・林政伸展の母体であり、また捷徑であることを改めて肝銘すべきである。若しこの目標に対して、方向を誤つたり、怠つて安逸に墮したりしたら、最早や取返しつかない林業の暗黒時代を招来せねばならぬことを覚悟しなければならぬ。

新年にふさわしくもない、陳腐な考え方であるかも知れないが、敢えてこれを年頭に希願する所以は、森林国を以て誇るわたくし達の森林の内容が、一々その例を挙げるでもなく、余りにも貧弱であるからである。

われわれが言う林力の充実とは、ただ単に森林蓄積の多量を指すものでもなく、徒らに森林面積の拡大を企図するものでもない。すなわち、それぞれの目的と場所に適合した、優良な樹種が構成する林分から、年々産み出される良質・良形・適格の生産材が、最大の量を示すような、森林の仕組みと配列が、秩序正しく具現されることがその一である。その二は定められたる森林の占むべき地域が、余す所なくこれらの森林によつて蔽われることである。

利用の合理化・集約化も必ずこれの裏付けとならなければならない。これによつてまた、森林の保全機能も当然同時に完成されるべきである。

従つて、林力の充実、単に造林だけでなし得るものではなく、木材生産や利用消費の側からも、或は森林經理の観点からも、管理・保護の面からも考えなければならない。林業技術のすべてが、林力充実の資材となつて、築き上げることではないのである。

以上の拙論は、極めて平凡であるが、極めて重要であることを私は強調したい。何となれば、これに対する世の関心が甚だ薄く且つ抽象的であるように感ぜられるからである。また林業技術が、この重点に向けられるべき総合力を、少るらず欠いているように思われるからである。

一家の幸福が、国力の充実に直結するのと同様に、一人一人の林業技術者が分担する森林の繁榮なり、研究・実験の完成なりが、すべて林力の充実に結びついてこそ、広大な森林の幸を産み出すものである。林業技術者の大陣容をもつて、全国森林の林力充実の実現を見ること、決して難事ではない。ただやらないだけである。

林力の充実と空疎、すなわち林業の進歩と後退の岐れ目は、すべての林業技術者の工夫と努力で左右されることを再言して年頭の言葉としたい。

以上はまた、林業技術者自らが、当然建てて荷わなければならない林野の国家的機構組織の充実の場面にも通ずる信念であることを附言して、多幸なる新年え希望をかけるものである。

(29. 12. 10 稿)



観じ来れば、人間ほど勝手な欲望をもつものはないが、そこに人間の生存欲がねらう進歩の所産があると信ぜられる。これにまた、我々の生きる希望が、つながれていると思つても良いのであろう。そして、その進歩は、いかに希望しても、放置したままでは巡つて来ない。進歩は、これを作り出す、われわれの工夫と努力からのみ得られるものである、と考える人生観によつて、人間のさもしさも、幾分は償われるような気持がする。

昭和 30 年の新春を迎えて、われわれ

尾瀬の柳と唐櫓
武田久吉



—尾瀬，焼山峠の笹原に侵入するエゾマツ—

この標題を掲げて、『林友』183号に短篇を草したのは、もう4半世紀程も前の事であるから、今時そういう古文獻を渉猟される方も滅多にあるまいし、私のその後の見聞も聊か広まつたので、何やら蒸返しの嫌はあるが、ここに再び卑説を開陳して見たい。

始めて尾瀬に足を入れたのは、是彼半世紀前の、1905年7月初旬の事である。探検とか研究とかで尾瀬を訪うた人は、明治31年の7月、故理学博士早田文蔵氏が、植物採集のための尾瀬行が最初であつた。氏は、東京を發し、前橋から渋川を経て沼田に達し、川場から花咲峠を越えて戸倉に到り、更に峠を越えて檜枝岐に下り、爰から駒ヶ岳に上下して採集を試みてから、再び尾瀬に戻つて、沼尻平にナガバノモウセンゴケを發見したのが、その年(1898年)の7月3日である。次はその翌年の8月採集の爲に尾瀬に上つた根本莞爾氏(或は氏の門下生ともいう)で、その道程は不明だが、福島師範の教諭であつた同氏の事として、檜枝岐からに相違ない。1903年の7月と翌年8月には、根本氏の生徒の中原源治氏も採集の目的で尾瀬を訪ひ、又1903年8月には、檜枝岐の小学校長、星大吉氏も尾瀬でナガバノモウセンゴケを採集した記録があるが、是等の人達が尾瀬の区域をどの程度探つたものか一向不明である。

尤もこれ以前に、明治27年9月、利根水源探検隊の一行が、水長沢を溯り、大白沢山あたりを越えて、尾瀬ヶ原に下り、麓山麓の森林を穿つて、遂に湖畔の果道に出て戸倉に下つたこともあるし、又明治35年には、後の成蹊学園の園長となつた中村春二氏が、当時附屬中学の生徒であつた石黒忠篤、穂積重遠、加藤鉄之助氏等を率いて、赤城山から追貝を経て戸倉に達し、ここの木賃宿福田屋に泊り、翌日尾瀬沼の縁を通つて檜枝岐に下り、そこから引馬峠を越えて川俣温泉に出て、日光に山越えした記事が、中村氏の著『旅衣』に残つては居るが、何れも尾瀬を目的の旅ではなく、言はゞ行きがけか帰り掛けの駄賃という次第、従つて、尾瀬については、何等詳細の記載はない。

早田氏がどういう動機で尾瀬や檜枝岐の駒ヶ岳に採集を試みたか、今更知る由もないが、私の尾瀬行は、早田氏の記文を見てからの計画で、その年の6月から日光に滞在して、女貌山や丹青山に登り、戦場ヶ原に採集してから湯本の、今は無い山田屋というに宿を取り、附近を探つたり、白根に登つたりしていた。始めは西沢金山を経て川俣に達し、そこから鬼怒沼を探り、更に足を尾瀬に伸す希望であつたが、案内に立つ者がないので、先ず会津街道によつて尾瀬に入ることとし、7月6日いよいよ湯本から金精峠を越えて東小川に一泊、翌日は虻ヶ峠をこえて、土田の小学閑野に出で、片品川を渡つて戸倉に來た。こゝで去年から宿屋を始めた(勿論兼業に)という、萩原甫作(玉城屋)方に草鞋の紐を解いて、尾瀬入りの

準備をしたのである。

船作が殆んど出来ない戸倉は、稗、粟、黍^{じやがいも}や芋などに頼る、文字通りの寒村で、養蚕は重要な生業の一つである。その最盛期に連日の雨天で桑の葉も摘めない折柄、ヤット天気になったというので、一人として案内や人夫に出ようという者が無い。然し幸にして村外れに一人猟師が居て、これは養蚕をやらないし、今一人出稼に来ていた悠の深いオヤジが、日当にさえなるなら行こうということになった。当時は名も尋ねなかつたが、猟師は萩原喜市という熊捕りの名人であり、悠深親爺は飛騨生れの筏流しで、越本の字中里に婿入りした笠原政吉、鬼政と渾名された豪の者だということが、最近になつて判明した。当時は46才、鬼政は65才であつた。

金のツルではなしに、草花を採るのが目的なら、尾瀬ヶ原の市がよからうという、この2人の提言に基いて、予定は先方委せということにして、戸倉を出発したのは、7月8日の朝6時であつた。

笠科川沿いに、鳩待峠に上る路は、5回も冷水を徒渉させられ、5時間半を費して峠につき、昼食をしてから直に山ノ鼻^{なしり}に向つて下り、着いたのが2時。それから、案内の尻を目当てに、夢よりも幽な蹈跡を見失うまいと、沼尻川の外は悉く徒渉して、3時間半もかかつて、丈堀^{じようほり}の傍の、漁夫の小屋に来て一泊。あの珍らしい景色には全く驚嘆してしまつた。昔の日光戦場ヶ原にも、脛を没する程の湿地もあつたが、尾瀬ヶ原のように美しい水蘚の床に、幾百とも算え切れぬ程の池をちりばめたり、樹林に縁どられた大小の川が貫流するなど、思いもよらぬことであつた。

翌日のコースは、前日のにも増してつらいものであつた。燧ヶ岳の裾をめぐる蹈跡は、ネマガリダケに阻まれて、足元さへ見え、傾斜の急な所では、横に這うより仕方がなかつた。而も泥濘は脛を没して脛にも達し、滑ること夥しい。

辛うじて尾瀬沼のほとりに達して、喜びの声を挙げたが、その北岸を伝う小径は、時に潮水に入り、ナガハナギの幹の上を渡つたり、時には隠れた倒木に脛を払われることすらあつた。浅瀬^{あさみ}から真直に森林を横切つて、大江川の支流の清水俣を渡り、果道に出たのは、11時であつた。その果道も名ばかりのものであつたが、それでも釜ヶ淵の橋の傍には、境界の大きな標柱が立てられて、距檜枝岐四里三十四町、距戸倉五里十町と、筆太に書いてあつた。

輯製20万という出鱈目地図で案を立てた関係で、これから鬼怒沼を通つて川俣へ出るという無謀な計画であつたが、それは勿論実行不可能な話である。案内としてその路を知つてか知らずか、とに角果道に腰を下して、今後の方針を協議したが、時間の不足や、糧食の不足、その他の悪条件は数々ある。それでも是非鬼怒沼に入るか、それとも他の道を取つて、日光に近付こうかが問題であつた。

予想外の収獲に満足した以上、寧ろ鬼怒沼を放棄して、日光に戻るの^あ策という結論が出たので、方向は変換され、一行は三平峠に向つた。細い乍らも道のあることは、どの位足掻を早めたことか。

然しその頃の三平峠の下りの急なには、驚くの外なかつた。南が見渡せるあたりから、真直に下つたが、尻が土に触れる程なので、油断をすれば前にのめりそうになる。

下り切つて暫く行けば、左側に船河原鉱山事務所の札を掲げた小屋があり、尾瀬に来て始めて人間に逢つたのであつた。爰に休憩30分、更に下ること1時間半で、片品川を徒渉し、ネバ沢右岸の落葉樹林に入つた。宛も日光の大平のような感じである。大きなブナ、ミズナラ、トチ、カエデなどの林で、中には曾て山師が入つたとかで小径が通じていた。やがてネバ沢の水を右下に眺め、それに沿うて上つたが遂に積に下り、沢をつめて行く内に、時計は已に6時に近くなつたので、大きなトチノキの下に一夜の宿を借りこととし、テントも油紙も用いずに、文字通りの露営をしたのであつた。

翌朝は3時40分に起床し、荷を始末し、5時40分野営地を出発し、蹈跡すらないネバ沢を溯り、急坂、密林、笹藪をこいで、丸沼の縁に出で、大尻沼を回り、東小川の上の一ノ瀬に出で、金精峠の道に会し、その夕湯本に帰着したのである。

こういう急行旅行であり、足下の植物を採るのにさえ時間が不足勝ちなのに、昆虫まで捕獲し、尾瀬ヶ原でハッチョウトンボや、後にカオシロトンボの名を得たものをも採集し、イトトンボの一種と共に持ち帰つたのであるから、森林植物の観察など、頗る粗雑であつた。それでも当時の日記を出して見ると、沼の東岸でトウヒ、ツガ、シラカンバ、ナ、カマドを見た^と記してある。ツガは勿論コメツガであり、シラ

カンパとはソウシカンパのことに相違ない。此の時代、イヤもつと後の大正時代でも、シラカンパとソウシカンパとの区別は、私には判然としなかつた。農科大学の樹木学の先生に尋ねて見たら、属よりも先は教えずに置くとのことであつた程で、あの頃一般に樹木の知識は貧弱であつた様に思われる。それでも、早田氏の記事に、湖畔にモミヤカヤの林があるように書いてあるよりはまだまだしであらう。

大正13年の7月、尾瀬に長期の滞在をした時には、沼田まで上越線も開通し、追分までガタ馬車も通つていた。その上、長蔵小屋という根拠地もあつたし、沼と原との間の径の笹刈りも、どうやら進行していた。



トウヒ
一黒岩山一

昭和2年6月、東京営林局の依頼によつて、尾瀬の植物を調査し、その報告は、営林局から、『尾瀬地方に於ける保護林と其の景観』と題して、翌昭和3年2月に発行された。この調査の時、尾瀬にはトウヒ、イラツガ、トラノヲの3種があると、檜枝岐の者がいう話を、長蔵翁から耳にしたが、その区別を明示して貰う機会がなかつた。同3年の秋の尾瀬訪問の時も、頗る要領を得なかつたが、それでも、その夏樺太で散々エゾマツを見た目には、尾瀬にエゾマツのあることを確認したが、トウヒも存在するように『林友』に誌したのは、調査不十分な為の誤謬であつて、尾瀬の区域内には、トウヒはなく、エゾマツのみしかないと断じて宜しいと思う。然し乍ら、尾瀬を離れて鬼怒沼林道によつて東に向うと、黒岩山あたりから、純然たるトウヒ（『林友』183号口絵）が現われ更に黒岩山から鬼怒沼に向へば、トウヒはあつても、エゾマツを見ない。

処で、林学家は、本州にエゾマツの産することは認めないが、皆トウヒと断ずるらしい。それ故本州に於けるエゾマツの分布が、尾瀬のみに限るかどうかは、文献の上では判定する訳に行かない。私の経験からでは、尾瀬でも主として福島県分に多く、群馬県分には遙に少ない。それでも、三平峠下の発電電の杜宅に近く、巨大なものがあつて、胸高周囲3.81米を測つた。

林弥栄氏の『日本産重要樹種の天然分布』針葉樹第2報によると、トウヒの北限は山口営林署管内の丸山岳であり、あの辺から窓明山、坪入山、駒ヶ岳、大杉岳へかけても、少量ながら分布しているという。それ等が真正のトウヒであるか、それ共エゾマツであるかは、再検討の要がありはしまいか。又同氏によると、引馬峠から帝釈山、田代山、荒海太郎にかけてもトウヒを見えるというが、これ等はその何れであろうか知り度いものである。

又群馬県では、尾瀬ヶ原の西辺に限る至仏山一帯には、少数乍ら産するも、その西側の、利根川流域からは知られていない。然し更に西して、三国峠の西の苗場山には、少数乍ら巨木があり、それはエゾマツではなくて、トウヒである。地籍は長野県下高井郡堺村に属する。唯一度、エゾマツと呼び度いものを、御岳の岳ノ湯の下方で見たことがある。胸高周囲3.8米。然しこれはあの附近を精査した上でなければ決定出来ない。

トウヒは関東や本州中部の諸高山から、南は山上岳や大台ヶ原山にも分布するが、更に南鮮（智異山）にもある。是等は何れも、富士山や御嶽や日光のものと類似の膚をしていて、エゾマツのとは異なるものである。



トウヒ
一大台ヶ原山、正木ヶ原を過ぎて一

爰で一言して置く可きは、智異山のものは、中井博士の

『智異山植物調査報告書』（大正4年）では、トウヒ *Picea ajanensis* として報告され、植木博士の『朝鮮の林木』（大正15年）では、エゾマツ *Picea jezoensis* Carr. (*P. ajanensis* Trauto.) とされ、同じ年の秋に刊行された鄭台鉉氏の『朝鮮産主要樹木の分布及適地』にも、この考が採用されている。その後に至つて、植木博士は、朝鮮産のものを、エゾマツの新らしい変種として *P. jezoensis* var. *coreana* の名を与えられた。

一方中井博士は『上高地天然記念物調査報告』（昭和3年）に於いて、上高地でエゾマツを発見したと特筆して居るが、私の知る限り、上高地のものは樹皮から見て、トウヒであつて、エゾマツではない。それと共に、北鮮の所謂エゾマツは、或は *Picea ajanensis* ではあるまいかということであるが、この点は現物を見ないので、只疑問に止めるのみである。又曾て『林友』に、樺太でトウヒと思われるものを見たこと記したが、これはその後館脇博士が、シロエゾとし命名し、クロエゾ即ちエゾマツの変種に収めたものである。

爰でエゾマツとトウヒの区別について、簡単に述べて置こうか。エゾマツは北海道に産し *Picea jezoensis* に当ること、又トウヒは本州に産し *P. hondoensis* であることは疑うの余地が無いと思うが、この二つを別種とする考と、全然同一と認める考と、トウヒをエゾマツの変種とする考と、三通りある上に、沿海州産の類似品 *P. ajanensis* なるものがあつて、これがエゾマツと同一だとする説と、別種だとする考とがあつて、事を更に面倒にする。

樺太や北海道に産するエゾマツ、即ちクロエゾでは、樹皮が灰白色で、堅に裂け、更に斜横に割れるから、深くはないが、大体アカマツの膚の様な型式に近い。この特質は、直径20センチ位の若木でも、はつきり見ることが出来る。

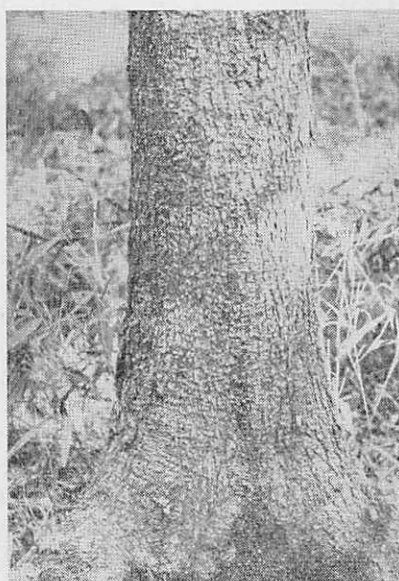
本州の高山に見るトウヒの膚は、暗赤褐色で、若木でも老木でも、堅長くてなく、やゝ亀甲状に割れるから、大体クロマツの型式であるが、勿論遙に浅い。

枝や毬果でこの二つを区別することは、樹皮よりも遙に困難である。というのは、採集した枝の位置によつて、同一株上でも差別があるから、誰が見ても造作なく識別出来るという訳に行かない。

次にシロエゾというのは、地上1.5米位まではエゾマツのように堅に裂けるが、それから上は、極めて浅く鱗甲状にわれるだけで、瞥見

トウヒに似ている点が大いに異なる。シロエゾの発見されたのは、1930年前後で、北大の館脇博士は、天塩演習林内で注意され、私は京大の樺太沿岸演習林内で1930年8月に発見した。後北海道石狩、日高、釧路、北見、利尻島にも産することが明かにされた。そんな訳で、館脇博士は、1932年に Var. *Takedai* 名を与えて、エゾマツの変種として記載発表された。

エゾマツの品種として、この外に、アカミノエゾマツなるものがあつて、毬果が著しく紅色を呈するものがある。本多博士は『林学会雑誌』第31号（大14年）に、北海道苫小牧御料林内から得た材料によ



トウヒ

—富士山—



シロエゾ

—樺太東海岸・旧京大演習林内—



樺太エゾマツ

—樺太東海岸，旧京大演習林内—



トウヒ

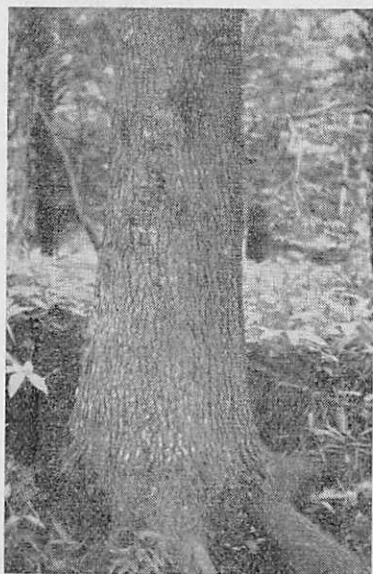
—御岳，岳ノ湯附近—

つて，青実，赤実及びその中間色のものゝ，毬果と鱗片葉，並びに枝の性質を表として掲げられた。これに対して，植木博士は『朝鮮の林木』に於いて，本多博士のアカミとは別の紅実のものを，新品種として，*forma rubripes* の名の下に記載発表された。

是等とはまた別に，館脇博士は『えぞまつ・とどまつ』（昭和23年）に，毬果の鱗片が紅紫色のものにアカミノエゾマツなる新和名を提唱し，「いずれ近い内に正式に学名を発表するつもりである。」と述べて居る。

私も昭和3年の8月，京大の樺太演習林内で，毬果の色に，黄緑色を呈するものと，極端な濃紅色を呈するものと，その間に数段の階梯を示すものを認め，それ等の株に毬果の色を明示する札を掲げて来た（『京都帝大農学部附属演習林概要』102頁参照）。その後，是等の株には年々同一の色の毬果を着ける由の報告を得たから，年によつてこの変化はないものと考えた。

茲で問題となるのは，本多博士のアカミと植木博士のアカミと，又館脇博士のアカミとが，色彩だけ類似しても，他の点で全く別つ可きものかどうかは，私には疑問に思われる。本多博士が三品の明細な表を掲げて，葉の長さとか樹脂道，又葉枕の大小などの差を示されたが，各品各1株づゝの樹から採集された



エゾマツ

—尾瀬，焼山峠下—



枝の垂れたエゾマツ

—尾瀬，焼山峠下—

結果なら，意味はないと思う。又植木博士が鴨緑江の対岸十三道溝の附近に発見されたアカミノエゾマツの原記載も，唯1株から採つた標品からのものだとしたら，これ亦本多博士のアカミから独立させるに足りる程の権威があるかどうか。樹木の個体的変異を知る者にとつては，学説として甚だ物足りないと思われる。序に述べるが，トウヒにもアカミのものゝあることは，

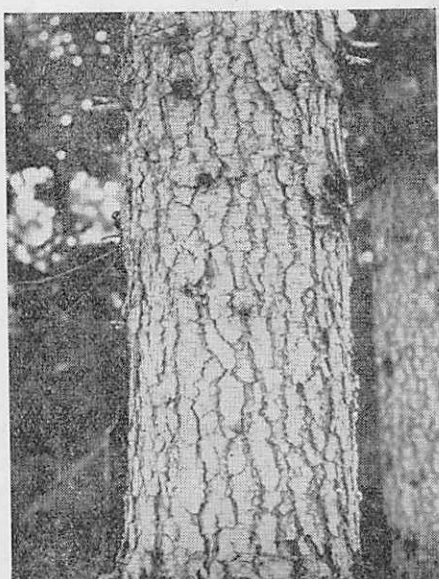
Kent 氏著 Veitch's

manual of Coniferae (1900) 427 頁によつて知ることが出来るが、日本の学者からは特別の記事は発表されていないようである。

さて最後に尾瀬のエゾマツであるが、理想から言えば、積雪期にブッシュが閉塞している頃、スキーを利用して、毎木調査を行えば面白いと思われるが、未だその機会に恵まれない。従つて、茲に証拠として挙げるものは、皆路傍乃至簡単に到達出来る地に生ずるもののみである。先にも述べた通り、尾瀬では麓の東南麓から東麓へかけ、更に大江川温泉に沿つて、焼山峠に到る間に多く、西麓では尾瀬ヶ原に接するブナ林の外縁にもあるが、これは寧ろ老齢樹で、若木が盛に立つ焼山峠とは大いに趣を異にする。

面白いのはその樹形であつて、枝の斜上するもの、ほぼ平らに出るものと、下垂するものとあり、その状は焼山峠に於いて最も明瞭に看取することが出来る。殊に地形がそれ等を展望するに都合のよいことは特筆に値する。唯残念乍ら、その毬果の色沢については、適当な時期にその地を訪問する機会を得ない為、いつも十分に成熟したものしか見ないので、詳細に記すことが出来ない。唯新芽の色には、緑のと、紅のと両方あることは確言出来る。

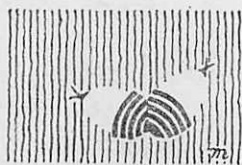
茲で今一度名称について記そう。平野長英氏の『尾瀬』(46頁)によると、戸倉でも檜枝岐でも、昔からタウヒと呼んで居るという。然らばイラツガの名は何処の称呼であろうか。オ、シラビソをツガと呼ぶ檜枝岐では、それに比べてとげとげしいエゾマツを、イラツガと呼んでも不思議はないことであろう。だがこの名は、今忘れられているのか、それ共これは一部の人だけの間で用いられるものかであろう。それで普通に行われる「トウヒ」が割合に広く使われるのかも知れない。又トラノオの名はトウヒの一名として日光や木曾などの方言で、それも亦尾瀬に輸入されて、偶には用いられるものと見える。



エゾマツ

一檜枝岐村七入一

次に尾瀬の柳について一言して置こう。『林友』には、猫川上流の柳平に、トカチヤナギ、コゴメヤナギ、オノエヤナギの3種の生ずることを述べた。本年発行された『尾瀬ヶ原総合調査報告』で、原、水島の両氏も、是等3種の柳を認める外、至仏山にヤマネコヤナギ、三平峠にキンメヤナギ、ミヤマヤナギ、及びキツネヤナギを、景鶴山にセンダイヤナギ、三条ヶ瀬にシライヤナギを報告している。この中で、ミネヤナギは比較的多く産するもので、両氏は之をなお麓からも報告しているが、その外早稲沢にも亦焼山峠にも産する。トカチヤナギは最も大きくなる種類で、檜枝岐では之をヤスモトヤナギと称する。主として上田代方面に多く、沼の方では未だこれに出会う機会がない。然し曾て1931年6月、之を古仲の下手、新井の片品川右岸で見たから、笠科川の上流には絶無とはいわれないかと思う。(原文のまま)



新春所感



森林の保育と自然保護と レクリエーション

「国立公園」編集長

田村 剛

由来森林は多目的の土地であつて、宅地や耕地のように、その土地の専用を許さない。近時治山治水のために森林の保育が強調されているのは、当然である。その他防風、防潮、魚付、鳥獣の保護、さては気候の調節等いい古されて来た森林の効用は頗る広い。特に最近では生活水準や労働条件の向上につれて、レクリエーションの場としての森林の利用は頗る顕著であり、国立公園やその他の自然公園はその箇所と面積とを増し、その利用者の激増する率は毎年 20—30% にも達し、ために国土の狭小を訴えている現状であつて、国立公園だけの利用者でも年々 4,000 万人、国民の半数に達している。土地の利用は周約となり、混農、混牧、水産、鉱業、発電等林地の産業的利用は一段と進んで来ている。

森林の経営は決して木材の生産だけに没頭してよいものでないことが、だんだん国民の間にも知られて来ている。これは私有林についても当然考えさせられる問題で、土地所有権の限界についても種々の問題が起つて来る。森林内の通行立入の権利（慣習による）或は副産物の採集等不明なものがあるように思われるが、その風致の保護についても、公共性の発展が切に要望される。日本のように土地が狭く、人口の稠密な国土、特にその風景資源が重要な意義をもつ国土では、森林の経営上に種

種の公共性の発揮が強く要望される。これを拒否する権利が、森林所有者にあるとは誰も考えることが出来なくなつて来ている。森林の評価もこれによつて行われるようになるに違いない。それは現在の価格を高めることもあり、低めることもあろう。こうした社会事情のもとにあつて、森林所有者の頭は少しも変つていない。そこに多くの矛盾がある。最近限られた保安林については、保安林整備臨時措置法の実施により、その不合理が解消されつつあるのは、結構だが、その範囲がまだ狭い。わが国有林も特別会計となつてから、私有林にも劣らぬ、利潤追求の施業が行われて、識者を驚かしている。わが国の森林のうちには、国民のレクリエーションのために供用するのが最善の土地利用法であると判断されるものが多くなつて来ている。又あるものは後代国民のために国土の原始の姿をそのままに保存する森林として、これに生息する動物を含めて、保護さるべきものも、山地や海岸に保留されねばならぬが、その用意は全くしてない。経済的な営林だけが、森林の経営でないという判り切つた事実が、昨今却つて忘れられているように思われるのはひが目であろうか。

☆

林業記者入門

「緑化弘報」編集長

小口 義勝

想い出せば今から 17 年前、鎌倉河岸に倚りかかるように建つていたブラックまがいの山林局へ足を入れたのが、林業技術者との初会であつた。学校を出てからすぐに時事新報社に入り、千葉、仙台の両支局で 2 年足らず見習社員として勤務したが、この間県庁内の各課を取材に廻つたものの、つい林務関係へは顔を出さなかつた、というよりもその存在をすら知らなかつた。あの頃は昭和 8 年か 9 年だつたから多分農務課の林務係であつたと思われる。私の生れは殆んどが国有林の日本アルプスの麓松本市で、小学校 5 年から大学を卒業社会に出るまで 12 年間というものは毎年々々かかさずアルプス連峰へ

1955 年の第 1 歩をふみ出すにあつて、毎日を仕事におわれて、とかく視野の狭くなりがちな私たちの日常生活に窓を開き、清新な空気にあふれたいと思い、林業雑誌編集長の方々に自由な気もちで執筆をお願いしたところ、次の方々から心のこもつたご寄稿をいただき「新春第 1 号」を飾ることができたことは大きな喜びであります。ご寄稿下さつた各位に厚くお礼を申し上げます。

・編集部・

登っていたが、高山植物や雷鳥などは意識しても、国有林そのものについては関心はすこしもなかった。だいいち、松本の私の家から4町ぐらい離れて松本営林署があつたが、時折その前を通つて、人の出入もすくなく話声も洩れない閑静さに病院か、何かの研究所かと思つたくらい心無さで、用材と云えば松、杉、檜ぐらいしか知らない私が、山林局へ敢然と出入するに至つたのはまことに厚顔ましいかぎりであつた。

山林局へ出入りの直接動機は時事新報社の解散であつた。福沢諭吉先生創始の新聞で、その新聞格において秀でたもののある気品高い新聞であつたが、当時の東京日日新聞（現在の毎日新聞）に統合され、私どもも吸収されることになつたのであるが、時事新報社の屋上から東京日日新聞社へ向けて放つた伝書鳩でさえ、1羽残らず鳩首を古巣の時事新報社に向けて舞い戻り伝書鳩係を泣かせたというのに、われわれ万物の靈長であり、しかも社会の木鐸ともあろうものがオメオメわが社を乗取つた仇敵の社のデスクにおさまりノホホンとメシが食えるか！という高邁？な精神から武士は食わねど高揚子をきめこんだのであつた。しかし、ヤセ我慢は長続きせず、慶大時代の親友である平野三郎君（現衆議院議員）に頼みこみ、父の増吉氏が社長をしている日本農林新聞社に入つたのであつた。

日本農林新聞社は当時産業組合や帝国農会の記事と林業記事とが半々であつたが、林業関係の新聞は経営が成り立たぬためか一つしかなく、山林局や営林局、地方の林務関係の役所にとつてはこの新聞が唯一の機関紙的な存在であつた。それだけに山林局の役人も農林新聞の記者に対しては、極めて親近感を抱いていて、新聞記者に対する警戒的な面は全く、といつてよいほどなかつた。しかし、地方には若冠 24、5 歳にして親父ぐらゐの知事や部長に友人然として相対し、本社に帰つては警視庁のクラブに詰めて総監と語らい、農林省のクラブでは次官、局長と酒をくみ交わしていい気になり、人は知らず、自らは無冠の帝王を任じて、取材などクラブへとどける発表記事を社へ送り、至極太平楽をきめこんでいたのであるから、いざ山林局へ乗りこむと、全く勝手が違い、山林局長室に村上富士太郎氏と対してもネタにはならず、発表記事などないから、これには弱り切つてしまつた。とどのつまり貴島圭三氏が課長であつた業務課、平山源三郎氏が課長の監理課、田中八百八氏が課長の林務課などをマメにこつこつ廻り、紙屑拾ひならぬネタ拾いをはじめたのである。このネタ拾ひが林業技術者の役人と親交を結ぶよすがとなつたのである。

林学士や高農出の役人と交つて最初に感じたことは、森林の中で教育されたわけでもなさそうだが、純情な、

どちらかと云えばかたくなな人が多いこと。ハタタリ屋がすくなく、職務には忠実な人が多いこと。親分か子分かしないが先輩、後輩の礼を弁きまえ、たとえば、記事をとる場合でも、いきなり子分か、後輩の方へ行つては駄目で、先ず親分か、先輩の方からわたりをつけないと円滑にゆかないことを悟つた。えらく仁義が堅いのである。そこで私は、林学会名簿や各高農の名簿を編集室に備え、技師技手の序列表を作成しついでに位階勲等、俸給まで書き入れた。ちよつと見たところ 1 等品から 5 等品までの公定価格表みたいなものであつたが、これは非常に役に立つた。尤も、これは素人の私には必要であつたが、彼等はひとたび宴会なり、式などがあつて並ぶ場合にはお互同志、自らの等級を心得ていて、決して間違つことがなく席をとるのである。

次に、林業用語という厄介ものに手を焼いた。始めの頃、恥をさらすようだが、施業案だの、斫伐だの、択伐など聞いてもサッパリ何のことだか判らず、その都度、用語の説明を求めるのは照臭く、見栄も手伝つて日夜悶悶として悩んだのであつた。神田の古本屋をあさつても林業用語の解説などあろう筈がなく、ついに意を決し、業務課の某技師（現在は局長クラスだが）に色々の林業用語を紙に書いて示し「実は読者から、これらの用語を誰にでも判るように、という投書があつたのだが、ひとつ宜しく頼む」とおしつけ、その翌日早速その解説を買つたが、「斫伐とは一皆伐・ナアーンダ」と今更ながら独逸語の直訳をうらめしく思い、技師の云うカンバツ（間伐）とは何のことであろうかと思つて見たら、マビキ（多少意味は違ひにしても）であつたりして、微苦笑を禁じ得なかつたものであつた。

兎も角、二、三年間というものは殆んど毎日、技師、技手の誰彼となく話し、神田のおでん屋とともに飲み、（当時は役人も月給でのめたのである）忽ち千年の知己の如くになつてしまい、私もついに林業界から足が抜けなくなつてしまつたが、その真因は、私が林業技術者の正直さ、純情さ、謙虚さを愛したことによるといえよう。

☆

読まれにくい学会誌

「林学会誌」編集長

四手井綱英

林業、林学界にはなんと雑誌の数が多いことか。数えあげれば十指に余りあるであろう。各営林局の機関誌広報を加えれば 10 有余のさわざでない。さらに果関係、治山関係等新聞まで加えるとどれだけになるかわからな

い。林学、林業に関係している人々は大抵いくつかの会団に属し、毎月何冊かのこの種の雑誌を手にし、そのためすくなくない会費を支払わされているはずである。

これだけ多数の雑誌がともかく、つづれずに続けて刊行されていることは、読む人はどうか知らぬが、買う人——義理から買う人もあろうし、なんとなく購読している人もあろう——が多数あることを示しているのであらう。それだけ林業、林学に関係する人が多く、それらの人々がまたそれだけ購読力をもっているものともいえる。ただそれだけなら、森林王国万歳で、正月らしく全くおめでたい次第であるといわねばならない。

しかし、各々の雑誌のガクヤ話はそうおめでたいものではない。早い話が、筆者にこのような雑文を書かせるという考えは、恐らく頭のよい、日林協の編集者が、向う鉢巻で考えた、クニクの策にちがいない。(暴言多謝)

なにしろ、同一の読者層をアイテにした雑誌ばかりだから、各編集者は、なんとかして特徴のある、よろこんでよんでもらえる、しかもタメになる読物を集めない、と、林業技術も〇〇も△△も、本の大きさとタテ書きか、活字の種類位しか差がなくなる。そうなれば、読者もそうタツブリお金をもらっている人々でもなかろうから、5冊の所は3冊に、3冊の所は1冊にケチッてしまいに違いないのである。それでは雑誌が成り立たなくなる。

しかも、文春とか平凡とかいつた一般向きの雑誌ならともかく、林業の「技術」をカンバンにした雑誌だから、下らぬ随筆や小説ばかり集めても能がない。やはり「技術」らしい論説や論文、報告をある程度のせねばならない。

とはいえ、この種のカタイものばかり集めていては、ツムジ曲りの読者はツンでおくだけで読んでくれない。そこがまた林学、林業雑誌のむずかしい点である。

特に筆者のやらされている林学会誌となると一段とむずかしい注文が方々から集ってくる。

元来、学会誌は会員の研究成果の発表機関だから、始めから終りまで、肩のこるようなむずかしいことばかり並んでいる。これでは旅行中とか昼寝の前にチョイと読もうというわけにも行かない。それでメンドクサイ人は全然読まない。イソガシがついている人はクダクダとかかずに、結論だけかいてくれと言う。もつとわかりやすくしてくれとも言ふ。林業家の中からは、あんな論文は実務に役立つとの抗議がくる。逆に林学の勉強をしている新進キエイのグループからは、レベルが低くすぎる。あれでは学会誌らしくないとの説も出てくる。

筆者も会長中村先生から編集理事の御指命をうけ、シ

マッタと思つた。夜逃げが出来ればしたいところだが、林業試験場の研究で俸給をもらっている手前、そうもゆかないので、トウトウ引受けたが、学会誌の編集は本気で考えれば不可能と答えざるを得ない。

先月もある営林局雑誌にこの不平をブチマケたものである。私は林学会誌の外に、日本雪氷協会誌と試験場の部内雑誌まで引きうけてしまつた——なんとお人よしであることだろう——営林局の広報係などと名付けた、本業編集者がうらやましい。私は研究の余暇に、これだけをやれと命じられているので、本業の研究は決してオロソカに出来ないのである。

その上、上述の如き、互にムジュンする両極端をうまくまとめるのは到底出来た仕事ではないのである。

そこで筆者はムジュンはムジュンとして、まず学会誌らしくすることにしたいと考えた。

ヤワラカイ読物や、カタイものをやわらかくクダクのは、他の林業雑誌にまかそう。そして、林業技術者には苦勞をしのんでも、カタイ雑誌をよんでもらう。林業技術の進歩がかならずこの中から生れるはずなんだから。と思つているのである。

林業技術とか林学とか言うものは多種多用の学問の集合なのである。ほんの20年ほど前までは、林学会誌の中のどの論文も目を通して、一応はナットク出来るものばかりだつたが、今ではよほどの博学の士でないと、毎月の論文を皆理解出来るはずはない位に分科してしまつた。それだけ林学が発達したのであらう。林業研究にたずさわっている筆者連も、3月に1つ読めればよい方である。だがそれで学会誌はよいのではなからうか？

学問、技術の雑誌である、寝ころんで小説や新聞を見るようなわけに行かないのは当然と考えてよく、また肩もこらずに読めるものなら、勉強にはならない。イソガしい人も、ヒマの無い人も、林学会誌がくれば、ヒマを造つて、全部に目を通して、自分の技術に関係のあるものだけはジックリよんでほしいと思う。そこに技術の進歩があるのである。

読んでわからないと言うのに2種類ある。文章が下手でわからない、字句がむずかしくてわからない、というのと、内容がむずかしくてわからないというのがある。前者は書いた人がわるいのである。それはなおさねばならないが、後者は読む人がわるいのである。学問は不連続的に飛躍することはメッタにない。林業家になつた当初から次々と読んでいけば内容がわからぬはずはないはずだ。

林学なる応用科学はそれに必要な基礎学の発達の不充分もあり、現今の学会誌の論文には直接実用にむすびつかぬものも勿論多いにきまつている。だからといつて、

それらの論文を下らぬものとは言いきれぬだろう。だが原子バクダンや水素バクダンが、原子物理学の如き基礎学から生れると考えただろうか？ 現在の基礎的、応用には直接役立つと思われる林学研究からも、近い将来にどんな立派な技術が生れるかわからないのである。多少は気永くみてもらいたい。

実際家が大多数をしめる林学会では、こんな大それたことをシャアシャアと書く編集子のやつている雑誌などゴメンだとお考えになるかもしれない。そんなメンドクサイ雑誌をよまなくとも、林業はやれるともお考えになるだろう。しかしそれは林業の後退である。なるほど、木を植えるのは子供でも出来、子供の植えた木の方がよく活着してよくのびることもあるが、これは林業に技術のいらぬことを証明しているものではない。まだまだ、われわれにわからぬわれわれでも自由に出来ぬ自然力が、林業の大部分を支配していることを示しているもので、もつと林学を進めねばならない証拠なのである。

どうもこれでは年頭の辞とはいえずうにないが、紙数も2頁をこえたので、ここいらでハショッて失礼しましょう。本年もせいぜい文句をたくさんつけて下さい。

☆

雑 読 雑 感

「函館弘報」弘報係長

脇 田 豊

私の読書には決まった本がない。手あたり次第眼にふれたものから、本の種類を問わず内容を問わず、文学ものであろうが政治ものであろうが経済ものであろうが、果ては映画スポーツを問わず全くの雑読である。書の良否善悪をいとわぬ、ただムサボリ読むといった具合である。したがってこれと云つて読書に対する一貫した方針もなければ、考え方も勿論なかつた。こんな調子であるから結果として専門的に奥深く蘊蓄を傾けることも出来ない。いつも中途半端な結果に明け暮れて居た。3年前北海道の大樹海へ志を立て、冬は陸の孤島然とした山の中の営林署に来たものの、中央に働く同門の朋友と次第にズレて行く時代感覚に気が付いて来た。何とかしていつまでも文化的感覚に接して居たい、請われるままに送る友の書に飽き足らず、次第に雑読に走つて行つた。黙つて居れば知らぬ間に流れて行く世の時の流れに、次第に遠ざかり遅れて行くのがわかる。この時が焦慮というものであり、踏み迷う一歩である。単純な雑読慾程無益危険なものはない。あらゆる書物の氾濫して居る今の時代に、悪書は良書を駆逐し、乱読はともすれば思想の流れに押され易いものである。こんな時5年前ふ

とした動機で始めたレツテルマニアが、又そろはじまり今度は主に山の中であるから、割合手に入り易い新聞の標題名句、そして広告の切抜きに転向再出発した。中途半端的な私ではあるが、これだけは不思議に興味も湧きやめられず、丁度スクラップブック5冊、今もつて続けて居る次第である。これだけは一番安価で手易くしかも概略ではあるが、速みやかに時期を逸せず私の望むすべてのものを教えて呉れる。この様なことが私のマニアに更に拍車をかけ、一番簡単な社会学の勉強法とも云えよう。

公務員という一つの限界の中に生きる私達は、ややもすると紙魚的な日常に陥らないとも限らない。

江差から約13軒今もつて鉄道の通わぬ北国の山村。冬季間は全く雪にとざされストーブを囲む蝦夷の山暮しは、ランプの灯が消えるように淡く寂しい。冬の日に生活の資を樹てる人々の現実、北国の冬の寒さと共にきびしいものである。時には郵便の馬櫃も遅れ勝ちというに至つては、足も目も失つたようになる。それだけに正月の休みを雪の山道を遠く江差の町より、好きな新刊書や新年号を買つて帰ることは、私には何よりも楽しいものの一つだつた。こうした期間を経て函館に出た私は、ただ集つて暮す無味無想な食べるだけの乏しい生活でも、やがては書を通じ文を通じ遠くの人にも近くの人にも、同門の志は人と人との結びを得て、次第に広く大きくそして強く知的向上により、低い生活水準も何とか方策を得、明るい明日の文化が生れる為に精魂を傾けたいものと念願して居る。

さて今まで続けて来た雑読法も、重要記事等一見して表現して居る新聞の見出し切抜きによつて、読書も整理された合理的な、そして重点的な方法でなければならぬと考えて来た。自問自答のあらゆる考えの結果、先ず第一に選書であろう。血となり肉となる食物と同様本もやはり自分の置かれて居る立場、そして目標に合致し指導的教示的であるものがよしい。人は読書によつて左右される感化力は大きなものであるというが、常に系統的にその専門の書を修養の書を読み纏めて居る人は、やがてはその書によつて得る結果の大きなことに気がつくであろう。遅々として目に見えないものであるが、それだけにいつの日何処かで発揮できる快事は、全く嬉しいものの楽しいものである。積み重ねてゆく読書の態度も立派な独学であり、書は教師であり無二の友である。昔からその人の交友をみて品性や性行を知るといわれて居るが、その人の愛読する書によつて、その人の人と成りを凡そ知ることが出来るわけでもある。

次に私の読み方であるが、新聞の重要記事の見出しや広告の名文句は、端的に一見してその大要を読者につか

み得る様書かれてあるので問題ないが、専門書とか経済雑誌等のように堅いものは、その内容を早く知るためには、朱筆をするとかチェックするとかしながら、毎日限定した時間内に何頁とか何行とか、繰返し読む練習以外にない。例えば1分間に何千字読んだ、1時間に何頁読めるとか時間と量のバランスを同時に縮小してゆくスピード読法の練習である。こんなことを考える時世の中はすべて勞せずば益なしの感がある。しかし新聞も勿論雑誌も見出し梗概によつてそのポイントを端的に速みやかに、読者に知らせることは重要であり、欠くべからざるものである。

こうゆうことを考える時に、機関誌、弘報編集の衝に当る責任の大きさを痛感し、その機関を表現する機関誌の品位向上、内容の充実に更に一層努力を惜しまないものである。

編集には未熟粗雑な私が林業人として、機関誌、弘報の編集事務に当る時、機関の発展の為に同門の士の進歩向上の為に、輝かしい林業振興の使命の一端であると自負して、明るく新春の訪れとともに、より一層自ら多読整読これ努めたいと思う。(函館館林局)

☆

阿蘇の景観を守れ

「暖帯林」編集長

弓 削 晃

熊本に転じて7年その間経営案の編成にたづさわつて来たが昨年広報担当に移つて林学技術から直接遠ざかり「林業技術」に対する意見感想等談におこがましいので南の阿蘇でも紹介して責任を果そうと思う。

直径7里半もあると云う外輪山の壁を周囲に廻らせその中央に冲天高く噴煙を上らせて悠揚迫らぬ規模の大きさ。びろうどを敷き詰めた様に美しい山肌を惜しげもなく陽に輝かせていつも心持よく私達を迎えてくれるその山容の優しさ。私達はその美しい円やかな山肌を登り乍ら童心に返り懐しさで一杯になるのだ。

秋!! 一面の稲田がさわさわと波立っている広々とした静かな黄金の湖を見下し、あちこちの森の梢だけが僅かに霧の上に浮び、ひんやりと澄んだ空気が足下に草の露となる。こんな平和な朝、放牧の牛さえも静かに佇んで動こうとしない。やがて黒々と聳えている根子岳の上に太陽が昇る。山肌の草原が輝き初める。阿蘇は他の山と違つて眺望が展けるのが特徴である。道はだんだんと急坂になるが、噴煙が頭上で私達を呼び踊る様に登つて行く。外輪の向うに見える連山の中に、久住の秀峰が一際高く聳え山又山が重畳と連なっている。気圧の変化を

耳に感ずれば、もう馬の背の下である。今迄のなだらかな草山が一変して、岩肌のざらざらした地肌となる巨大な馬の背の真中を、迂り落ちない様に登つてゆく。こちら附近から硫黄の臭いが鼻を衝き時には地鳴りさへ感じられ、石室があちこちにあり噴石らしきものが到る所に転がっている。小さな谷間を渡れば山茶屋で、もう九分通り登つたのである。この山茶屋迄は別に立派な登山バス道路があつて、バスも引切りなしに往復しているのでバスの利用者が多いが私は絶対に歩く事をおすすめする。阿蘇の真価を味わう為に。山上神社の横を通れば熔岩の最後のコースである。風向が悪ければ霧を被らねばならないが先ずそんな事は滅多にない。熔岩と火山灰と噴石のごろごろした道を只たぬ様に足だまりを見つけて一つ一歩々々登つてゆく。動かぬ雲の様に思っていた噴煙が、むくりむくりと確かに物凄い勢で噴き出しているのを見る。噴煙が陽を遮つて黒い影をおとすその岩肌を一歩々々踏み締めて登つてゆく。脚元を揺がす轟音と共に硫黄の臭いがクーンと鼻を突く。

遂に噴火口の縁に立つた。ズーンと頭の前から足の爪先迄太い鉄棒が貫く想い。放心!!無我無想!!息を呑み吐く言葉を忘れる。地の底より濤々と上つて来る噴煙は噴き出され、又噴き出され巨大な柱となつて昇り、煙は煙を巻き込み又巻き込み深い壁をつくり続けて飽く事を知らず、火口底に湧く硫黄の熱湯は沸きたぎり、そして沸きたぎる。尽きざる噴煙は意欲、沸きたぎる熱湯は情熱、焼け爛れて吹上げられる噴石は意志、噴出する蒸気は思考。永劫に消ゆることなく燃え続くもの。雨にも風にも負けざるもの。人間をして畏敬させるもの。そこに大阿蘇の大自然の偉大さがありそして人間の小ささがしみじみと感じられる。

肥後の阿蘇、否国立公園日本の名所大阿蘇もこの大自然の偉大さ、景観を呈しつつも28年6月の大水害にあの歴大な汚物を吐出し熊本を泥水で覆つてしまった。然し1年半前の惨禍などすつかり頭から去つてしまった様に今も尙変らぬ美と親しみを与えてくれる。だが我々は林業に職を捧ずる一人として、この阿蘇山腹の崩壊と溪流の侵蝕の原因を究明し急速に対策を樹立、防災に努める様施策をせねばならない。それが阿蘇へ来て郷愁を憶え母の懷の温かささえ感ずる優しい姿への恩がえしてあり又国民に対しての責任でもある。その意味に於いて二、三の荒唐原因の私見を列記し何とかして大自然の美を護り度いと思う。

(1) 森林が少く牧野地域で且つ傾斜地は地盤が膨軟であるので雨水が浸透し易い状態である。

(2) 山道、牛馬の足跡網に降水は集中されその割目から雨水は浸入し山腹は崩壊し易い状態である。

(3) 黒土層と赤土層との結合が悪く雨水の浸透により両層間が滑落し易い状態に置かれ、特に雑草の根網の関係で黒土層の表面に割目を生じ、此の割目に雨水が浸入して滑落を容易にした。

(4) 溪線に彎曲部が多く溪床並に兩岸の縦横の侵蝕を伴つた上に局部的にしか施工されていなかった工作物が治と崩れ去つた。

未だ未だその原因もある。究明すべき点は学理的に更に更に究明し、「南郷谷を守れ」の声高き現在あらゆる角度から対策を樹立せねばならない。

なだらかなスロープに穂すきが輝き、噴煙を背に立つ一幅の絵と、ブクブクと醜い岩塊と黒土をむき出しにした哀れな南郷谷の姿とを、私達は常に脳裏に秘めて阿蘇を見守らねばならない。

「大阿蘇の景観を守れ」と再び叫ぼう。

(熊本営林局)

☆

とかくこの世は

「月刊林材」編集長

桑 原 宏

昨秋の台風 15 号で、北海道の針葉樹が 5 千 5 百万石も倒れた。この風倒木の処分問題が色々論議され、本年度は 3 百万石乃至 5 百万石処分されると言われているが、この調子でいくと、大分立腐れが出来るとはならないといわれている。

実に勿体ない話で、北海道には自衛隊が沢山いることだから、この労働力を活用して、どんどん搬出して製品化し、一般の庶民住宅に使用するようにすれば、国民は助るというものだ。又この風倒木が一般建築用材として使用出来ないものであつても、パルプ原料として立派に役立つことが出来る。5 千 5 百万石のうち 3、4 千万石のパルプ用材が紙の原料として製品化された場合でも、一般国民は安い紙を豊富に使用出来る筈である。——しかし、現実問題として、こんなことはまず絶対に実現しないだろう。——何故だろうか、それは、そんなことをしたら、誰かがえらく損をするからだ。エノケンの言い草ではないが「とかくこの世は」損と得から成り立っているらしい。

林業技術の発展のためには、その基礎となる林学の研究と、それを具体化するための試験場施設の充実が先決問題となる。しかし、現在の林業試験場の施設はどうだろうか。昨年、林産研究所が 1 億円の予算で構内に新築されたが、その内容はどうか。僅か研究官 1 人あたりの研究費が年間 8 万円では一寸研究資材を買つただけ

でペーである。

家は建つたが資材がない。資材が揃えば薬品がない。薬品が来たらと思えば、研究費が切れた。研究官の給与が低いのでオチオチ勉強も出来ない。——こんな状態の中で、学者の夢を実現化し、林業技術の向上の基礎が生れようとはどうしても思えないではないか。一体こんなわかり切つたことを何故放つておくのだろう。

日本は貧乏国だという。しかし、この貧乏国の中で、汚職とか何とかで何千万円もの金が個人の懐の中に流れこんだり、それを取調べる検察官が「職務上の秘密だから言えません」と言わざるを得なかつたり、役に立ちそうもない兵隊がウヨウヨと出来て何億かのムダめしを食つていたり、いやはや、実に不思議な貧乏国もあつたものだ。これでは日本は貧乏国ではなくて、クルバー国といわれても仕方がないではないか。

又、一步ひるがえつて、何かの間違いで林業技術の向上のための補助金がドカッと来たとする。研究者は生活が一応安定して、基礎的研究が着々と進められる。実験室の成績は上々である。新しい機械が續々と考案作成される。——ところがである。これが実験室で研究室で研究されている分には一応差支えないが、一步実験室を出て、世間の空気を吸うとなると、大変問題が起る。

伐採から搬出、搬出から製材といった一貫作業が、優秀な機械でチャンチャンやられると、まず第一に人手がいらなくなる。失業者が出る。その次に伐木夫が手で伐つていた仕事を機械でやると、倍も 3 倍も能率が上がる。この倍も 3 倍も伐り倒した木を歩留りのいい製材機でひくとなると、木材市場に流れこむ材木の数量は現在の倍も 3 倍も又それ以上のものとなる。この影響はどうなる。山の立木価格が下つて、市場には製品がダブツキ材木価格も下げざるを得ないことになる。一般国民にとつては、こんな有難い話はない。どんどん木材の値段が下つて、1 人でも多く自分の家が建てられれば、これに越したことはない。ところが、山持や木材屋はそうはいかない。自分が損するとなると眼の色を変えて騒ぐという訳である。

そこで、政治屋を使つて、政府に働きかけて「試験場なんかそんなに予算をさく必要はない。そんな無駄な金があるなら山を緑化する補助金をふやせ」ということになり、折角立派な研究をして林業技術の向上を計ろうとした試験場は又元のもくあみになるという次第である。

「さてさて、人の世は住みにくい」と漱石のように大悟徹底して、屋敷でもしておれば天下泰平であるが、迷惑するのはいつまでたつても家が建てられない一般庶民である。

一体こりや、どうしたことだろう。つくづく考えてみる必要があるのではなからうか。

民主主義の原則からいえば、多数の意見に少数が従い、多数の要望が少数の要望よりも優先する筈である。ところが、わが日本国に於ては、最近どうも少数の意見が多数を押え、少数の要望が多数に優先するように出来ているらしい。これではいつまでたつても日本国民はうだつがあがらない。又林業技術の向上も考えられない。

まず年頭にあたり、ちよびり民主化した日を更らに本物の民主主義に育てあげ、一般庶民のために林業技術の向上を計つて頂くよう希求する次第である。

☆

天 衣 無 縫

「防長林想」編集長

福 間 俊 正

興林会時代からお馴染の本誌が、今やわが国林業専門誌の最高峰であることは嬉しく、心から敬意を表すると共に、その伝統と栄光保持のために、一段の御健闘を願つて、年頭の祝詞といたします。

物言えば唇寒い年輩となりながら、言わざれば腹膨るともいうから、天衣無縫に、与えられたスペースだけの机上雑感を書かさせていただきます。

○林業会館の建設に鞭打つ

ラジオの落語で声ばかりでは味がない。お役人は上京しても林野庁というレッキとした親元があり、拠り所があつて事欠かないが、団体人ともなれば、個別の親元があるにはあつても、屋合骨が小さい。況んや僅か3日間の帯京で、天下の林業展望に永田町に日参したり、四谷の坂を登つたり、大崎に遠出したり、天沼の住宅街で戸惑っていた日には、世界の大勢には逃げられるし、懷中はウツロになる。

今や中央林業団体も十指に垂んとする。何を苦しんで群雄割拠の傾をわれわれに強いるかというのである。敢て輪魚の美を望むものではないが、スッキリとした中央各種団体の総合的牙城を建設して、その足場を築き、足並を揃えることも、広い意味での林政推進ではないか。

○第六感を交えた食糧輸入と木材輸入

生長量を割つての伐採が森林を悪化し、国土保全上許されない絶対条件だとしたら、累年の過伐を見送つておることは、政治の欺瞞であり、技術的自殺である。国土の保全上ある仮想量の蓄積を持つ森林の状態を必要とするものなら、その仮想蓄積の限度において、有効利用材

積は零でなければならぬから、現在の国内伐採は素晴らしい限界侵略である。

ところで、従来の慣用語の「蓄積」とは、所謂文字通りの総蓄積を意味し、現在国内林木蓄積を60億石と公称するからこそ、一般人はその歴大な数字に眩惑して伐採に気をゆるめるのは人情である。それは一般人に前述の零の限界点がハッキリしていないからである。

そこになると、わが国の食糧事情は、零の限界点が算式的にハッキリ掴めるし、林木のようにマイナスの収穫というものが許されないから、国民を飢餓から救うためには、余剰農産物のオコボレ頂戴の繰もハッキリ出て来るというものである。

この木材危急、国土廃退を救うためには、外材、就中北洋材の輸入がテスト・ケースの時代であるべきではない。われわれは、仮令牛肉がどんな高価だからと言つて、自分の股の肉を切つて食う訳にもゆくまいではないか。

○英雄出でよ

日本のように木材依存度、濫費的需要度の高い国柄で、ほんとうに現代の林学が教えておるような理想的な林型や、森林の復興ができるかということに疑問を抱くのは、小生ばかりでもあるまい。戦後の統計は知らないが、昭和12年頃のマッチの国民1人当り1日の使用量は独逸の2、3本を最少とし、日本、支那の6、7本を最高としたように記憶しておる。おそらく現在もわが国が最高記録保持者であることに間違いあるまいが、それが、概ね喫煙用だと聞いては、わがペンはハタと止まる。

なんとしても、林木の成長は、現在の段階では、自然的依存の曳長オンリーであるに引換え、経済進展の急ピッチに伴う木材利用速度の飛躍は、余りにも比較考慮に堪えない。加うるに、民族的情性がこれを督戦するのは、拮抗してゆける道理があるまい。

この濫費的国民の需要度を制扼しないで、或は滔々たるこの加速度的経済進展の事実を度外して、わが王城を護り抜くことの如何に至難であるかということを、真剣に悲しむものである。(山口県森林協会)

☆

森林への理解と反省を

「みやま」編集長

清 瀬 豊 明

時は眠っている間も刻一刻と過ぎ去つて行く。昭和29年という年は不幸にも九州を始め全国土に亘つて戦後最大と言われる予想外の災害をもたらし、殊に北海道の如きは吾が林政史上且つてなき未曾有の大被害を蒙り怨み

を残しつつ本年は去つていつたのである。まつたく怨の深い年ではあつた。

然し昭和 30 年はここに我々の前に新しい希望を乗せてやつて来たのであるから過去の事は一切を忘れて我々が、その時の歩みと共に日の進みと共にお互のより住みより恵まれた世界の再建に打ち勝ち過ぎ去つた不幸を繰返さぬよう努力することこそ、これが人間の勤めであろうと私は考えるものである。

人々は各々その社会の一員として様々な任務をもつて人生を送っている、その任務を職業といっているのではなからうか。我々は林政に関係する職業を通じて人類の幸福への努力を続けるべき任務を負わされている。

ここに年の初めに当つて思いを新たにし、少しでもよくその任務の果し得るよう考えて見たい。我々林政関係に携るものは官民を問わず林業を振興し、従つて森林を立派に育てることは、我々人間社会に用材、燃料、食料、衣料等にその経済生活に必要なものを供給するばかりでなく、人間の生命、財産を天災より救う事に役立ち、健康の増進に健全なる精神の涵養に数へ挙げれば限りないといつてもよい程、人生に対する効用があるものである事は誰れも承知の事であろうが、さて真実に縋ての考がそれを理解しているだろうか、疑わざるを得ない場合に我々はしばしば遭遇するものである。

森林を愛し山に親しむ筈の登山家の火の不始末をして山火事を起したり、石油石炭が足りないからと云つて枯涸の方向に向つて急速に進んでいる森林にその不足をしようせよと云ふような計画を立てたり、森林育成の意欲を減退させるような重税を課すると言うような原案を立てたりする為政者たち、国家や地方の政治に於いて森林乃至林業に対してその存在目的（使命）に合致するような方策を立て、これを実施しようとする夫々の行政が森林行政であり林政であるならば前述のような問題を解決して行かなければならない。それには広く林業関係者以外の一般人にも理解を深めなければならぬと信ずる。

私は度々公務出張途中、汽車に隣り合せて乗つた御客に話しかけて見ても案外無関心でいる人が殆んどである狭い国土に 8 千万も人間がおし込められて、あくせくと生存競争をしているので、自分の事以外は知らないとおつしやるかも知れないが、案外にこれは自分の事であり、我々日本人全体に振りがかつて来る大きな問題である。山が丸裸になつてこんなに年々大水害になつたり又愈々木材がなくなつて高い外材を高い運賃を出して買わなければならなくなつて厳寒の候に「コタツ」の火がない、水源は枯渇してダムが効用を失つて電気も供給が出来ないということにでもならなかつたら気がつかないのでは、あまりにのんびりしすぎると云つてよからう。そ

んな事になつてしまつてからでは最早でおくれである。少なくとも為政者は先きを見透して今直ちに真剣に林政に思いを致すべきであらうし、全国民にその事を知らしむべきであらうと私は信ずるものである。然し為政者といへども「水を治めんとすれば先づ山を治めよ」という言葉は知つているが、さて具体的にはどうすればいいのかとなると、なかなか解らない。解つてもらふ努力をする役割をもつのが、我々林政関係者でなくて誰がいよう。「山に木を植えればよい」と簡単にいつても、それには色々隘路がある。障害がある。又植えただけでは木は育たない。手入が必要だ「手入を必要とする」そんな事さえ知らない人が案外多い。笑いごとではない。現にこののである。年中行事の一つとして毎年 11 月頃になると何処かの果で行われる全国山林復興大会並に 4 月に行われる全国の緑化週間等で関係者が数千名も集つて決議した種々な問題を只お祭り騒ぎに終らさずに実現するように努力をせられたいものである。ここに為政者並に林業関係者の各位の反省をうながす所以でこれが私の年頭の所感である。（大阪営林局）

毎年の山林復興大会の種々な決議事項の抜萃

1. 国土保全と災害防除のため治山事業の強化拡充と保安林の整備を期する。
1. 森林資源の培養と開発及林地の高度利用を図るため林道網の拡充を期する。
1. 森林資源の育成のため造林の促進と樹苗需給の円滑化を期する。
1. 森林計画の適確なる運営を期する。
1. 森林所有者の協同組織たる森林組合の育成強化を期する。
1. 林業技術研究普及体制の整備拡充を期する。
1. 林業金融の拡充強化を期する。
1. 林業税金の適正化を期する。
1. 林政機構の整備拡充を期する。

☆

北方林業の確立をめざして

「北見林友」編集長

山上 太一郎

北海道北見国とはその名の通り北海道の中央山脈を背にした北向きの箇所河川は全部オホーツク海に流入し当局所管国有林がこの流域の大半を占めている。

亜寒帯に属しトドマツ、エゾマツを主体とした森林地帯で海岸沿線は殆ど開拓され脊梁山脈を中心とした地帯に多くの森林が分布している。針葉樹 60% 広葉樹 40%

の森林蓄積は全国有数の針葉樹地帯を示し、単位面積当り蓄積は 155 m³ を有し長野営林局と同格で全国第 1 位をほこっている。

トマツ・エゾマツの天然更新良好なる林地が所管面積 45 万町歩中 20 万町歩余を示し、択伐作業による更新成績もほぼ所望の形態に進みつつある。

併し残された 20 数万町歩の森林育成や更新良好地の撫育促進等吾々に負荷された仕事は頗る多く千有余人の職員を中心として経営の完璧に邁進している。

従来北海道の林業は開拓に重点をおかれたため主として収獲業務が林業経営の大半である如く扱われたきらいがあつたが、林政統一以来逐次経済の安定を見ると共に森林資源の涸渇を認識されるにつれ植伐の均衡と造林の推進が叫ばれ林業経営の本来の姿に立返つたのである。

ために天然林依存主義をかなぐりすてて、如何にして保続すべきや、材積生長の促進はかくあるべしと真剣に経営の問題と取組んでいるのである。

殊に本年よりは林野庁において、北海道の国有林強化整備に重点を注ぎ、今後年々数億の財を還元され、本道森林経営の基盤確立に努力せらるるようになった事は、北辺の地に働く吾々にとつて誠に欣喜雀々たるものがある。

本州における林業経営は長年月にわたる諸先輩の経験の集積を体形化されたものであらゆる面に無理なく運営されているが本道においては発展の歴史も浅く各部門にわたつて今後に残された問題が頗る多い。

生産事業の機械化、育苗造林事業の推進、林道網の強化等今後の活躍にまたねばならぬ問題が多いがそれだけに各部門共に新分野の開拓に挺進し一步一步北方林業経営の体形を形づくりつつあり、且つ本州林業の遺訓を学び無駄の少ないき進歩をとげつつある。

大きな仕事を立派に仕上げるためには中央の理解ある認識と現地のたゆまざる努力なくしてはその成果はあがらないのであるが此のたびの本道国有林の整備強化は「必ずよくなるぞ」「必ずよくなるぞ」の気分を振いたたせたのである。

当局に於ては既に待望の長期計画もたてられ、理想と希望実現のため第一歩をふみ出した時に今次の 15 号台風の前古未曾有の風倒被害に見舞われたのである。

瞬間最大風速 43 米と言われる今次の台風はまともに風に吹きつけられた処は殆どと言う位に倒され流上、置戸営林署においては数千町歩にわたり全滅的被害を受けて見渡す限り 1 本も立っていないと云う惨状である。

当局において約 930 万石全道で 5,600 万石と称され調査の進むにつれて漸増の傾向にある。

併し吾々は天より与えられたる一大試練と考え、直ち

に風倒木の処理問題と真剣に取り組んでいるが特に懸念される事は山火事、虫害等の災害である。

一度びこれらの災害発生せんか。森林成立の根本を危くするものであるので、林業技術総陣あげてこれが対策に腐心している。

吾々のかくの如く苦心努力することが北方林業発展の礎石となり大理想実現の一日も早からんことを祈つて年頭の辞とする。

☆

つ づ く 雑 誌

「林業解説シリーズ」編集長

加 納 一 郎

丸善でエヴェレストの写真の展覧会があつたとき、それを見に行つてつぎのように思つた。一つ一つの写真はこれまでに見たことのあるものばかりで、別段あたらしい感興をひかなかつたが、ひつそりとかこまれたひとくぎりのなかに、11 回にわたる登攀のあとが年代順にならべてあり、顔なじみの隊長や隊員の姿が目にとまるにつれて、エヴェレストの登山史よりは、その 33 年にわたる自分の過去が思い出されて来て、ひと気のないうちに、ずいぶん長く自分はそこに立つていた。エヴェレストの第 1 回の登山は 1921 年であつたが、その時、自分はまだ学生で、隊員ケラス博士の死を感傷的にうけとつたことである。第 3 回の攻撃のあつた年には、もう学校を出て役人生活をしていたが、日本の冬季登山のリーダーとして気おつていたところで、頂に向つたまま不帰の客となつたマロリーとアーヴィンのことをアサヒ・スポーツに書いたりした。それから何回かのエヴェレスト登山は、新聞社のなかで、自分がそのニュースをとりあつかう立場におかれ、編集局でのその時々自分の部処などが思い出された。またそのたびごとに隊長の名で出る報告書にかじりついては、山仲間といひる語りあつた夜のこともよみがえつてきた。そうした友人のなかにもう故人となつた人もあるし、また自らヒマラヤの氷河をふんで、彼らが気づかなかつたすぐれた観察をして来た人もある。そのあいだに自分の生活は札幌～大阪～札幌とうごき、15 年のブンヤぐらしからまた役人のはしくれにまいもどつたりしたが、山と原稿紙とからは、1 日も離れなかつたことがしみじみと感じられたりしたのである。

このあいだ北大の山の会のあつまりに出て、ひとことしゃべつたら、いまの加納の話はプレカンブリアのことだと、ひやかされたので、気がついてみると、自分より若い人ばかりだつたのでこれはしまつたと思つた。◀四

十、五十は鼻たれ小僧」といわれるその仲間では自分はあるとしかと心にいいきかせているつもりであるが、ついうつかりすると、20 年まえは、30 年たつと、と口に出る。白水社から出た《山岳講座》5 巻は大そう評判がよかったが、それより 19 年まえに共立社からおなじ名の《山岳講座》が 8 巻でている。そのほか昭和 17 年には《登山講座》というのが 6 巻になっている。30 年間に 3 度でたおなじような講座に自分はいつもひつぱり出されて、そこはかとなく筆をとっているのであるが、いま思いついてその三つの本をとり出して筆者の顔ぶれをくらべて見ると、出頭没頭、転変のさまがありありと示されていて、まことに感慨がふかい。

もつともこんなことは山の本に限つたわけではなく、雑誌のバックナンバーをくりひろげているときに、しばしばそうした情景にうたれるものである。いまはしりぞいて学問の余香をたのしんでおられる白頭の翁の壮年時の卓説高論を、ちりをはらつて開いた古文獻のなかに見つけて、そうだつたかと眼がしらのあつくなるようなことがあるものである。

それにしても近ごろの林学林業関係の雑誌の繁昌ぶりはどうであろうか。林業手帳の林業関係団体というところを見ると 49 の名前が出ている。かりにこの半分の団体が、大なり小なりの機関誌をもつていても大したものである。ローカルなのは論外として、皆とはいわないが、これらの刊行物のおおくは印刷も編集もまことに稚拙なもので、きちんきちんと出ているのはすくない。何千部と刷り、時には万をこえる部数を製作しながら、専任の編集者もしくはがつつちりとした編集スタッフをもつていものは、はなはだまれで、出たとこ勝負の気まぐれ編集というのがおおく、したがってまた浮沈つねなく、巻数も号数も若い。いいふるされた言葉であるが 3 号雑誌 5 号新聞といった境地をぬけていない。

そのなかにあつてここに雑誌《山林》の長さをたたえたい。これはもとの大日本山林会報で、その初刊は 1882 年であるから今年で 73 年になる。American Forests が 60 年。イギリスの Quarterly Jr. of Forestry が 49 巻であるのにくらべると、ずっと先輩で、林業誌ではこちらさまの方が 10 年も 20 年もお先に出発しているのである。《山林》はちょうどハンブルグの Forst Wissenschaftliches Centralblatt より 1 年おくれたということになる。申すまでもないことであるが、フランクフルトから出ている Allgemeine Forst u. Jagdzeitung はあけて 126 年をむかえるのであるからドイツにはかなわない。スイスの Schweizerische Zeitschrift f. Forstwesen も 106 年と数えられる。

専門はちがうが、ロンドン季刊の Royal Geographical

Jr. には《毎号 100 年前の本誌から》という欄があつて、1 世紀まえの自分の雑誌からの 1 ページを採録している。世代にまたがる視野をもつた編集ぶりには頭が下る。こればかりではない。またエヴェレストの話になるが、1953 年の初登頂の正式報告のほかに、ハント隊長は学生版、少年版を著して、彼らの功業をわかりやすく、すなおに次代の人たちに伝えている。教科書に名前をかして小使かせぎをするにとどまる日本の学者とくらべて、イギリス人がこのようにゼネレーションを育てるために力を傾けるのは、まったく敬服に値する。

この雑誌もそうであるが、おなじくアメリカの地理の雑誌 National Geographic Magazine も、自分がはじめてそれを手にした時から今もおかわらぬ表紙と形をもっているのもなつかしい。もちろん中味は一号一号目に見えてすすんでいるが、アメリカのこの雑誌の編集者は、いまちよつと名前をわすれたが、編集責任者としての 50 周年を記念する催しをもたれたということをきいた。何ごとであれ、一事一業 50 年というのはめずらしいが、編集のことなど誰にでもできると余業あつかいにしていると、その雑誌は、ひよろひよろとしか歩けないことは事実である。

ひよろひよろであるかないかは別としても、とにかく一つの雑誌が 50 年とつづいたとしたら、ほむべきかな、である。日本の学術雑誌のなかにも、地学雑誌をはじめ、そういうのがいくつかあるはずだが、日本学術会議あたりは、こういう雑誌なり、発行母体なりを、ほめたたえる方法を考へてはいかがと思う。もしまたユーダイヒが、ターラントの山林誌を 29 年もつづけて編集したような例が、こちらにもあるとすれば、そうした人々にも礼をつくすことを考えたらいいと思う。

☆

「林業技術」に注文する

「資源」編集長

坂田 善三郎

10 年ひと昔というけれど、今から 10 年前の昭和 20 年には、マライの奥地に入りこんで、南洋材の集材と輸送に汗を流していた。マライの正月は暑い。万にそなえて中型のコルト拳銃を腹巻きの所にかくして現地人の部落を訪ねた。今の三菱商事の取締役金子さんが当時は三菱のシンガポール支店長代理で同行された。マライ半島西海岸のマラッカの町の少し南方から半島の中央山脈に入つた。

あの頃は木材の生産面——というよりむしろ伐採——だけを考へていればよかった。天然の更新も、適令伐期

も、造林もあつたものではない。いかに伐採し、集材し、搬出し、輸送するかだけだつた。原始林は無限の蓄積をもっている。ラワン^{ラワン}の巨木がうつそうとそびえ立つ熱帯の原生林、ほのぼのと空が明るみかける頃には、幾十種とも数え切れない鳥の啼き声の協奏楽だつた。

マライ半島の東海岸やスマトラ島の中部からも原木をシンガポール（当時の昭南）にあつめた。今の林野庁の石谷業務部長も当時応召で木材集積に當つておられた。昨年、樺太材、沿海州材の交渉のためソ連に入国された永和商事の石黒常務も当時は三菱のシンガポール支社長代理で集材に活躍していた。スマトラの木材は、安宅産業と当時の日木が担当していた。

いくらトソ機嫌の新年だといつても、こんな思い出ばかり語つてもおられぬ。編集部^{編集部}の注文は日本の林業及び林業技術^{林業技術}をどのように——どのような角度から、何を中心に——取上げて行くべきかということだろう。

毎号「林業技術」を読んで、地味ではあるが、真面目で、実のある雑誌だと思う。林業関係の雑誌でも「グリーンエイジ」^{グリーンエイジ}はいわば、企業の経営者あるいは、事務屋さんを対象として考えているようだが、それに対して本誌は全国の営林局、営林署関係、会社にしても、木材部の中の技術面の方々を読者とされているようである。その意味では私の方の「資源」などと違つて、読者の範囲は限定され読者層がはつきりしている。対象としての読者が明かなことは、取材編集上は一応都合だ。しかし材料（原稿）のあつめ方と料理の仕方（編集）に枠がはめられ、一つの軌道にのる。そこでややともすれば誌面が固定化し、偏つて、マンネリズムに陥りやすい。

誌名の「林業技術」にこだわらず、もつと林業周辺の問題も取り上げてもいいのではなからうか。

森林にはいくつかの面ないし性格が考えられる。第一に、原料資源としての森林である。これはいうまでもなく、林業の中核である。土木、建築、用材、家具用材、坑木、枕木、電柱、及びパルプ用材等の供給源としての森林である。第二は国土の保全の中心としての森林である。林学関係諸学科の中でも、治山に関する講座は、歴史が浅く、明治の40年代になつて、始めて東大に設けられた。とくに戦後の相次ぐ出水によつて、森林の保全機能が、強く再認識されつつある。保全の面からみた森林には、(1)土砂流出防止の機能と(2)保水機能、(3)風蝕と地表温低下防止のための防風林の機能、(4)その他防霧林などの動きがあげられよう。中でも(2)については当初雨水の流下をおさえる働きと天然に更新する水資源の涵養保全の働きとが考えられる。電源としての水力、灌漑用の水、工業用水及び生活用水等は一にこの働きに依存する。

第三に、さきあげた産業林の性格に近いがより間接的なものとして、薪炭林や魚付林の機能がある。

第四には、風致、観光の役割りをもっている。

これらのうちの何れを中心とし、どこに重点をおくべきかは、読者の選好と、編集の方針によつて自ずと定められるであろう。ただ、私たちいわば、林業技術外のものは、このような周辺の問題にも興味をもつ。

さらに林業技術の内部の問題としては、蓄積量や生長量の調査、さらに調査の方法にしても、もう少し、科学的あるいは近代技術的な方向へ近づくことが希望されているようだ。一般には林業統計はまだまだ信頼度が低いものと考えられている。そのような点が何によるのかを掘りさげて行くのも、本誌の使命の一つかも知れない。筆者は、昭和17年にN県のM営林署で、奥地の——といつてもそれほど深い山ではない——国有林の調査が不十分で、実態が把握されていないのに一驚した体験がある。

また、林業技術の日本での発達史、とくに治山との関連における古くからの技術史、古い時代の各地の林業経営家の事績なども連続してのせて頂いたら、非常に面白い誌面が構成されるだろう。これは技術の内部の方々にも、外部にも共通して興味ある記事の一種だと思われる。

以上を要するに、林業技術の横の関係、林業と治山、林業と農業、工業、漁業、林業と人間生活、林業とリクリエーション等が一つの柱となり、さらに林業技術の歴史的な縦の関係についての究明や解説がもつとどしどし掲載されるように望んでいる。

（総理府資源調査会事務局）

☆

編 集 雑 感

「王林」編集長

真 宮 次 雄

今回「林業技術協会」から、何か年頭の辞に代るべきものをと言う御注文であるが、浅学重才の身が敢て林業界の諸問題に愚論を吐く鳥番がましさを避け、一会社の小雑誌「王林」の編集を担当して見て、編集というものに対する無駄話を綴ることによつて責を盡きたいと思うのである。

こんな話を聞いたことがある。某大家が嘗て秘密の手紙の末に「御一覽の上丙丁子に御附し被下度候」と書いて差し出したのを、受取つた人は誰彼の別なく公表した。公覧に供して呉れと解したのである。所が此の意味たるや、丙丁は「火の兄、火の弟」で、読後焼却して呉

れとの意味だと言うのである。文字に対する認識の不足である。

又こんな川柳がある。「姑のつむじは尻になつて知れ」。この尻を尻に間違えたらどんなものであろう。「尻になつて知れ」では如何に妄想を逞くしても見当が付き兼ねる。誤字が生んだナンセンスになる。一句の解釈如何に依つて反対の結果となつて現われ、一字の誤りで全く文意を掴み損う。校正はまつわる文字との斗いが如何に重要なものかを言いたかつたのである。何事に依らず一つの仕事を纏め上げるには少なからぬ努力が要る。そして其の努力が大きければ大きい程完成の喜びは深い。

編集という仕事は、原稿を纏め上げればよいと言う点に於て、一見甚だ労作の少い平凡な仕事の様に思われるが、イザその衝に当つてみると、思わぬ障碍が至る所で出て来るものの様である。「馴れる」ということは、よく「狎れる」ことと対象されるが、「王林」の様な社内雑誌では殊に、「馴れる」とだんだん情性が伴つて、所謂「狎れ」て来ることにプレーキをかけるには、常に斬新な創意と、向上への撻めぬ努力が要る。どの論題を何処へ持つて行くかと言う配分の巧拙は編集上の大きな課題である。此の雑誌のモットーである「楽に読める本」にしようとするれば、硬軟、長短、難易、宜しくその配分の妙を発揮して、読む人に一呼吸入れさせてやる間隙も作つてやり度くなる。バラバラとめくつて、その儘伏せて了われる様な本にはし度くないと言う、よい意味での慾も出て来る。

「王林」の創刊は昭和 16 年であるが、その第 1 号の中に次の様な名調子が出ている。

「蒔付」と題して、

種子を播くには風ない日和、厚い薄いが無い様に。

「床替」と題して、

人の心と檜の苗は何時も表と裏がある。

「森林愛護標語」と題して、

山が赤けりや河原は白い、やがて百姓は青くなる。

言つてみれば平凡な林業常識の俗諺化に過ぎぬのかも知れないが、何十年來山と四つに取組んで来たその道のベテランが、微薫を帯びて、尙絶ち難き山に対する愛著をこんな唄として口ずさむとすれば、誠に微笑ましく、奥床しい風情ではなからうか。之を一呼吸入れさせてやる編集上の間隙といたいのである。

締切まで出揃わぬ原稿に対する焦燥も、不満も、「尻と尻」に類する誤植を発見して、独り禁じ得ぬ微苦笑も、「狎れる」を避けて「馴れ」んとする努力も、やがてよりよきものを作り上げて行く一つの過程として、渾然融和した快よい追憶の後味を残して行くのが、編集で

ある。その意味に於て、玉石混淆の多数原稿の中で、石になる事を敢て承知しつつも此の拙文を認めている私には、「林業技術」編集担当者に心からなる慰勞の辭を呈する資格と義務がある様な気がする。(王子造林会社)

☆

防 波 竹 林 と 友

「高知林友」編集長

長 井 英 照

学窓を出てから 20 年振りに出合つた友人 T 君は阪東太郎で人も知る利根川中流改修事務所長になつて、帝都を利根川の水魔から防ぐ要職現場を担当している。

数物料を得意とした T 君は土木工学を専攻し、大学卒業以來各地の重要河川の現場に勤務していることを同窓会名簿で承知していたが、御多聞に洩れず戦時中お互に文通もとだえていたのに、フとしたことで邂逅の機会を得て、20 年間の話題を語り合つた後で、一寸職業意識を発揮して、利根川の大橋梁を通行止めをしないで、コンクリート橋脚を 2 米突つぎた土木技術は素晴らしいものだねと賞讃の辭を述べた処が、T 君は即座に、困つたことには、毎年 6 程位の洗砂があるので 20 年もすれば又駄目になるのだよ、それと謂うのも水源地域に広大な禿山がある。足尾銅山一帯だ。林業技術者があれを緑化して呉れなければ、土砂の生産場から洪水の都度流下土砂が堆積する。成程 CO₂ の害毒で植林しても成林の見込がないことが多年の実験で解つて居るのなら、雑草でもよいから荒蕪した斜面をカバーする方法はないものだろうかと鋭い質問を受けた。利根川の支流渡良瀬川の水源地約 2 千町歩は煙害のため一木一草を見ぬ荒涼たる裸山である。明治時代から各種の試験植栽をしているが激害地には石垣が残るばかりで、オオシマザクラ、ヤシヤブシ等も殆んど見受けられない惨状である。

彼は下流の工事に如何に国費を投じて、水源が治まらなくては、安定した施策でないと言ふあたり大いに同感だ。

以前足尾に降つた雨水が中流に達するのに 24 時間かかつたのに、河川改修工事が出来てから 3 分の 1、8 時間で急行到着するため、土木技術者としても考えさせられる問題点があるらしい。

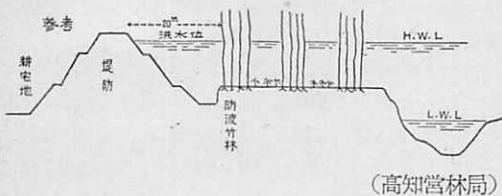
明治末期に洪水調節の目的で中流地帯の 2 ケ村を水没地として立ちのかした 3,600 町歩に亘る大面積の渡良瀬遊水地はカモの餌場で有名であるが、上流からの土砂の沈積で遊水の効能は半減されている。通水をよくする目的と遊水地の堤防のカサ上げのため 1 千馬力の浚渫船が河底掘りに當っている。この仕事で T 君の頭を悩まし

ている問題がある。それは増築した堤防は満水時に於て、暴風があると丈余の波を生じ洗い壊される危険がある。この保護対策として、新設堤防前面（堤外と称し、河川敷内）に防波の植林をしたいが、樹種を選定し、実行してほしいとのことだった。

防波林とは今まで聞いたことがないが、T君の着想は確に面白いので係官と協議の末、京大上田教授の指導を得て生長の早い、耐水性の苦竹、落羽松、メタセコイヤを10町歩植栽してみた。5ヶ年計画で突飛な事業をやることにしているが、林業技術者の面目にかけても成功させたいと、栃木県庁の林務職員が張切つて担当してくれている。

自分は技術者の横の連絡こそ再興日本の建設に必要なことではなかろうかと痛感する。

5ヶ年後否10年、20年後に、巾100米延長5軒に亘る防波竹林が成林して、カモ猟場が雀焼の本場になる日を期待している。



☆

林業技術と木材加工技術

「木材工業」編集委員

平井 信二

雑誌「木材工業」の編集委員としての抱負とかいふことになると思面倒となるので、ここでは個人の放談としてお許しを得たい。放談とことわつたわけは表題にあげたようなむづかしい事柄についてとても系統だつた明快な論旨はたてられないし、まだまだ未熟な考え方と思うので、思いつくまま勝手なことをいいたいとの我儘からに他ならない。

さて我国の木材加工技術は第二次大戦終結以来かなり目覚ましい速度で発展したと思われる。なぜこの進歩が印象的であるかについては、戦前、戦時中に海外と全く隔絶されていたのが、急に目を開かせられ、また取り入れられたために際立つて感ぜられること、我国でも戦時に木材資源の高度利用に関心がもたれ、近代的生産技術の訓練を受けたこと、木材加工製品の経済的重要性が相対的に高まつて来たことなどに対し、これまで多少なりとも下積的に蓄積されていた諸々の技術の根拠が丁度波に乗つたように表面化して来たことにあるのではない

かと思う。理由はどうであれ、とにかく最近の進歩がかなり急ピッチであることは否めない。そこで云いたいことは現状では木材加工技術はもはや林業技術という範囲では扱えない処に行きついているということである。

この事について先ず技術の基をなす学問のことに關して考えて見よう。つまり林学と林産加工学の問題であるが、この両分野は学問的にかなり異質のものと考えられる。即ち林学は土地生産学であり広い意味の農学の一部であるが、林産加工学となるとむしろ工学の意味の方が遙かに強い。勿論両者の間に密接なつながりが必要であることは当然としても、これを強調するあまりにその実体を見失つてはならない。未開の分野で異質のものが雜然と混つている時期があつても、進歩すれば分化するのが当然であり、林学と林産加工学ではそろそろその時期が到達しているの感が深い。

次に教育關係のことに一寸触れて見る。北海道大学では既に林学科と林産学科が分離し、東京大学では十数年来林業学・林産学両専修課程にわけられ目下学科分離問題が論ぜられている。また他の大学でも大学院のコースは林学と林産学が大部分別のようなのである。

さらに技術の働く産業分野について見てみよう。いうまでもなく林業技術は国有林やその他の森林經營（国土保全關係も含めての）の面で働くものであり、木材加工技術は木材工業界に働くのであつて、これまた甚だしく違つた分野といわざるを得ない。木材工業に関する行政的所管が農林省にあるべきか、通産省にあるべきかの議論は暫くおくとしても、少くとも農林省で扱うつもりならば現在の林野庁に対等する位置の組織と陣容を拡充してあたらなければ到底手に負えるものでもなく、今後の効果的発展も期し難いであろう。

甚だ観念的な理屈のようなものを並べたが、ここでもつと具体的なことを提唱したいと思う。

第一に林産学会（または木材加工学会）を林学会とは別に作ることである。一つの端的な例をあげると、日本林学会誌やその他の林学關係の刊行物に発表される論文は海外の木材加工研究者の目に入りにくいことが多いと思われる。我国の木材加工工業は行先世界の市場を相手にしなければならぬことを考えるならば、この際独立した学会を持つて技術の基礎を作つてゆくことが必要である。

第二に教育關係で森林利用というようなあいまいな考え方をなくすること。近頃出来た新制大学で森林利用学講座という名前で木材採取（伐木・運材）と木材加工を含めているのが多いが、これは相当時代錯誤ではなからうか。はつきり木材加工学講座か木材採取学講座にすべきで、木材採取だけ単独にとり出すのに困るならば、森林工

学か森林経営学に含めた方がむしろ良いと考えられる。

第三に現状では少くとも農林省の林産部門を拡充することが必要である。単なる資源的な見方でなく、もつと木材工業それ自体が必要とする深い技術的根拠と広い視野が加わらなければならない。

第四に技術の基礎をつくる研究機関についてであるが、現在の林業試験場木材部・化学部はその内容に於て立派ではあるけれども、やはり木材工業そのものの裏付けとなり一層の活躍を期するには、独立の林産試験場である形が望ましい。

以上放談とはいいいながら極めて勝手なしかもさしさわりの多い言分を述べた。非現実的な処が多分あり、また考え方に大きな誤りもあるかも知れない。さらに紙数の関係から舌足らずでもあらう。このことについて諸賢の御教示をいただけるならば幸いこれに過ぐるものはない。

(日本木材加工技術協会)

☆

無 題

「寒帯林」編集長

牧 山 義 郎

約 10 日間、旅行して帰り机の引出を開けて見ると、そこに林業技術協会からの封筒が待ち侘びた様子をして姿を現わしました。何かの間違いではなからうかと何気なく封を切つて読んでみましたが、局編集員に対する投稿依頼状でありました。何の間違いでもありません。正真正銘、筆者に当てられた手紙でありました。筆者の筆不精は何も書けそうにもありません。一応お断りしたい気持ちで一杯でした。しかし、松川先生にはこれまで再三、寒帯林を通じ御迷惑をおかけしていることだし、先生の御命令とあれば致し方ありません。無理を申上げると無理がまた戻つて来るのでしょう。

旭川営林局の近況についてお知らせします。



風害の惨状

旭川営林局では、ただいま、本年 5 月 10 日に起つた

一大旋風と 9 月 27 日襲来した 15 号台風による被害対策にテンヤワンヤの有様です。即ち、5 月の旋風で約 130 万石の生立木が損害を受け、これが処理も終らぬうちに、また、9 月 27 日、魔の台風 15 号によつて実に、約 3000 万石の生立木が、一朝にして見渡す限り、総貳めの形で将棋倒しを喰つてしまつたのであります。その惨状たるや、林業史上いまだかつてその例を見ない災害で、その形容は言語に絶するもので、特に北海道、いな、わが国の宝庫とも言われたうつ蒼たるエゾマツ・トドマツの一大原生林の美林も、はかない最後？ をとげ、山容一変してしまつたのであります。

昭和 13 年 7 月、神戸市六甲山の山津浪が起つたとき（筆者はその時の避難民）その惨状を見た人が、聞いて想像していた以上に凄いやられかたをしていると言われたのを聞いていますが、このたびの災害もその通りで、全く凄いの一言につきるのであります。天の威力に喑然たらざるを得ません。

柴田林野庁長官、石谷業務部長、岩野札幌営林局長さん方々の現地視察されたときの慨嘆されて洩らした言葉を引用すれば（北海道林材新聞より転用）

柴田長官「ああ、山容頓に更まり……」

石谷業務部長「倒れた木を探すより、残つた木を探した方が早い」

岩野札幌局長（前旭川局長）「僕がこの眼で見ておいた層雲峡、あの原始林の尊厳さをもつた層雲峡は忽焉としてこの世から消え去つてしまつた」

なお当局の一の倉作業課長さんは現地案内して説明されたなかに、「うつ蒼たる樹海に沈んで見えなかつたみどり岳や白雲岳があのようになり、どこからでも見えるようになりました」と、災害のいづくせぬ形容の一斑であります。

数百年あるいは数千年に周期的に来るのではあるまいかといわれるこの災害が、丁度今年に当つた訳であります。この跡仕末が大変なものです。3000 万石とは実に当局年伐量の数ヶ年分に該当する材積であつて、これが処理に大わらわであります。速急に処理しなければなりません。風倒折木の被害木はマッチの軸をバラ撒いたように倒れているので、立木伐採するよりも作業困難であり危険度も高いのであり、時期的にも従来冬山事業として積雪上で伐採搬出をやつていましたが、風倒木は冬期は積雪下に埋つて冬期作業は困難となり、夏山作業に限定されるのであります。又広範囲にわたり、人力にも限度がある等いろいろの事情で、一応 3 ヶ年間に処理する計画を構へたのであります。

これに関連して風害跡地の更新や明年以後に残された風倒木の害虫駆除予防に万全を期さなければならない上

に、山火発生の危険も強く、山火予消防にも一段の工夫を要するものがあります。また林地荒廃による治水問題も話題にあがり、つぎつぎと難問題が起つて来つつあるのであります。(旭川営林局)

☆

林業雑誌編集のことなど

「北方林業」編集長

原 田 泰

最近科学雑誌はもとより、文芸物も思想物も、婦人雑誌、趣味の雑誌と多趣多様に店頭を飾っている。ひと頃にも読物もなかつた時代を偲んで誠にありがたいことと思う。

しかも、これらの雑誌は戦後の出版ブームの後をうけて比較的健全な歩みをして来たものであるともいえる。戦後専門雑誌も一時多数出版され、北海道でも「寒地農業」とか「応用気象学」だのと専門的な雑誌も見参していたが、多くは三号雑誌に終つたようである。

林業技術は戦前からの永い伝統を持つ「こだま」の跡をうけつただけに確たる歩みがつづけられていることは御同慶の到りにたえない。登載されている原稿も娯楽を主にしたものや同人雑誌と異り、専門の技術雑誌として親しまれている。

最近週間ものや文春などのまねをした地方的なチャチな編集も少くないが「林業技術」は多くの実務に携わっている技術者が対照で、大衆相手の面白おかしい記事を要求するものでないから、酒談譚やマージャン問答などは必要がない。パチンコや競輪に目の色をかえる世の中であつても技術者として技術に頭を突込む日が月に一度や二度あつてもよいと思う。

それで非常に部厚い編集よりも40頁か50頁程度の読み切りやすいものを登載していただき度い。一般的にみて、あまり難解なものは他の専門誌か報告書に発表してもらうこととして、親しみやすい論説や研究もの、大衆的な専門記事、随想めいたもの一、二編という処がよいと思う。かく申すわれわれも、自分等のこととなると経費の関係や原稿難から注文通りに行かない、理想はなかなか実現されない。

われわれのことを申して恐縮であるが、主宰する「北方林業」は林業技術の地方版と思つてその下部組織とも考えてやつておるので、ちよつてふれておきたい。

「北方林業」は昭和17年に北海道林業会報が戦争の影響で林業会の解散と共に廃刊をよぎなくされてしまつた。当時会報だけでも続けて行き度いと反対もし、考えもしたが、大勢には抗し難く、再び刊行される日の一日

も早からんことを願つて終刊の辞としておさらばしたのであつた。

戦争は終つたが敗戦で、各階層も各業界も虚脱の状態であつた。林業界も御多分に洩れず右往左往するのみで、混乱を極めたことは御承知の通り、雑誌も著書も求めて得られない状態であつた。民間・道・局・試験場などにも呼びかけたが、中心となつてやつて下さる方もないままに3カ年を経過してしまつた。それで待ち切れず昭和23年に各営林局・道・試験場の方々に計つて北方林業会をつくり、この団体の会報として月刊「北方林業」を刊行することにした。この名称のおこりは、戦時中倉田吉雄博士が提案されて、研究会を旭川で開催したことがあつた。そのとき会の名称をわたくしと倉田さんで北方林業研究会と名づけた。これは南方林業に対して木材林業は北方林業であるという観点から出た言葉で、戦前の北海道林業という小さい圏内の構想を破つて、北方圏という構想に立つてであつた。敗れてもこの考えに変わりなく、木材林業こそ北方林業の使命であるとの観点から戦時中であつたに拘らず、各方面から多大の好評を博したこの研究会の名を襲踏して再びこの会名が採用されたのであつた。

幸いなことに発刊以来毎月パンクチュアリーに月の初めには会員の机の上に送ることができ、ただの一回も合併号とが欠号とかをしたこともなく、順調に経過して70号に達した。

この雑誌も同人雑誌や娯楽雑誌でなく、平明な、だれにでもわかりやすい専門雑誌になりたいと努力しているのであつて、新聞や週刊の諸雑誌などのように一度読めばよいというもののみでなく、興味体位は二の次として林業に携わっている人達、これに興味をもっている人達が新しい知識と正しい理解に役立てたいと願っている。あくまで林業の机上の紙友たらしめたく考えている。試験・研究を中心に、これを多くの人達に知つてもらつて少しでも新しい技術の滲透をはかり度いと願っている。いわゆる林業改良普及事業の一端を担う、純然たる民間の団体であつて、読者各位がまたその一端を担つてことになる。したがつて、いままでの原稿もほとんど読者各位からの投稿であり、それぞれ有益な投稿を得て、ささやかな編集ではあるが、編集同人の思うままの行き方をしているわけである。

幸い近頃は部外の人達からも親しまれ、書店でも取扱われるようになったことは、いちぢるしく農業に立ち遅れている林業の大衆化のために一層精進したいと考えている。

(北方林業会)

×

×

本稿は去る 11 月 24 日、森林記念館において催された本会主催の講演会における林業試験場林弥栄氏の講演を速記したもので同氏の校閲を経てここに掲載するものである。

—編集部—



主要樹種の天然分布

司会(松川理事長) 今年はこの催しをしばしば持ちたいと考えていましたが、いろいろな事情で大変おくれてしまいました。これからも引続いて諸先生方をお願いして有益なお話を伺いたいと思っております。どうか今後共よろしく願いいたします。

本日ご講演願う林弥栄さんはご承知のように目黒の林業試験場で植生研究室の室長をしておられる植生研究方面の新進の研究家であられ、私ども特にお願いしたのでございますが、幸にご承諾をいただきまして、本日ここでご講演いただくことになりました。まことに意義あることと感謝している次第であります。

なおご講演が終りましてから、若干時間をいただきまして、映画「松喰虫の一生」という林野庁編纂のごく新しい映画を特にご好意をもつて本日の講演会に提供していただきました林野庁に厚くお礼を申し上げます。

私はただ今ご紹介にあずかりました林業試験場造林部勤務の林でございます。私は昭和 21 年に、今の林野庁当時の山林局業務課から試験場にまいりまして、主として日本産主要樹種の天然分布というテーマで調査研究を現在まで続けているものであります。そして今日までに日本の主要な針葉樹の天然分布につきましてもは大体の取まとめができて、昭和 26 年 3 月発行の林業試験場研究報告第 48 号で針葉樹第 1 報としてモミ、ウラジロモミ、アオモリトドマツ、シラベ、カラマツ、コメツガ、ツガ、スギ、コウヤマキ、ヒノキ、サワラの 11 種類を発表いたし、昭和 27 年 10 月発行の研究報告第 55 号で針葉樹第 2 報としてカヤ、イヌマキ、イラモミ、ヒメマツハダ、シラネマツハダ、トウヒ、ヤツガタケトウヒ、ヒメバラモミ、ハリモミ、トガサワラ、アカマツ、チョウセンマツ、クロマツ、クロベ、アスナロ、ヒノキアスナロの 16 種類を発表しました。それから 2、3 日前に印刷ができ上つてまいりました研究報告第 75 号針

葉樹第 3 報にイチイ、トドマツ類、アカエゾマツ、クロエゾマツ、ヒメコマツ類、附録としてハイマツの 6 種類を報告しました。

こうした天然分布の研究はドイツ、スイスなどでは多くの精密な天然分布図が発表されております。その他アメリカ、フィンランド、ジャバなどにおきましても産業面の調査は相当な精密度をもつて行われております。日本では今日までのところスギ、ヒノキ、コウヤマキ、モミ、カラマツ、アスナロ、アカエゾマツ、ハイマツなどの樹種の天然分布は多少の研究が発表されておりますが、その他の針葉樹についてはまだあまり研究されていないような現状であります。これは今日お話ししたいしますことの前おきになるわけですが、もう少し続けさせていただきたいと思ひます。

ではこうした天然分布の研究が、林業その他の方面にどのように役立つものであるかということをお話ししたいと思います。まず第 1 には天然更新の可能な地域、あるいはその程度範囲を知ること、第 2 番目は気候や土壌等とにらみ合せて適木を選定し得ると共に各樹種の分布状態と関連させて植栽適地の基準を規定しようということ。第 3 番目に森林資源の培養に当り計画にのる樹種の資料として極めて有用なること、第 4 番目に林学の各方面の研究に当つて資料を採集するような場合に、その資料の所在を直ちに知り得て便利なこと、たとえば木材利用上の諸性質研究の資料採取の際にはことに便益があること。第 5 番目には一般林業樹種以外の樹種については、どういう効力があるかといひますと、特別の要求ある場合にも利用されること、たとえばカヤ、ヒメバラモミ、ヤツガタケトウヒ等特殊な樹種の研究によつて樹木学の進展に寄与することが期待される。第 6 番目には最近いろいろわかれております育種研究上、種間交雑など行なう場合、類似種の天然分布が判明していると交雑に供され得る試験木の選定に便利なことなどでありま



スギ天然分布図

スギ天然林
秋田県秋田郡男鹿中村
男鹿山国有林



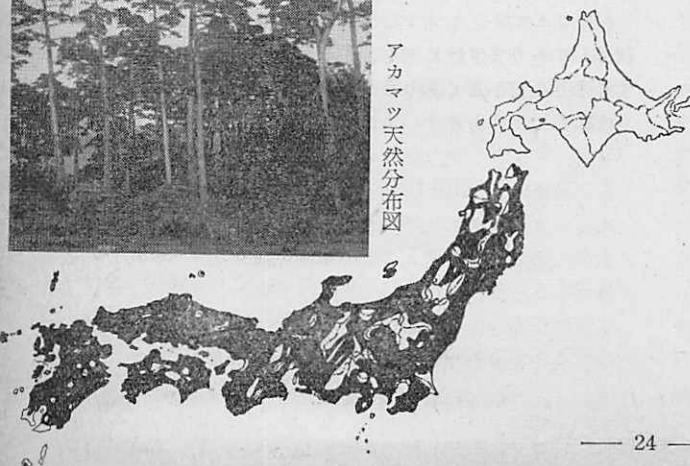
ヒノキ天然分布図

ヒノキ天然林
長野県西筑摩郡王滝村
瀬戸川国有林



アカマツ天然林
山梨県富士吉田市
諏訪の森国有林

アカマツ天然分布図



以上のように単に林学向上に貢献あるのみでなく純植物学の見地に立ちまして、種々なる方面に応用ができます。たとえば針葉樹の系統、起原などの諸問題の解決に非常に役立ちます。現在大阪市大におります化石植物研究者三木茂博士などは化石植物分布と現存の植物の分布とを照し合せて、種々検討し種々な学問的のことの解決法をつけていられますが、そういう場合精しい天然分布がわかっている非常に役立つとよこばれております。それからこういう研究が一応でき上りますと今後分布範囲が組織的に追加されて分布に対する知識が伸展する効果もあると思います。

前置が非常に長くなりましたが、本日の演題であります「主要造林樹種の天然分布」の内容でありますスギ、ヒノキ、カラマツ、アカマツ、クロマツ5種の天然分布につきまして順次お話してみたいと思っております。このお話します順序はただ重要性のあるものから適宜ならべたものであります。スギは久しく日本特産のものでありましたが、近年中華民国でも発見されたといわれております。天然分布の北限地は青森県西津軽郡矢倉山北緯およそ $40^{\circ}42'$ でありまして、それより以南奥羽、関東、中部、近畿、中国、四国の各地方を経て九州地方に及び天然分布の南限地は鹿児島県屋久島の北緯およそ $30^{\circ}15'$ であります。ご承知のように奥羽地方の秋田県一帯、それから中部地方の新潟県東部一帯、妙高戸隠や黒部溪谷の奥、立山などの海拔の高い所に割合多く生じています。それから福井県の奥地にも比較的多く残存しています。近畿地方の三重県南部一帯、京都の芦生大悲山など。中国地方の鳥取県南部一帯、島根県南部一帯、広島県北部から山口県北部にかけての一帯に割合多く残っております。それから四国の魚梁瀬地方、九州地方の屋久島などに天然林が比較的多く見られます。本種の垂直分布の範囲は大体奥羽地方では最低 100 m から一番高い所で 1,250 m、関東地方には割合天然林は少いのですが、伊豆の天城山や丹沢の札掛などにはややまとまつて残存しております。そして関東地方では 110 m 位から 1,000 m 位の間にあります。中部地方では低い所では 20 m ぐらいから生じ大体 1,800 m 位の高所まであります。近畿地方では海拔面に近い所から 1,550 m 位、中国地方では 150 m から 1,500 m 位、四国では 300 m から 1,400 m 位まで、九州地方では 300 m から 1,850 m の間にあります。天然生育地で一番低い所は和歌山県新宮の浮島にあるものでこれは海面すれすれの所にあり、一番高いところは屋久島の 1,850 m であります。次で富山県下新川郡内山村、黒部奥の不帰岳の 1,800 m、立山ブナ坂の 1,650 m、富山県中新川郡白萩村鋸岳早月尾根の 1,640 m、長野県上水内郡戸隠村佐渡山の 1,600 m、新潟県東蒲原郡豊実村飯豊山の 1,600 m などあります。何故にこういう標高のことをとやかくいうかとい

ますと、ご承知かと思いますが海拔の高いブナ林などの跡地植栽をする場合に高い所に天然に生じているものの種子をとつて育苗植栽してみると非常に生育がいい。反対に標高の低い所に生えていたものから種子をとつて育苗したものは成績が悪い結果のところが多量に。それですら垂直分布を知る必要が生じてくるので、ここにとり上げてお話ししているわけであり。一概には云えませんが全般的にみて、奥羽地方では海拔およそ 300m から 800m、ただし海岸地帯では海拔およそ 200m から 500m、関東地方では 300m から 700m、中部では 300m から 1,500m、近畿地方では 300m から 1,000m、中国地方では 500m から 1,000m、四国地方では 600m から 1,100m、九州地方では 400m から 1,400m の間において最も繁生を見る。それでスギは一般にヒノキアスナロ、キタゴヨウマツ、クロベ、アカマツ、モミ、ヒノキ、サワラ、ツガ、アスナロ、クロマツ、トガサワラなどの針葉樹の或るものやブナ、ミズナラ、イタヤカエデ、ホオノキ、トチノキ、サワグルミ、クリ、ミヅメなどの広葉樹の或るものと混交しています。南の方へ行きますと、カシ類などと混交していることがありますが、また純林をなしている所もあります、それからいわゆる林業上のオモテスギ、ウラスギですが、オモテスギの学名は *Cryptomeria japonica* D. Don. var. *japonica* Henry (1906) であります。ウラスギについては中井博士が京都府下の京大芦生演習林の伏条型をなしているスギを見まして、これは普通のスギとは違っているということで、1941 年に植物学研究雑誌に *Cryptomeria japonica* D. Don var. *radicans* Nakai の学名を与えられ、アシオスギという和名をつけております。このアシオスギというのは裏型のスギ全般をいつているのではないのですが、日本海側の伏条をなしているスギ全般にこの学名をあててもさしつかえないのではないかと思います。オモテスギの天然分布は岩手県の三陸海岸から以南本州、四国、九州の太平洋側に分布し、ウラスギは青森県以南日本海側に広く分布し、島根県と山口県の県境まで分布しています。オモテスギの分布とブナの一環であるコハブナ *Fagus undulata* の天然分布とはほぼ一致していることは興味深いことであります。天然分布と植栽分布というものは寒い方にも暖い方にもいつもずれているものであります。北海道におけるスギの植栽北限地は岩見沢市あたりで、ここには現在相当立派な林があり、また札幌にもあります。日高のアボイ山麓にも点々と植栽されておるのを昨年夏見て来ました。南国の奄美大島、琉球などにも植栽されていますが気候が暖かすぎて成績はよくありません。簡単でありましたがスギの天然分布につきましてはこの辺でやめておきます。次はヒノキで

あります。

ヒノキは日本の特産のものでありまして、天然分布の北限地は福島県石城郡永戸村および赤井村の北緯およそ $37^{\circ}10'$ であります。それより以南関東地方、中部地方、近畿地方、中国地方、四国地方を経て九州地方に及び天然分布の南限地は鹿児島県屋久島の北緯およそ $30^{\circ}15'$ であります。中部地方の木曾（最も多い）や飛騨方面、静岡県水窪奥の白倉山、山梨県側の富士山麓青木ヶ原など、近畿地方の太田、大峯連峰（七面山など）高野山など。四国地方の白髪山などに比較的立派な天然林が見られます。それから垂直分布の範囲は奥羽地方では 400m から 600m、関東地方では 40m 位の低い所から 1,600m ぐらいまで、中部地方では 80m から 2,200m ぐらい、近畿地方では 10m ぐらいの低い所から 1,800m ぐらいまで、四国地方では 250m から 1,800m ぐらい、九州地方では 300m から 1,800m ぐらいであります。天然生育地の最低は私の知る範囲内では三重県南牟婁郡有井村有馬松原および和歌山県新宮市大浜の各海拔およそ 10m であり、天然生育地の最高は長野県南安曇郡の燕岳の海拔およそ 2,200m であります。次で岐阜県恵那山の頂上海拔およそ 2,180m、3 位は岐阜県上宝郡笠ヶ岳 2,150m であります。全般的に見まして、奥羽地方では 400m から 600m、関東地方では 300m から 1,300m、中部地方では 400m から 1,700m、近畿地方では 300m から 1,000m、中国地方では 300m から 1,000m、四国地方では 600m から 1,400m、九州地方では 400m から 1,500m ぐらいの間において最も繁生を見ます。ヒノキは通常モミ、ツガ、アカマツ、サワラ、アスナロ、クロベ、トウヒ、コウヤマキ、ハリモミ、トガサワラ、ウラジロモミ、ヒメコマツ、カヤ、シラベ、コメツガ等の針葉樹や、ブナ、イヌブナ、ミズナラ、ヒメシャラ、ホオノキ、カエデ類南の方に行くとカシ類、シイ類等と混交しておりますが、また各所に純林も見られます。これでヒノキの水平的と垂直的分布の話を終りましたが、ヒノキは天然分布地より北の方でも植栽はしておりますけれども、色々な病気などにかかりやすく余り生育がよくありません。南の方では一般にかなり成績がよくあります。これなどは天然分布というものが植栽する場合一つのめやすになるという例と思われる。つぎはカラマツであります。

カラマツは日本特産の落葉針葉高木で天然分布の北限地は宮城県刈田郡福岡村の馬ノ神山北緯およそ $38^{\circ}5'$ あります。この山は有名な蔵王山の続きの山であります。天然分布の南限地は静岡県磐田郡水窪町の山住山及び静岡県志太郡東川根村天狗石山の北緯およそ $35^{\circ}8'$ あります。西限地は石川県の白山です。どこに多いかと

いいますと関東地方の奥日光一帯、尾瀬ヶ原一帯、上州白根山、奥秩父連峯、中部地方の浅間山、八ヶ岳、富士山、南アルプス連峯、中央アルプス連峯、北アルプス連峯などで、なかでも奥日光、浅間山、富士山、北アルプスの上高地から高瀬入方面などに特に多くあります。垂直分布の範囲は奥羽地方で大体 900 m から 1,850 m、関東地方で 1,300 m から 2,400 m、中部地方では 1,000 m から 2,800 m、天然生育地の最低は福島県河沼郡野沢町奥地の 900 m で、最高は富士山の 2,800 m です。これは灌木状をなしています。全般的に見ましてどの位の海拔範囲内にカラマツの天然林が繁生しているかといいますと、奥羽地方では 1,400 m から 1,800 m ぐらい、関東地方では 1,400 m から 1,900 m ぐらい、中部地方では 1,400 m から 2,100 m ぐらいであります。そして通常カラマツはトウヒ、クロベ、アオモリトドマツ、シラベ、コメツガ、ウラジロモミ、キタゴヨウマツ時にアカマツ等の針葉樹やブナ、シラカンバ、ダケカンバなどの広葉樹と混交していますが、また所々の崩壊地などに単純の大小群落が見られます。高山では矮生となり丁度ハイマツのような形をなしています。カラマツの植栽分布ですが、これは天然分布のせまい割合に広く、九州から北海道の果まで、植栽されております。また遠くヨーロッパ北部まで植栽されていましてよい成績をおさめているということでもあります。天然分布地域より遠く南によつた九州の九重山や、中国地方の大山などにもかなりよい林があります。また奥羽地方の岩手山麓、その他北海道の各地にわたつて広く植栽されよい成績を収めています。かようにカラマツは天然分布地より植栽可能な分布地の方が南北に拡まつている樹種です。こういうことが何によつているかということは今後の問題として検討してみたいと思つています。

次ぎはアカマツでございます。

本種は日本のほかに朝鮮、遼東半島、満洲、ウスリーという方面まで広く分布しておりまして、日本における天然分布の北限地は北海道の苫小牧市樽前山麓北緯およそ $42^{\circ}40'$ にあるものだという事になっております。この地のアカマツについては学者によつていろいろ異論があります。すなわち林学の大先輩であります本多静六氏や白沢保美氏など多くの人は天然生であるという意見を述べておりますが、北海道の事情に詳しい川上滝弥氏、工藤祐舜氏などは天然生説を否定しております。東大の中村賢太郎氏、土井藤平氏などは天然生はなかつたが野生状態になつてゐるという意見であります。私は昭和 28 年 7 月に当時苫小牧営林署の経営課長でありました武藤氏の案内で相当くわしく現地を調査することができました。現在クロエゾマツの林の中に点々と大木が見

られます。そして現在総数 200 本ぐらいであります。昭和 5、6 年頃までは 400 本ぐらいあつたそうです。径級は 30 cm から 60 cm、樹高が 18 m から 24 m ぐらいあり、比較的よく伸びております。クロエゾマツのほかのところどころにカラマツの大木がまじつております。2、3 年前に苫小牧営林署で 2 本のアカマツを樹幹析解した結果によると 106 年生と 110 年生であり、そして附近のクロエゾマツは 115~120 年生であつたといひますから、クロエゾマツとアカマツはたいして時代の違つたものではないと思われまゝ。そしてこのアカマツのある附近から少し奥地にぬるま湯の湧くところがあり、昔その道しるべに植えたものではないかと云われてゐます。ここから余り遠くない白老附近の陣屋あとにも大木が点々残つてゐるといひます。それで地元の人々は最初は栽植されたものに間違ひあるまいといつてゐます。私がよく現地を調査観察してみますと少し森林の疎開したところでは天然下種して、かなりよく伸びたものが点生してゐます。だからはじめは栽植されたものか、どうかはわかりませんが、環境的には充分にアカマツの育ちうところだといへると思ひます。しかし厳密な意味での天然分布の北限地は青森県下北郡大間町北緯およそ $41^{\circ}31'$ であります。この図は非常に小さなものですから、アカマツのように広く分布しているものは一寸表わしようがないからこうして赤くぬりつぶしあらわしたわけですが、この赤くぬらないところが大体天然がないところなのです。奥羽地方に属する青森県下におきましては東津軽郡の夏泊半島、上北郡(郡内高所を除く)、三戸郡(郡内高所を除く)などに比較的多く見られるが、他の西津軽、北津軽、南津軽、東津軽(北部)の各郡下には少しく産するのみであります。

岩手県下におきましては奥羽山脈、早池峯山集、五葉山などの高地を除いては到る所に自生してゐます。そして御堂松、矢櫃松、東山松などの著名な産地があります。宮城県下では奥羽山脈高地を除いて到るところにあり、かつては仙台松などの著名な産地がありました。秋田県下では各郡下に産しましたがスギの方が優勢で、余り多くありません。山形県下では各郡の高所を除いて到るところに産し比較的多くあります。同県南部には白旗松などの著名な産地があります。福島県下では各郡共高地を除いて到るところに多く産し、津島松はその声価が高くあります。関東地方の各県下では高地を除き到るところに多く産します。しかし東京都下には比較的少くあります。伊豆七島では大島以外他島には自生してゐません。

本州中部に属する各県下では高地を除き(例外はありますが)比較的多く生じ、新潟県下の五十公野松とか長

野県下浅間山麓の霧上の松などの著名な産地があります。近畿、中国両地方に属する各府県下には高地を除き到るところに多く、ことに瀬戸内海沿岸に多くあり、そのうち山口県下の滑松は有名であります。四国地方では四国山脈などの高地を除いては到るところに産し、愛媛県下では狩場松、高知県下では芹川松、大道松などの著名な産地があります。九州地方では各県下の高地、鹿児島県南部、種子島、甕島などを除いて到るところに多く自生します。そして宮崎県下には日向松、鹿児島、宮崎両県下には霧島松などの著名な産地があります。次にアカマツの垂直分布ですが、奥羽地方では海拔およそ 5m 位の海岸から 1,200m、関東地方では海拔およそ 2~3m の海岸から 1,800m、中部地方では 2~3m の海岸から 2,290m、近畿地方では 2~3m の海岸から 1,500m、中国地方では 2~3m の海岸から 1,200m、四国地方では 2~3m の海岸から 1,200m、九州地方では 2~3m の海岸から 1,400m の間にあります。九州屋久島では南部前岳地域のみに産し、ここが天然分布の南限地で北緯およそ $30^{\circ}15'$ であります。生育地の最高は長野県南佐久郡川上村甲武信岳の続峯大山の頂上海拔およそ 2,290m にあると思われます。ここでは小群生しています。そしてここから少し下方の十文字峠附近の海拔およそ 2,000m あたりにはキタゴヨウマツなどとわずかに混交した群生地があります。次で富山県下の薬師岳の海拔およそ 2,100m、岐阜県笠ヶ岳の 1,850m、長野県八ヶ岳の 1,850m、群馬県赤城山の 1,800m などがあります。概念的にアカマツは低い所に産する樹種だと思いがちですが、私もこの研究のため全国各地の山々を調査して廻り、アカマツが意外に高いところまで分布するのに驚いたような訳であります。全般的にみまして、奥羽地方では海拔およそ 100m から 500m ぐらいまで、関東地方では海拔およそ 100m ないし 200m から 1,200m ぐらいまで、中部地方では海拔およそ 200m ぐらいから 1,400m ぐらいまで、この地域は平地が高くなつてますから長野県あたりでは 1,400m ぐらいのところまで立派な林があります。近畿、中国、四国、九州の各地方では海拔およそ 100m ないし 200m から 1,000m 位までの間においてアカマツが一番よく成育しています。アカマツはご承知のように純林をなすことも多くありますけれども、またいろいろな樹種と混合しているものであります。例えばモミ、クロマツ、スギ（主として植栽）ヒノキ（天然と植栽）、サワラ（主として植栽）、ツガ、カラマツ、ヒメコマツ、キタゴヨウマツ、ネズミサシなどの針葉樹やクリ、コナラ、クスギ、アベマキ、ケヤキ、ミズナラ、アズキナシ、エゴノキ、ネムノキ、ネズキ、サクラ類、カエデ類、ゴンゼツ、ウラジロノキ、アオダ

モ、リョウブ、シデ類、アオハダなど混交しています。最後にクロマツの天然分布のお話をいたします。クロマツは日本と朝鮮半島の南部とその付属の諸島に分布しております。天然分布の北限地は青森県下北郡大間町大間崎北緯およそ $41^{\circ}34'$ であります。アカマツの時でも申しおしましたが、アカマツでもクロマツでも古い時代から植栽されたものでありますから、果して純然たる天然のものであるか、人工植栽のものか、或はまた人工林から天然下種したものか、判断することが非常にむづかしい場合が多いのであります。その点クロマツはアカマツよりも一層困難なものであります。さて先に述べました青森県大間崎以南、下北半島、津軽の各半島沿海地、飛んで岩手県宮古市より以南の三陸海岸、青森県上北郡南部から宮古市の付近まではどうした加減か海岸までアカマツが出てしまひまして、クロマツは全然ないのです。宮城県全沿海地、ただし松島附近はほとんどアカマツでクロマツはありません。秋田、山形両県沿海地、飛島など、福島県下の沿海地にもずっとあります。関東地方各県の沿海地、伊豆七島、ただし八丈島のものは植栽だといわれています。中部地方各沿海地河川流域など、ただし新潟県珠ケ関から新潟市までと佐渡ヶ島の東海岸にはほとんど見られません。近畿、中国、四国、九州各地方の沿海地、河川流域、附属島嶼などに広く生じ、九州の南部では内陸深くまで分布しています。そして天然分布の南限地は鹿児島県土噺七島の宝島北緯およそ $29^{\circ}0'$ であります。これより南の奄美大島や琉球の方へ行きますとリュウキュウマツというクロマツにやや似たマツの一種が生じ、クロマツはありません。それからクロマツの分布上で面白いことは、茨城県から沿海地のみでなく内陸へ天然のものが入つてくることと、奥羽地方などではみられなかつたが、各河川に沿つて相当上流までクロマツが分布していること、それにもう一つこれまでは混交広葉樹がほとんど落葉性のものだったのが、常緑性のものがかかなり多くまじつてくることなどであります。この傾向は南部に行くにしたがつて顕著になつてゆきます。

次にクロマツの垂直分布のことをお話します。奥羽、関東両地方では大体海岸線から生じ、およそ 300~400m まで、ただし箱根などでは 900m 位の高いところまで分布していますが。中部地方では大体海岸線から生じ、上部は例外を除き、およそ 500~600m まで、それから近畿、中国、四国、九州、各地方では大体海岸線から生じ、上部は例外を除きおよそ 800~900m までであります。天然生育地の最も低いところは各地方に見られる海面で、所により海拔面以下というようなところもあります。海拔以下というのはクボ地になつてずと海面よ

り下つたところに生えたものです。生育地の最も高いところは私の知っている範囲内では鳥取県大山の支峰豪門山頂上海抜およそ 950m に見られるものであります。伊豆の天城山などには 1,200m ぐらいのところもありますが、植栽したもののようにあります。それからクロマツは通常どんなものと混交しているかといいますとアカマツ、ビヤクシン、イヌマキなどの針葉樹やコナラ、クリ、ミズナラ、ケヤキ、カシワ、サクラ類、エノキなどの落葉広葉樹やタブノキ、スダジイ、コジイ、ヤブツバキ、アラカシ、ウバメガシ、ヒメユズリハ、モチノキ、ヤマモモ、クスノキ、クロキ、イスノキ、シロダモ、ネズミモチなどの常緑広葉樹と混交しています。内陸に分布する場合は以上の樹種のほか時にモミ、カヤ、ツガ、スギ、ヒノキ、クスギ、アベマキなどと混交することもあります。しかし海岸近くの第一線では純林をなすことが多くあります。クロマツは各地方の沿海地に美林が見られますが、特に著名なものは静岡県沼津市千本松原、同清水市三保松原、富士郡田子ノ浦松原など、福井県敦賀気比ノ松原、高知郡幡多郡東浜松原、福岡県福岡市生ノ松原、名島松原、芥屋松原、佐賀県虹の松原、鹿児島日置吹上松原などがあります。アカマツとクロマツとの自然交配雑種にアイグロマツというのがあります。これは今松山農科大学教授をされております植木博士が朝鮮産のものにより命名されたもので、学名はアカマツとクロマツの両方の種名をとりまして *Pinus densi-*

Thunbergii Uyeki といいます。これは外形的にはクロマツに近く、葉の解剖学的性質ではアカマツに近いものであります。これを色々検討してみますと、アカマツ、クロマツいずれとも違うものとかかなりどちらかに近いものといろいろあるわけであります。日本各地のアカマツとクロマツの混生する沿海地などに広く見られます。これについて中井博士は *densi-Thunbergii* というものは朝鮮のアカマツの海岸型のものであつて雑種ではない。これは内地の所謂アイグロマツとは全然別種であるといわれています。一般に林業方面では植木さんがつけられたものにあてはめているようです。私はこのアイグロマツについては未だ深く研究していませんので上記のいずれが正しいか、なんともいえないのが残念です。アイグロマツは材質よく、かつ成長もよいものであるということが一般にいわれてます。熊本県水俣市産の茂道松、宮崎県東諸県郡の穆佐松（殆んど現存しないが）はこのアイグロマツであるといわれています。大分予定の時間を超過しましたので、これで日本産の主要造林樹種でありますスギ、ヒノキ、カラマツ、アカマツ、クロマツ5種の天然分布のお話は終ります。もつと細かい分布をお知りになりたい方は最初に申し上げましたように林業試験場報告の 45 号、55 号、75 号の 3 冊を見て下さい。

長々とまことにつまらぬ話を御静聴下さいましてありがとうございました。

よみやすい 林業解説シリーズ わかりよい

71 林業用薬剤 農学博士 井上元則 著

農林用の薬剤の新しいものが続々と販売されているが、その性状や用途について詳述し、7大メーカーの製品が一目でわかるようになっている。

72 風災5700万石 北海道林務部 寺田喜助 著

日本林業はじめての大風害の実状をのべ、これに連鎖する風害、虫害、火災、洪水などの問題を提示し、また造搬と需給の難関を解説している。

定価 40 円 送料 2 冊まで 8 円。10 冊分予約前金（送料とも）400 円。職場で 10 人以上まとめて予約購読されるときは後金で結構です。技術研究サークルのテキストに好適。

—— 御注文は日林協へ ——

John James Audubon の ことども



・1・ 成澤多美也

偉大なる鳥類研究家であり、同時に画家であつたジョン・ジェームズ・オーデュボンが逝いてから、1951年は丁度百年目であつた。

アメリカの5州では、特に彼を記念して、オーデュボン週間とか、百年祭とかが開かれ、議会でも特にオーデュボン・デーを催すことに決定したとライフ誌は伝えている。

オーデュボンとはどんな人であつたのであろうか。彼の誕生についてはアメリカでも長く、疑問視されていた。フランス革命で断頭台上に露と消えたルイ16世と皇妃マリー・アントワネットとの間にできたドーフィン、つまりれつきとしたブルボン王朝の皇太子であつたといわれている。そのドーフィンがオーデュボン家のほとんど同年輩の子供とすりかえられて生き長らえた仮の姿であるというのである。そのことについてはオーデュボン自身もそう信じていたらしく、話の序には、そうしたことをほのめかし、妻のルーシーにも何回かそうしたことを語つたりしたために、世人もひそかにそれを信ずる人が多かつた。

後程それは、彼の父キャプテン・オーデュボンと、サント・ドミンゴの混血児との間にできた子供であると断定されたが、まだ信じ切れない人が多い。とに角生れそのものから謎の人であつたのと、野鳥の研究のためには、彼のあらゆる生活を犠牲にして、“アメリカの鳥類”その他不朽の名作が刊行されるに及んで、彼の名もまた強い光茫を曳くに至つたのである。ことに当時双眼鏡もなく、乗物といつても、ようやく汽船がミシシッピ河を上下するようになり出した当時の旅行は、今にしてみれば、比較的狭い範囲と思われるかも知れないが、決して容易なものではなかつた。加うるに彼の手を出した事業は一つとして成功したものはなく、常に貧窮のどん底にたたき落されて妻子を人の家にあずけたまま2年も3

年も帰らなかつたことさえあつた。そうした悲惨な境遇にあつたにもかかわらず、彼は常に明るい希望を持ちつづけて来たことは、彼が常に強い信念を持っていたからであろう。人生は暗黒ではない。人生というものはその人の心の持ち方一つで、暗くもなり、明るくもなるものである。彼は常に明るい面を見詰め、最後の彼岸を見失なわなかつたのである。そういう点において彼は人生航路の勝利者といふことができる。

しかし船というものは、単に船長ばかりの腕前によるものではない。

船員が常に船長を信じ、船長と一心同体でなければ、波浪を乗り切ることはできない。この点において、彼の妻ルーシーは最も高く評価さるべきだと思う。英国生れの、つつましやかな彼女は、ともすると不羈奔放だと思われる位——いや実際、普通の常識人は、彼を狂人だとしていたくらいであつた——の彼を、常に信頼し、留守勝の家庭を守り、赤貧の家計を家庭教師をしながら二児ビクターとジョンを育てて来た点においては、内助の功をたてた典型的賢婦人の名に恥じない女性である。

オーデュボンはルーシーがなければオーデュボンではなかつたといつても過言ではない。

それはとに角として、アメリカではしかく有名なオーデュボンが日本ではあまり知られていないので、おそまきながら彼の百年忌を営む積りで、彼の生い立ちや業績を少しでも伝えて、今後のオーデュボン研究の一助にしたいと思う。

☆

1 オーデュボン誕生の謎

オーデュボンはいつどこで生れたか？

これは、人の事蹟を語る時、だれしも知りたがるところである。ところが、これが長い間、深い疑問の霧の中に包まれて来たのである。一応、フランシス・ホバート・ヘリック教授によつて、1785年4月22日、今イスパニオラとして知られているハイチ島で、サント・ドミンゴの混血児、マドモアゼル・ラビンを母とし、フランス系のホーベイト・オーデュボンを父として生れたということになつているが、これすらも、その児が果して、今われわれがジョン・ジェームズ・オーデュボンとして尊敬しているその人であるかどうかということになると、まだ釈然としないものが多い。

試みにエンサイクロペディア・ブリタニカを開いてみると、生れた年は1781年になつている。前者とは4年の距りである。

またマクミラン会社から1937年発行されたオクタボ版の彼畢生の傑作“アメリカの鳥類”の縮刷版の序言には、1785年4月26日となつている。年月は同じとしても、ヘリック教授の調査と4日も違つてゐるではない

か。

また、生れた場所もハイチ島であつたり、母の生地サント・ドミンゴであつたり、オーズ・カイヨー、あるいはルイジアナマリグニー農園等といわれていづれを探るべきかに迷わされる。もつともこの最後のものについては長い間マリグニーの謎とされていたものであるが、色々調査した結果、その当時マリグニー農園はなかつたということで解決している。

なぜこうした重大なことが、はつきりしないのであろうか。

フランス革命当時オーデュボン家の戸籍にオーデュボン(当時はラ・フォレーと呼んでいた)とその妹のムギューが登録されたのであるが、この妹の母の名前はフル、ネームで書かれたにかかわらずオーデュボンの母の名前は省かれていた。

そして、彼は決して生れた日、自分の年令をいわなかつた。これが今もつて解決しない重大な点であつたのである。

「私の真の名前は明かすことができないことになっている」と洩らしていたこと、また「オーデュボンと自分との一致は、そうしなければならない理由があるのだ」とも、彼の生れや幼時の事柄を公表しないという誓を、父オーデュボンから強いられており、晩年「私の誕生の正確な日は私にとつてもまだ謎である」といつていたことなどが、この混とんの原因の一つになっているのである。後年嵐の中で沈みかけているオハヨー河上の古い舟の名を指して「あの舟の名は、私の名前によく似ている。あの名前は影坊子のようなものだ」と洩らした“彼”の実体は果して何であらう。

しかも、彼がこうした謎のような言葉を投げた裏にルイ 16 世の皇太子ドーフィンであることをほのめかしていたので、彼の果した鳥類の業績と共に人々の興味をいやが上にもそそつたのである。

二人の間には年令から推してもわずかに数週間の隔りしかない、日本流にいうならば同い年であつたのである。ドーフィンであることについては、妻のルーシイに、それを打ち明かし、ルーシイもずつとそれを信じていたらしい事実がある。

彼の妻ルーシイは軽々しく物を信じない、常識の非常に発達した強い血管をもつていた。その彼の女が、息子のジョンの死際に間にあわなかつたのであるが、枕頭で不用意にも「息子や、お前の父の生涯の秘密を知らずに死んでしまつたということは何という悲しいことであらう」と嘆いたが、周囲に人のいることに気付いて大急ぎで言葉を濁したということがつたえられている。それが皇儲であるという動かし難い事実については彼の女が移

り住んだルイスビルやショッピングボートのフランス移民地で、その信念を固めるに十分な機会があつたのであろう。

オーデュボンがフランスの皇儲だということはありそうなことだとするのも一つ別な解釈がある。それはなぜキャプテン・オーデュボン(普通父をそう呼びならわしているの、以下これに従うことにする)が、彼の誕生について、かくも用心深く口止めたのであろうかという点である。海員生活をして、異郷の空にふとでき心で女ができ、その間に子供が生れたとしても、そう大して恥かしがる程のこともないし、磊落であつたという彼が、その事を口止めするのも解せないことだといふのである。

時はあたかもフランス革命のさ中であつた。専制政治の極端に堪え兼ねて、民衆が自由と平等を求めて激発した革命であると史家はいうが、その革命史を読むなら、だれしもそれは、流言蜚語におびえ、自分の影に驚いて恐怖のどん底に落ち、その影を消そうと狂気のように騒ぎまわつたに過ぎないこの革命、カーライルの言に従えば、憤怒、饑餓、超自然的猜疑をもつてこの狂暴なバリは叫びわめいていたのである。かくて 1793 年 1 月 21 日ルイ 16 世は 38 才にしてギロチンの餌食となり、同じ年の 10 月 16 日には、まだ中老にも達せずして、打ち続く焦燥と恐怖のため半白になつたといわれるマリー・アントアネットも同じ断頭台上の露と消えてしまつたのである。

しかし、皇儲や王女は果してどうなつたのであろうか。

この革命の怒濤に吞まれてしまつたのか、あやうくも命びるいをして、どこへか亡命したのか、あるいは当時の噂のように神がくしにあつたのであろうか。この事については史家も明らかにしていない。15 才にして夭折したらしいという史家もあるが、それすら確たる証拠はない。

ここにある珍らしい一致点がある。ドーフィンの亡命について、どの説も、彼の真先に行つた地点がラ・ベンデールであることである。しかもここはキャプテン・オーデュボンの生れたところでオーデュボンが少年時代を過したところである。

もののけにおびえた民衆、理性を失なつた暴民が、この幼い皇儲を追求するかも知れない懸念は、当時の王党派の人々に等しく懷かれたことであらう。皇儲と同年輩の子供とすりかえたらということ、そしてまたそうしたことをしたかも知れないという推測はだれの胸にも浮ぶのである。

この推測に更に都合のよいことは、その土地が王党派

の感情の熾烈なところであつた。しかもキャプテン・オーデュボンは、両陣営に結びついていたので、ドーフィンに隠すのに都合がよかつたとも考えられるのである。

ここでヘリック氏がキャプテン・オーデュボンが残した、あまり重要でもなさそうな古文書から、混血児ラビンとの間に男児と女児とがあつたことをつきとめ、その男児が実はオーデュボンだとする断定は皇儲説を唱える人々を納得させないのである。なぜなら、その子供達が4才の時、キャプテン・オーデュボンに連れられ、フランスに渡つて来たことは事実としても、それから以後はオーデュボンの記憶は全く空白になっているからである。

いつたい、人間の記憶というものは、普通人で、3才まで遡ることができるといわれているにかかわらず、彼オーデュボンは9才以前の記憶はないのである。「私の記憶は、私をナントの町の中央に置いた」といつているが、これは、彼の9才の時である。あれ程精緻な絵を画き、正確な記憶や判断力を持つていたオーデュボンとしては、この記憶なるものがはなはだしく滑稽なことなのである。

かくて、キャプテン・オーデュボンが固く口止めたのも、追手を逃れる手段であつたとする解釈を、証拠がないからというだけでむげに没却できなくなる。

更に彼をどこまでもドーフィンだと主張する人々に都合のよいことは彼の容貌や性格があまりにもドーフィンに酷似しているのである。

キャプテン・オーデュボンは、漁師の息子で、緒ら顔で、鼻は安座をかき、目はツボ目で、頭が不格好であつた。威容をつけるためにカツラをかぶつていたが、そのカツラが容貌とひき較べて不似合であり、それに丈は低く、横ぶりのする歩き方をする点など、一言にしていえば、いたつて風采の上がらない人であつた。オーデュボンとの共通点はどちらも情熱家で、頭健であつたというところだけである。

ドーフィンには、額が広く、鼻も高く、血色は皇后のそれを享け、眉も母と同じく弧状で、笑くぼがあり、それに耳聴く、脊もすなりと高く、いたつて高貴な容貌姿態であつた。これらのすべてがオーデュボンのそれらと符合していた。ただドーフィンの眼は青かつたといわれているが、似ていないとすれば、この眼の色だけであつた。また後年オーデュボンの描いた次男のジョンの肖像画はドーフィンそっくりであり、長男のピクターも高貴な風貌を具えていた。キャプテン・オーデュボンの容貌が以上のように子にも孫にも、微塵も遺伝していないのが不思議とされている。

ドーフィンの性質は陽気な方であつたと、母アントア

ネットが、いつていたそうであるが、それと符牒が一致するように、オーデュボンは熱情家で、わがままで、勇敢で、昂奮するたちであつた。

狩猟に対してオーデュボンは異状な趣味と腕をもつていたが、この性質はルイ 14 世や 16 世の趣味に通ずるものがあつた。

オーデュボンの手細工の器用さについても面白い符合がある。ルイ 16 世が一国の帝王にも似ず、錠作りに特別な趣味をもち、ヴェルサイユ宮殿の中に、鍛冶工場を作り、鍛冶屋ガマンを、師匠としていたという。むしろ不思議ともいうべき趣味をもつていた。オーデュボンがドーフィンだとすると、彼が手先が器用であつたのも、このルイ 16 世の影響をうけたことであらう。

トゥイルリイのドーフィンの部屋には鳥籠が常にかけてあつたといわれる。後年オーデュボンの鳥に対する異状な関心はそこから出たのだと。

オーデュボンは当時浪漫派華かな時代に生れながら、彼の絵は、その香りをつたえていないが、その絵心は、王宮を飾るために、当時の有名な画人によつて描かれた花鳥の絵から大きな影響を受けたのでないかと。

ルイ 16 世は、若い頃から地理学が好きで、全フランスを旅行して、フランスを地理学的、地誌学的に研究してみたいということを常に側近に洩らしていた。その血筋をドーフィン・オーデュボンがひいて、彼は終世席の温まることもなく、旅から旅へ自由奔放に飛び歩いたのであらう。等々。

このように彼オーデュボンをドーフィンにしたい人達にとつては、誠に都合のよい一致点を限りなく発見できるのであつた。しかも歴史の何頁かが、めくられてしまつた。生きていた時でさえ、ひたがくしにしていただけに、今となつては、信憑するに足りる証拠の一片すらないのである。

あの動乱の中で庶民の子供と皇儲をすりかえることぐらい、易々たることであつたらうし、従つてヘリック氏の実証と、これに反対する説とは甲論乙駁といった形でいつまでも続くことであらう。そしていつまでも未解決のままにますます人々の好奇心を昂じさせ、愛せられるのがオーデュボンである。

また、混血児を母に漁師の息子を父にしたというより、ブルボン王朝の血を享けていたという方が、彼の後世の業績が大きいだけに、よりロマンチックであり、甘美な夢を描く多くの人の感情を満足させることであらう。

事実はいくら長くとも限りがある。しかし人の想像は無限である。オーデュボンの9才前の秘められた事実は、かくてこの後といえども華やかに脚色され展開され

るにちがいない。

2 オーデュボンの名前

私はしばらく、人々の想像の解に乘らずに、ヘリック教授によつて確証された比較的しつかりした軌道に添つて、筆を進めようと思う。

オーデュボンの名前はどのような理由からか、随分変えられた。

4才の時フランスに連れて来られた時は、フォジールという名前であつた。彼より2才下の妹はムギューと呼ばれていた。前者は羊歯、後者は谷間の百合の意味である。おそらくキャプテン・オーデュボンが、彼等兄妹の生地を回想するよすがにとも思つてつけたものであらう。

しばらくしてフォジールは、ラ・フォレーと改められた。森林という意味である。羊歯にしても、森林にしても、当時から彼の後世を暗示しているかのようであつた。

このラ・フォレーの名前は、家庭では、ずっとそう呼ばれていたらしく、ことに妻のルーシイは終世この名を用いていたといわれる。

このフォレーはやがてジェーンと改称された。

1794年3月7日初めて彼はオーデュボン家に正式に入籍され、その時の公文書にはジェーン・ジャスキュー・オーデュボンとされた。この日付が、彼としては初めて公式に世にデビュした日であつた。オーデュボンはこの名を更に長くしてジェーン・ジャスキュー・ラ・フォレー・オーデュボンとし、しばらくはこれを用いたことがある。

彼はこの名前で渡米したのであるが、彼が19才の時、管理人のダコスタの問題やルーシイとの結婚について、父に意見を聞くためにフランスに帰つて来た。

その頃はフランスはナポレオンに統一され、国内の秩序がそなわると共に、彼の野望であつた世界制覇をめざして著々歩を固めていた時代で、青年達は戦場という大きな魔の祭壇に毎日のように吸い込まれて行つた。

キャプテン・オーデュボンは、彼の伴もまたその犠牲にあわなくてもないという不安があつたので、ついに意を決してアメリカに帰えすことになつた。この時彼の相談相手として、新しく契約されたフェルデナンド・ロジャ青年と2人、戦雲急を告げる欧州をあとにしてフランスを去つたのであつた。この時旅券に書かれた彼の名前は英国流にジョン・ジェームズ・オーデュボンと変えられ、生れもニュー・オルレアンとされていた。この名前が今我々に親しまれているオーデュボンのフル・ネームである。

20才頃キャプテン・オーデュボンと妻の署名入りのある公文書にジェーン・ラビンとされたことがある。この点とマドモアゼル・ラビンとキャプテン・オーデュボンとの間に、1人の息子があつたということを結びつけて、ヘリック教授は、オーデュボンは、世間で騒ぐようにドーフィンではないとしているのである。

彼をめぐる人々

1本の巨大な樹ができるには、決して忽然として降つて湧くものではない。その大木はその環境を形造つていく気候と土壌と生物の絶和であるともいえる。その各々の因子が光と水と栄養分を補給し、相互の競合や扶助にあつて甦めて壮大な樹型を造るのである。

オーデュボンを知ろうとするとき、われわれは先ず、彼を育て上げたこれらの因子である人々について知らねばならない。それはまわりくどいことかも知れないが、波瀾に富んだ彼の生い立ちには不可欠のものである。

3 フランスにおける家庭

キャプテン・オーデュボンはフランスのラ・ベンデーの貧しい漁師の息子で12人兄弟であつた。12才頃まで諸国を流浪して苦勞を重ねた人であつた。早くから船員生活をし、後に船長にもなつたが、一方事業家でもあつた。遠くサント・ドミンゴに航海して、絹、織物、酒その他高価な品物をその地の富裕な農園主に売り、帰路には砂糖を母国に輸入していた。幾度か海賊に襲われたが、1回もつかまつたことはなかつた。

アメリカの独立戦争が起きたときは、アメリカに左袒していたが、英国の私奪船にとらわれて紐育に投獄された。革命のすむ前は釈放され、間もなくド・グラッセの率いるフランス艦隊に身を投じ、軽快な駆逐艦を指揮するに至つた。かくてアメリカ軍に絶大な貢献をして、平和宣言までアメリカに留まつていた。のちカリビアン海の遠い島で取引をするようになり、そこで農園を經營した。彼はその外サント・ドミンゴ、ルイジアナ・ミル・グロブあるいは生地のフランスにも広大な土地を持つて、富有な生活をした人であつた。

彼が2児をととなつてロアル河畔のナントの町に住んでからしばらくして、後妻をもらつたが、この婦人は非常にやさしい人で後に女兒を産んだが、オーデュボン少年に対しては実子同様に育てた。少年が初めて覚えた“母性”は彼女であつた。

冬季家族はナントに住み、夏暑くなるとラ・ジェルベチーレの美しい田舎に移り住んだ。

キャプテン・オーデュボンは海員だけに、家を留守にすることが多かつたが、帰えつて来る度に、息子の無軌

道な蒐集癖に心を悩ましていた。少くとも彼と同様海員にするか、あるいは技術者にしたいのが、父としての願いであつた。

彼が 14 才になつたとき、ロッシフォールにある海軍兵学校に入れたのもそのためであつたが、そこで課せられる用器画、数学、物理等は、オーデュボンが最も厭つた学課で、ある日教師のすきを見て、教室を抜け出し、自由な青空学校に走ろうとしたが運悪くも、看守につかまり引き戻されてしまつた。たしなめられてはみたものの矢張りどうしても、兵学校の課程に我慢ができなかつた。キャプテン・オーデュボンもこのまま、この学校に押し込めておいては、将来、世界中で最も劣等な船員になるに違いないと思つたので兵学校の学業を途中でやめさせることにした。

彼は自分の伴の未来に対する能を誤らなかつた。それ程寛大であつたとも、自分の子を見るの明があつたともいえるのである。数学や用器画のきらいな伴に、剥製の鳥を買つて来てやつたり、バリーの絵画学校に入れたり、とに角将来の生活を維持するとは思われない非実利的な鳥の追求や、絵に対する趣味を許容するようになった。あまやかして育てたのではなく個性を尊んだのである。

まだ 10 才台のオーデュボンをアメリカの農園にやつたのも、おそらく自分亡きあと、農業収入で立派に生活できるようにとの深い思いやりからのことであろう。ナポレオンの徴兵が急を告げた時、逸早くアメリカに出発させたのも、伴の幸福のためであつた。

一見投げやりと見える程寛大であつたが、しかしダコタの問題や、ルーシイとの結婚問題については細心の注意を払つており、伴の言い分を充分聞き、そして理解のある判断を下してやつた。遠く異郷に離れていても、斯うした問題を父の許に相談に来る程オーデュボンは父を信じていたのである。

父の慈愛と、継母の愛情との中に、この不羈奔放な少年は少しもひねくれずに、のびのびと育つて行つた。

一稔の麦といえども、愛情なくして育つものではない。麦の力をよく見、そして見つて、歪めることなく、伸ばし、肥培管理されて初めて麦は実るのである。

4 ミル・グローブの人々

パークラメン河のほとりにミル・グローブという農園があつた。これもキャプテン・オーデュボンの所有地の一つであつた。この農園の管理者はキューカー教徒のフィッシャー家でフィラデルフィヤに住んでいた。

このフィッシャー家は地主様の子息を迎えて、一時は下へも置かない待遇をしていた。ことにこの少年がさる

やんごとなきお方の血を曳いていると思つていたので、自慢の種でさえあつたが、オーデュボンが常にフルートやバイオリンを弄んでいるのがフィッシャー氏の気に入らないことになり、苦り切つた顔で、彼の趣味に干渉するようになった。

オーデュボンにしてみれば、父の雇人の癖にという気が手伝つたりして、二人の間には越え難い溝ができるようになった。費府のずつと奥ミル・グローブにはウィリアム・トーマス夫妻が忠実に農園の小作をしていた。彼はそこへ行くと言ひ出した。行かれてしまつては主人に対して面目を失うのでフィッシャー氏は彼のミル・グローブ行を拒んだが、彼はどうにも居堪らなかつた。

トーマス老夫婦も矢張りキューカー教徒であつたが、決してフィッシャー氏のような分らず屋ではなく、気立もよく、また御主人のお坊ちやまだというので親身も及ばぬ程にしてくれた。

彼はその住み心地のよい農園に早く来ればよかつたと思つた。そして彼は初めてこの新大陸の自然をまざまざと見直した。それは人間の手によつて歪められたフランスの自然とは凡そ趣を異にした素朴さがあふれていた。

けがされない森林に行くと、松やヘムロックが巨大な樹冠をくり上げ、原始のままの威厳をそなえていた。

彼の最も愛する鳥は、これまた旧大陸とは全く別趣なものがあつた。そしてトーマス老人は、それらの鳥についての俗名をよく知つていたので、彼の調査には誠に好都合であつた。屋根裏には彼がフランスに居た時よりもつと立派な博物標本室ができた。

トーマス老人はオーデュボン少年の好みにかなつた料理をしてくれた。彼は森に行つて泥だらけになつて、冬中燃やしても充分な位の薪を採つて来た。煙炉にあたりながら 3 人は水入らずの楽しい生活をする事ができた。

また彼は近所のだれとでも直ぐ友人になれた。人々も気前のよい、立派な服装をした彼を尊敬してくれた。

彼には他人からの制肘や歪んだ枠を押しつけられることは堪え難いことであつた。といつても無為徒食をしているのではなかつた。何かしら世俗の尺度で律しられない性格を持ち何ものかに向つて絶えず努力していたのだ。彼はどんな場合でもそつとしておいてもらいたかつたのだ。そうした意味でトーマス家は彼の良き温床であつた。

5 ルーシイ及び家庭

彼が後日妻としたルーシイはウィリアム・ベークウェル氏の長女であつた。丁度彼が、フィッシャー家を去つてミル・グローブの農園に居を移し、そこでトーマス夫

妻の温い待遇を受け、青空学校に自由の翼を伸ばしていた時、隣のファットランド・フォードに豪壮な邸宅ができ、そこへ移り住んだのがベークウェル家であつた。

トーマス夫人から、その人達が英国系であると聞いた時、彼は永年父が、海の生活で、英国の私奪船や海賊に苦しめられたことを聞いていたので、英国人といえば、父の敵でもあり、自分の敵でもあるように思いこんでいた。だから英国系だというベークウェル家の話を聞くことをよろこばなかつた。

時たま、彼が森林に狩に行つたとき、ベークウェル氏と偶然落ちあうことになり、しかも教養もあり、寛容そうに見えるこの紳士が彼を愛し、彼も好ましく思つたりしたのが縁で、はじめ嫌つていたベークウェル家に入居するようになった。ルーシイを初めて見たのは丁度父の留守の時であつた。それが二人の初恋になり、ルーシイはフランス訛の強いオーデュボンに英語を教え、彼はフランス語や絵を手ほどきするようになった。

彼がベークウェル氏にルーシイと結婚したいと申し込んだ時は 19 才、ルーシイは 17 才であつた。

ベークウェル氏もこの派手好みで、快活で、こだわりのない高貴な容貌の彼を好んではいたが、白面の青年がどうして娘を養つてゆけるか、狩猟や絵画は紳士の嗜みとしてはいいが、ただそれだけに専念して、他に何の職業も身につけていない彼に、可愛い娘の一生を托すだけの勇氣はなかつた。

丁度その頃家庭教師であり、鉱山の経営の世話人としてやつて来ていたダコストと、彼との折合が悪くなり、1804 年、彼はフランスの父のもとに帰つた。そして父にルーシイとの関係を話し、ようやく父の同意を得て、1806 年帰米した。

彼は父の許しを得たことを話し、ベークウェル氏に彼の娘との結婚をゆるしてくれるように再び頼んだ。

その頃ベークウェル氏は再婚していたが、その継母は、この結婚に反対であつた。しかしルーシイはその反対を押し切つて、人生のサイコロを振ることにしていた。ベークウェル氏は、前途に暗い雲があるような気がしないでもなかつたが、二人の熱烈な気持には抗すべくもなく、遂に結婚費用全部を出してやつて二人を一緒にしてやつた。

1808 年 4 月 5 日オーデュボンは 23 才、ルーシイは 21 才であつた。

二人は結婚の翌日、人生の最初の振り出しをするために、かねてオーデュボンが小売店を開業していたオハヨー河畔のルイスビルに出発した。

ピッツバークまで 250 哩の粗い道を、乗合馬車でゆられ、ある時は河舟に乗り、途中幾度か青空の下で野宿も

した。既にこのこと自体が、これから二人の間に起きる困窮の生活の縮図みたいなものであつた。

翌 1809 年 6 月 12 日二人の間に長男が生れた。ビクター・ギフォード・オーデュボンと名づけた。

1812 年の秋ヘンダースンに移つた。ヘンダースンでは 3~4 年間儲かつたので彼等の暮らしも相当立派になつた。次男のジョン・ウッドハウス・オーデュボンが生れたのもその頃であつた。女の子が 2 人生れたが夭折してしまつたのでルーシイの愛情は自然 2 人の男の子に注がれた。

彼女の運命は、決して華やかなものではなかつた。オーデュボンの小売商店や、製材業などの事業にしても、失敗の連続であつた。ことにヘンダースンでの製材、製粉事業の失敗から彼は投獄されてしまい、破産の宣告でようやく釈放されたが、その暗い赤貧の家計を彼女はランキン家の家庭教師をしながら、何とかやり繰りしていた。獄から出て来たオーデュボンはすっかりつきのめされたようになり、この時だけはさすがの彼も小鳥のことは考えなくなかつたと述懐した程萎れかえつていたが、ルーシイだけはあくまでも彼を信じ、勵ましていた。

オーデュボンの生活は、常に一ヶ所に留まらなかつた。小鳥を追つて、森林に沼沢に、原野に、席の温まる日とてなかつた。ルーシイと子供達はいつも留守をまもらねばならなかつた。そればかりでなく仕送りも途絶え勝であつた。

オーデュボンが、彼の名著“アメリカの鳥類”の出版をしようと決心したのは 1820 年頃であつた。この計画を打ち明けたとき、心から讃意を表し勵ましてくれたのは彼女だけであつた。

ルーシイはその後ベニュー・サラ河のほとりにあるビーチ・ウッド(グローヴともいわれた)のバーレイ夫人の世話を受け、夫人の肝煎りで、附近の富有な農場主の子弟を集めて第二の私塾を開くことになつた。

1826 年 5 月オーデュボンは、彼の作品を世に問う可く渡英した。3 年間の滞英を余儀なくされたが、1829 年帰米した彼は仕事が多忙をきわめてルーシイに遇えなかつた。然しいつも手紙を出し、ことに第 2 回の渡英には是非ルーシイを連れて行きたい旨を申し送つていた。私塾の収入も相当あり、生活が安定していたためか、あるいは夫の前途により深く深い不安を感じたのか、色々な口実をもうけて腰を上げなかつた。このためにある著者は、彼女は“単なる婦徳や、ロマンスの具体化したものではなく、むしろ頑固で鈍感である”と酷評する人もあるが、女である限り、冒険はしたくないのが人情であろう。

当時ビクターもジョンもニコラス・バーツォードの事

務所で働いていたので、オーデュボンは子供達に会い、再び汽船でビーチウッドに急いだ。彼の気持は“汝と明日を思うこと切なるものがある。今後永久にお前を幸福にしてやりたい”のであつた。又“老人になればなる程、私は、お前の価値を知るようになり、又それだけお前と一緒に暮したい”のであつた。ようやく晩年に近づいたオーデュボンとしては、留守勝であつた過去を一挙に挽回したいのであつた。

彼が望んでいた“幸福なる晩年”が来るのかどうか、それは彼女としても、予測ができなかつた。しかし再度人生のサイコロを振る積りで、家庭教師としての独立の生活を清算して、彼と共に英国へ行くことにした。

当時彼は非常に多忙をきわめていた。複雑な出版の手続、自然観察の記事、これらの仕事については、彼女は助手としてどうしても必要な存在であつた。彼の出版が具体化すると共に、彼女の非実用的な決心は、実際は実用的な決心でさえあつたのである。その後、に於ける夫婦生活は、彼が探険旅行に出かける以外はほとんど行動を共にする様になつた。

“ただ一つ誠の幸福とは、良き結婚のことである”と彼が洩らした言葉はルーシイを如何に愛していたかが判る。又ルーシイも“私が若しやきもち焼きの女であつたら大変だつたでしょう。何故なら無数の小鳥という恋がたきがあるんですもの”と友人に話した事がある。裏をいえば、オーデュボンの仕事について真からの理解をもつていたのである。

彼は晩年“アメリカの鳥類”の縮刷版を出して、相当な収入を得た折、紐育のハーレム村から程遠からぬ所に30エーカー程の土地を買い求め、これをミニーズ・ランドと名づけた。これは彼がかつてエデンバラに居た時覚えたスコットランド語で“お母アちゃん”という児語である。ルーシイを愛するの余りつけた名前である。

ジョンもビクターも父のすすめで幼時から絵も習得していた。しかもジョンは相当な腕前で、1837年頃の経済恐慌で、一家の生活が苦しくなつた時も、父を助けて肖像画をかくて、家計を助けていた。ビクターも肖像画家として恵まれた天分をもつていた。

オーデュボンが晩年フロリダの探鳥旅行にでかけた時チャールストンで知り合つた牧師で生物学者であつた有名なバッハマンとは無二の親友になつたのであるが、ビクターとジョンはバッハマンの娘エリザとマリアと結婚し、15年以上この家族は相寄り、相扶け、日本流に言えば、全くの水入らずの家族生活をしていた。

晩年書き出し、彼が死んでから出版された“北アメリカ産胎生四足獣類”は、彼が76図版、ジョンとビクターは74図版、解説は全部バッハマンによつてでき上つ

たもので、このことは彼が“アメリカの鳥類”の出版に専念していた時“夫、妻、子供から成る協力会社のような形で働きたい”という念願が実現したものである。

彼の周囲には次第に孫達が数多くなつた。彼はよく古いフランスの歌をうたい、フリュートを吹いた。夜になるとビクターの妻は、彼のためにスペインの歌を唱つてやつた。

前半生全く混迷の嵐の中を木の葉のようにもまれて来た彼の家庭という船が斯くて平和な落ち付きを見せるようになったのも、一つには船員としてのルーシイのよき協力があつたればこそであつた。

良き結婚は、良き家庭を作り、遂には明るい人生の彼岸に達するものである。

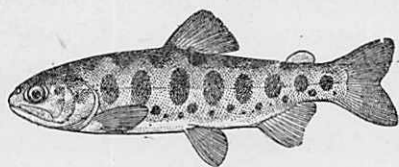
(39頁よりつづく)

註七。ヤマメすなわちマスが雌雄とも陸封されて棲息する例として註二の後段で利根川の支流阿能川のシロヤマメを挙げたのであるが、大島正満博士は更に次のような例を挙げて説明しておられるのである。すなわち「事実、に於て海魚と思はれる桜鱒が人為的に環境を変へれば直に淡水魚となりうる。琵琶湖では海産のものと同じ大きさ同じ色彩の桜鱒が盛んに漁獲される。之は北海道の桜鱒が同湖の中で意外な発育を遂げたものである。(中略)現在の状況では右の桜鱒は在来棲息しつつあるビロマスと駆逐せんとするが如き勢を示してゐる。この事実を徴すれば塩水は絶対の必要ではない。寒冷なる水と豊富な動物性食餌があれば足りる。」として、琵琶湖の水はC28°の夏でも湖底はC8°であるというのである。また箱根アシノ湖では公魚が繁殖してから桜鱒は825mmに成長しているというのである。

あとがき

本稿を林業技術協会に届けてから、私は両親の法要のため郷里に帰つたのだが、その帰りの汽車の中で偶然千明康君に会つた。千明君は奥日光の丸沼菅沼でのニジマス、ベニマス等の養殖状況を調べに行つた帰途だということであつたが、またまた、同君から面白い話を聞いたので、ついでにこれも紹介しておくことにする。すなわち千明君の話によると、菅沼ではニジマス、ベニマス等を刺網で獲っているのだが、この2、3年以來、雄ばかり獲れる年と雌ばかり獲れる年とがあつて、人工孵化をするのに困っている。そして、今年は雄ばかり獲れているので、是非とも雌のいるところを探そうと技術者に厳命して来たばかりだというのである。それで私は、ヤマメの雌すなわち桜鱒は海に降つてから北洋にも行くのであろうから、雌は雄よりも冷水を好むのではあるまいか、従つて、雄の獲れる場所よりも、もつと深いところを探したらどうかと素人論をやつてみた次第である。

ヤマメの話



伊藤 莊之助

一日森林を歩き廻つて山小屋に泊り、同僚友人等と夕食を共にしながら、四方山の話をするのは、山に生きるものにとつて何よりの楽しみであるが、ただこの場合、夕食の膳にヤマメがないと何となく淋しいものである。これは、私のヤマメに対する感嘆であるが、読者の中にも私と同様、山小屋の夕食といえばヤマメを連想される方もすくなくあるまい。

このように、山の生活とヤマメとは切つても切れない関係にあるのだが、ヤマメの生態の不思議さに気が付いていない方も多いようで、松川理事長に勤められるまに、私の体験と学者の研究とを紹介してみようと思う。

×

×

私は越後の山村に生れた。詳しくいうと、新発田営林署管内の胎内川事業区を貫流する河の畔である。小供の時からヤマメを獲ることを楽しみにしてきたのと、父や祖父も釣や網の漁が好きであつたので、親子三代に亘つて獲つたヤマメは非常に夥しい数になるばかりでなく、村人達もまた相当多数獲るのは勿論のことであるが、どういう訳か、私共の河で獲れるのは雄ばかりであつて、だれも雌を見たものはない。

私共はヤマメの3、4才位のものを当才と呼び、5、6才位のものを2才、1尺内外になると3才と呼んでいるが、3才は勿論、2才当才とも、その腹の中には俗にシロコという雄特有のものをもつていて、普通雌にあるような黄色の卵をもっているのは全然ない。まことに奇妙なことで、何んとしても納得ができないのであつた。これについて、私の祖父は、まだ小供であつた私に向つて、「この河では雄ばかりだが、ある地方には雌ばかり

りいるということだから、どこかで落合つて小供が生れるのであろう。ヤマメまたはヤマベと呼ぶのも雄と雌とが別々と棲んでいるから、ヤマメという言葉から訛つたものだそうだとはいかににもつともらしい説明をしてくれたものであつた(註一)。しかし、だんだん物心がづくに従つて、2才以上のヤマメが時によると全身黒づくると、鮎やハヤも産卵期には赤黒く色付くのを思い合せ、また、ヤマメは現に一年中河に棲んでいるのだから、どこかに産卵に行くという祖父の話は腑に落ちなくなつてしまつた。

私共の河には俗にいう本鱒も非常に多い(註二)。これは早春になると海から遡つて来るのだが、最盛期には深い淵の中に10数尾も遊弋しているようなこともあつた。こんな状態だから、鱒も相当沢山獲れるが、これはまたヤマメとは反対にほとんど雌ばかりで、雄はごく稀にしかいないのである。

読者諸君の中には鱒の水面に跳ねるのを御覧になつた方もあるだろうが、深山の静寂な深淵で鱒の跳ねるのは実に物凄くものである。私はある時ヤマメ釣りに行つて、5、6間の深さはあるであろうと思われる碧潭の巖の上で独り静寂を味つていたところ、ビシリッと鞭を鳴らすような激しい音が溪谷に響きわたるのを聞いたので、急いで音のした方を覗いたら、鱒の跳躍した水の飛沫で2、3間位の虹が映えていた。私はあまりの壮厳さに呆然としたことがある。村人達は鱒がその尾で、川を渡る蛇を断ち切つて食うというのであるが、成程と思つたことでもある。

それはとも角、ある日、鱒が産卵していると聞いたので、あわよくば釣つてやろうと出掛けてみたことがある。その時は、残念ながら鱒の代りに3才になるヤマメを釣り上げただけではあつたが、そのヤマメは真黒に色付いているばかりでなく、俗にいう白子が馳けて流れ出るのを発見した。村人達は、ヤマメが鱒の卵を食べに集まるといつてだれも不思議に思わないのであつたが、多少なりとも科学を学んだ私には、最早、ヤマメは卵を食べに来るのではなく、鱒の生殖のお手伝いに来るものであることを疑うことができなくなつてしまつた。そして、鱒とヤマメの間に生れた稚魚の雄は河に居残つてヤマメとなり、また、稚魚の雌の方は海に下つてから鱒となつて産卵の為に、再び元の河に遡つてくるのであろうと思うようになった。

さて、学校を卒業するとヤマメ獲りはもうできなくなつてしまつたが、ヤマメに対する自分の推察が果して正しいものかどうか、専門家に教えて貰うか、または、何か判断の裏付けになる資料を得たいと思つていたが、その機会に恵まれずにいた。

私は学校を出てからしばらくして、大正11年に岡山県庁に勤めることになつた。同僚である水産課長兼水産

試験場長の姉帯定助君は水産講習所出身であつたので、早速ヤマメについて質問をしてみたのである。ところが、同君の答としては「ヤマメについてはまだ詳しい研究はないように思う。ただある種のマスが陸封されたものであることは推察される。」というのであつて、雌雄の問題とヤマメと鱒が同じものであるという私の推論については説明をして貰えなかつたのである。しかし、その際、同君より石川千代松博士の琵琶湖の小鮎に関する研究を教えて貰つたので大変裨益するところがあつた。すなわち、石川博士の研究によると、琵琶湖の小鮎は普通の鮎と全く同一のものであるが、琵琶湖で生れ琵琶湖だけで育つので、少さいままで一生を終るのであつて、これを食物の豊富な河川に放流すれば普通の鮎になるというのである。なお、姉帯技師は石川博士の依頼を受け、水力発電の堰堤のために鮎の遡上できない高梁川の上流に小鮎を放流して試験をしてみたが、いずれも立派な普通の鮎になつたと教えてくれた。私はこの話によつて、本来大きくなるべき魚でも、何等かの関係で陸封されると、少さいままで一生を終るものであることを知るに到つた。

次に私は、大正 14 年に青森営林局に勤務することになり、岩手県下の外山にある御料牧場の場長官舎に一夜御厄介になつたことがある。山の中のことで、例によつてヤマメの御馳走になつた。場長の足沢さんは釣り好きであるというので、早速、ヤマメに対する疑問を話してみたところ、即座に私の意見に同意してくれたばかりか、ごく最近、北海道大学の某博士が朝日新聞の科学欄に、自分の考えていたことと同様なことを発表してあつたことを教えてくれた。ただ、その博士の調査によると、ヤマメにもごく稀れには雌もいるというのであるが、この点だけは、自分の岩手県における経験と違うということであつた。

以上は私の狭い経験から推察していたヤマメの習性であるが、いかにも面白いので、ヤマメに関係のありそうな人に自説を吹聴していたのである。しかるにその後、ヤマメには雌もあること、また、普通にはヤマメのいると思われない場所にもいることや、その他いろいろと面白い習性のあることを知るに到つたのである。これは全く偶然の機会からではあるが、松川理事長のお蔭であるから、その経緯を説明しなければならない。

それは横川林野庁前長官がシベリヤの抑留生活から帰つて来て、まだ林政課の一隅に席をおいていた時のことである。ある日、満洲に関係のある話を相談するために、千明康君の肝煎り、駿河台の近藤繁司君の留守宅に、松川、横川その他二、三の諸君と会食したことがある。近藤繁司君は満洲でホテル、ニューハルピンを経営

し、また、白系露人を使つて伐採事業をやつていたので、留守宅の方の作つてくれた料理は、露西亞流のオーダブルと成吉思汗鍋であつたので、自然、満洲での思出を語り合うことになつた。それで、私も在満当時の思出として、当時牡丹江営林局長であつた松川理事長の愛蔵していた投網を借用し、横道河子という所で瞬く間にヤマメ（実はヤマメとアメノウラノの合の子みたようなもの）を数十尾獲つた話をした。

松川理事長は御承知のように、人に話をさせるのが名人であるから、「お前の持論であるヤマメの話もやつてみる」というので、私は前述したように、ヤマメは雄ばかりであることを話したのである。「ところで——」と、今度は、松川理事長が議長格になつて千明君に対し「君は奥日光の丸沼でアメリカ鱒を養殖しているそうだが、ヤマメは雄ばかりかどうか」と質問したものである。私は千明君が自分の説に同調してくれるものと期待していたのであるが、千明君の答は実に意外であつた。「私は親爺の代から永年ベニマス、ニジマス等を養殖しているのだが、ヤマメも養殖してみようと思つて、村の人達にヤマメを採集して貰つたが、自分の川(利根川)では雄でも雌でも獲つて来てくれた。もつともヤマメの養殖はむずかしいので今ではやつていない」というのである。この答を聞いて、松川理事長から「どうだい」と言われるまでもなく、私は啞然というよりもむしろ呆然としてしまつた。「ところで——」となおも続けて松川理事長は「ヤマメの棲んでいる上流にはイワナがいることになつてはいるが、イワナの棲んでいる上流には、どんな魚も棲んではいけないということになつてはいるだろう(註三)。ところが——である。青森県下北半島の大畑川では、イワナの棲んでいる上流に滝があつて、その滝の上流にスギノコと呼ばれているヤマメがいる。そして、今までに見た範囲のそのヤマメは驚くなかれ雌ばかりなのだ」というのである。これもまた、私にとつては驚くなといわれても驚かざるを得ないことであつた。

こんな訳で、私は専門家に啓蒙して貰わなければならぬと思つたので、早速友人に頼んで水産庁の調査課長をしていた伊藤潤氏に紹介して貰つた。しかし、伊藤潤氏は「自分は近頃淡水魚の研究から遠ざかつてはいるから」といつて、今度は資源科学研究所の中村守純氏に紹介してくれた。

中村守純氏は私の話を一々聞きながら聞いた後、「アナタの推論したように、ヤマメとマスは全く同じものである。また、新潟県や岩手県のヤマメが雄ばかりだということも間違いではない。しかし千明さんのいわれるように、利根川には雄と雌と恐らくは半々位の割合でいるであろう」といわれたので、私は何んとなしに救われた

ような気がしたのである。

なお、中村守純氏はこの話をした後で、ヤマメの分布その他につき、色々面白い話をしてくされたので、次にこれを紹介しようと思う。以下は同氏の話である。

ヤマメは、太平洋岸では、箱根から流れ出る河の以東に棲息していることになっている。そして、それから西の方にはビワマス（アメノウオ、アマゴ、エノハなどと呼ばれる）が棲んでいるが、これはヤマメとは全然別のものである（註四）。ただ自分は偶然の機会で大分県のある地域にヤマメの棲んでいるのを発見しているが、これはきわめて稀な例である。次に、日本海岸に面した北側では、北海道は勿論、奥羽、北陸、山陰、九州の北岸にわたって棲息しているばかりでなく、台湾の新高山にも棲んでいる（註五）。そして、ヤマメの南限地帯では、雌雄とも半々位の割合であるが、東北の方に行くに従って雌の割合がすくなくなり、遂には雄ばかりになってしまう。

ヤマメの稚魚が、どうして、河に残るのと海に降るのができるのか、その原因はまだ究明されていない。しかし、自分はヤマメの稚魚を見れば、海に降るものと河に残るものとを鑑別することができる。それは、海に降るものは河に残るものに較べて白っぽいからである。こんなことから考えてみると、あるいは、成熟のよいものは河に残り、成熟の遅いものは海に降るのではあるまいかと思われるので、ホルモンの操作によつて雌も河に残るようなことができないものか、機会があつたら研究してみたいと思つてゐる。

電源開発のために堰堤が造られ、鱒が自由に遡河できないようになってきたら、ヤマメの雄ばかりいる地方では絶滅する虞れがあるであろう。それで、アメリカ鱒またはビワマス等の合の子を作ることが考えられ、実験もされているのであるが、その結果はまだ不明である。

ヤマメとビワマスの分布や、ヤマメの雌がいるかどうか等に付いて調査する場合に、注意していただかねばならぬことがある。それは、水力発電の堰堤ができて、鮎が遡れなくなつたため、琵琶湖の小鮎を放流するところが多くなつたことである。これらの地方では、琵琶湖の小鮎の中にビワマスの稚魚が混入して放流されていることがあるからだ。ビワマスの稚魚には雌もあるのだから、これをヤマメの雌と間違つてはならないのは勿論、ビワマスが棲んでいるから、その郷土であると速断してはならないのである。

以上は中村守純氏から教示を受けたヤマメの一般論であるが、下北半島の大畑川のスギノコ（ヤマメ）が雌ばかりであるということについては、次のような話をしてくされた。すなわち、あの辺のヤマメは雄ばかりいるの

が普通だと思われるのだが、雌ばかりいるというのは珍しい話である。あるいはイトオではないかと思うのだが若しイトオであつても、昔は東北地方に相当棲息していた記録があるのに、近頃は絶滅しているのではないかとされているから（註六）、若しできるなら採集して送つてくれないかと依頼されたのである。

このような次第で、私は松川理事長に中村守純氏の話を報告すると共に、大畑川のスギノコの標本を送つてくれるよう頼み、また、松川理事長は早速、当時青森県林局の作業課長であつた福田省一君に依頼し、スギノコを十数尾送つて貰つた。

中村守純氏が福田君から送られたスギノコを調べた結果は、ヤマメではあるが雌ばかりではなくて、雄もいることが解つたのである。これについて、中村さんは、「全く珍しいことである。恐らくは、非常に古い時代に、流に依つて海との交通を遮断せられ、雄と共に雌も陸封されたものであろう」といわれたのである（註七）。

これで、私のヤマメの話を終ることにするが、本稿を書くに際し、専門家の書いたものを読んでみると、まだ、いろいろ面白いことがあるのを知つたので、これは、註として付記することにした。なお、私にヤマメの概論を教えて下された中村守純氏には岡田弥一郎氏との共著で日本産淡水魚図鑑（日本出版社、定価120円）がある。ポケットに入れる小冊子であるから淡水魚を釣られる方のため参考書となるであろうと思うから御紹介しておくことにする。

註一。ヤマメは鰻（ヤモメ）という言葉から転化したものだとは、一般にいられていることである。試みに、広文庫という百科辞典（物集高見編集、大正5年出版）を開いてみると、「理齊随筆 529。也麻米魚。やまめ。日光の奥にやまめといふ魚あり。雌雄はなればなれに遊ぶ。所の人は祝儀に用ひず、やまめは鰻なりと理齊先生に聞けり。」と書いてある。

なお、大島正満博士は「ヤマメ及びアマゴの分布境界線について」地理学評論第6巻第7号（昭和5年7月号）の山崎直方博士記念論文集に、20数頁にわたつて記述しているのであるが、その中に次のような記事がある。すなわち、「奥利根では利根川の本流水上駅附近までは今でも産卵期に桜鱒が溯上して来る、而して平時その附近にヤマメはあるが、殆んど凡てが雄魚である。雌魚は利根の本流を経て一路海に赴くものであるが、北海道の河川と異なり棲息している数が少いので、河中に越冬する雌魚が居るべき筈であつて、姿を現はす機会が少いのである。然るに、湯原温泉附近で利根川に注ぐ阿能川といふ溪流にはヤマメの雌雄が殆んど相半して棲息してゐる。阿能川にはシロヤマメがあると土地の人が言ふ

て居るが、之は体鱗が剥がれ易くて銀光りのする雌魚のことを言ふてゐるのである。この溪流が利根の本流に注ぐところに余り大きくはないが、一つの飛瀑があつて魚族の往来を沮んでゐる。土地の古老の言によると、阿能川には其の昔ヤマメが棲息して居なかつたが、下流から移殖した結果、今日のやうな状態になつたのであると。此処に陸封された雌雄が居るのは、前の場合の如く水温の關係がその因をなして居るのでなくて飛瀑が本流を通じて海へ遁逃することを阻んで居るからである。」本文後段は下北半島のスギノコの参考にもなると思ふから摘記した。

註二。本文中、本鱒または鱒というのは、サクラマス *cherry salmon* であつて、カワマス *brook trout* ではない。カワマスは北米東部の原産で、日本へは明治35年初めて輸入され、ニジマスと共に各地で養殖されているものである（参照、日本淡水魚図鑑）。

註三。ヤマメの上流にはイワナが棲み、イワナの上流にはドンナ魚もいないというのは通則であるが、理学博士田中茂穂著魚の科学（昭和16年11月再版）には次のように書いている。「イワナはヤマメよりも北方のもので、我国の分布上の南限は和歌山県、山陽道では山口県岩国川、山陰道では島根県西部の高津川の支流匹見（ひきみ）川である。山間の溪谷ではヤマメよりも上流に分布し、本流にヤマメのある処で、その支流にイワナのあることがあり、支流によつてヤマメはあつてもイワナのない処や、これのある処もある。つまりイワナはヤマメよりも冷水を好むものである。」

註四。大島正満博士の「ヤマメとアマゴの分布境界線」は次の通りである。

「ヤマメとアマゴとは一つの河川中に混棲してゐるわけではなくて、その棲息する場所が定まつてゐる。先づ両者が劇然と分たれる個所を挙げてみると、箱根の早川に棲息するものはヤマメで、函嶺以西の河川に棲息するのはアマゴである。又甲州笹子峠から大菩薩峠附近を調査した結果によると、その東側を流れる桂川上流のものはヤマメで、西側を西南に流れて富士川に入るものにはアマゴがある。奥多摩の丹波川、奥秩父の荒川、信州の千曲川、犀川等のものはヤマメで、太平洋に注ぐ天竜木曾飛騨等の諸川のものはアマゴである。以下西するに従ひ、日本海に注ぐ諸川の上流にはヤマメを産し、太平洋に注ぐものにはアマゴを産し、その分布境界線は山陰山陽の分水嶺に沿つて遠く西に延びてゐる。予が調査せるところでは、ヤマメが棲息する最も西方の河は山口県美祇郡赤郷村附近を流る三隅川の上流であるが、瀬戸内海に注ぐ諸河川のものゝ悉くアマゴである。九州、四国、畿内、伊勢、紀州等のものは全部アマゴである。斯くて日

本全土はヤマメ、アマゴの分布上二つの大なる地域に別たるわけであるが、往時相模灘に両者の原種が混棲してゐた時代もあり得るわけであるから、相模灘に注ぐ河川には両者が入り交つてゐてもよい筈である。馬入川の一支流や酒匂川及び早川に朱点のあるものが現はれると田中茂穂氏は報告してゐるが、予は未だそれ等の河川でアマゴを見たことがない。然し田中博士の目撃されたことに誤りのあるべき筈がなく、また然くあるのが自然的であるから、中津川以西函嶺に達するまでの地域を両種の混合地帯と見做して置く。」

註五。中村守純氏は大島博士の説を基として私に説明して下されたのだから本文とは多少違つた表現をされたのであつたかも知れないが、ヤマメは日本海に面した北側では山陰地方は勿論九州の北岸ばかりでなく、台湾の新高山にもいるとした方が話として面白いので、本文のように書いてしまつたのである。事実、また、田中茂穂博士の「魚の科学」によつても「マスは普通は瀬河魚で其の一品種はヤマメといふ。一生を河の上流で送る。之にも三品種あつて、南日本にゐるのをアマゴといひ、雌雄同数である。相模川から利根川附近までにゐるのをヤモといふ。雌雄がある。時には雌の一部は海に降つて成長する。東北地方から樺太までゐるのはヤマベといひ、雄は河に留るが雌は大部分海に降つて成長しマスとなる（中略）。台湾大甲溪の上流にもヤマメがゐる。之は上記の三形の外とも思はれるが明らかでない。」として台湾にもヤマメがゐるとしているのである。

しかるに大島正満博士は「ヤマメ及アマゴの分布境界線について」に於て、「1918年台湾大甲溪の上流で初めて捕獲された鱒の雄魚には体側に朱点が散在してゐたが、之は学界未知の種類であると推断してジョルダン及び予は之に *Salmo formosanus* といふ新種名を与へたが、後に至つて該魚の種名は *Oncorhynchus formosanus* (Jordan & Oshima) と改められた。ところで、この種の体鱗を今日精査して見ると、その構造アマゴと全然同一で違ふ処がない。且つ又形態学的にも両者全く同一であるから、台湾の鱒は琵琶鱒と同一種であると推断する。」としているのである。

註六。イトについては、田中茂穂博士も「魚の科学」に於て、「イトは青森県及その以北にゐるもので昔は岩手県にもゐたやうであるが絶滅したものか、それとも昔からゐなかつたものか明らかでない」としているが、林野庁猟政課長の葛精一君は私に「自分の若い頃は北上川でイトの大きいのを釣つたものである。近頃は大きいのはいないようだが、小さいものなら今でもいる」と教えてくれた。

(35頁下段へ)

大 東京で不足とあらば、世界の銀座とよんでもよい。その銀座のまん中に、コケシの専門店があるという、世は正しくコケシ時代である。コケシの魅力が何に通ずるかはしばらくおいて、コケシときつてもきれない、その製造業者が、いわゆる木地屋（キジヤ）である。聞いてびんとくる名もあるし、見てちゃんとわかる名もあるなかに、木地屋の名は、比較的そのものずばりとは来ない。その木地屋が、実はわが林産史の一部面を担当して、製炭に、木工芸に、漆器工業に、断然たてまつられてよい、偉大な功績をのこしているのだ、といつたらちつとはおどろいていただけるかどうか。わが民俗学の上からみてもこの木地屋を対象とすることは面白く、話の種にも充分なる。少しくお目を拝借したい。

狭い4つの島、諸国銀光地とよぶのもどうか、という説もあるが、やつぱり諸国諸果があつて、全国各地色とりどり、柳は緑、花は紅である方があくびが出ない。これはおみやげもの店にしても、そうあつて欲しいとおもうが、ヨーロッパには350、それに対して1,000以上もある、日本の温泉が、コケシ氾濫（ハンラン）という当代風景では、誰よりも木地屋さんが忙がしかろう。コケシの本場は東北地方の温泉地帯を中心とするが、木地屋は元来全国的に分布していたもので、そのもとはコケシでなくて、お椀で売出した。幼時父母から聞いた記憶のうちからこのお椀がよく出てくる。谷川からお椀が流れてきて、その谷川をさかのぼると部落があつて、それからどうかした話。一寸法師が、お椀の船に乗つてはるばる都に出たとかいう話。諸国に椀貸伝説というのが今も伝わっていて、これなどははつきり木地屋の宣伝に由来するという話。椀の歴史も相当古いが、その製造業者である木地屋の沿革も古い。奈良朝（紀元1368、和銅元一1444、延暦3）に始まるといわれる。

日本に農業がはじまつて、これに同調しなかつた連中が、山に走り、海に走つて、非農民、無籍民、漂泊民となつた。いわゆる海部（アマベ）に対して、いわゆる山部（ヤマベ）の系統に、この木地屋族を含めるのが、筆者の持論であるから、木地屋の歴史は相当古いとおもう。おなじく山部ではあつてもこれはある時代に、そのころとしては驚異の機械をえて、一種特殊の工人として生活した。これがかれらの特色である。驚異の

筆者・元帯広大学教員

機械とは、轆轤（ロクロ）である。一本の心棒がある、それに材料の木を打ちつける、心棒に刃ものをあて、心棒の回転する力で材料を削る。この簡易至便の機械を携えて、全国的に広汎に、山から山へと良材を求め、麓から谷へと安住の地を探つた、一種の放浪生活群が木地屋である。木地師、木地づくり、ロクロ師とも呼ばれる。

木地屋の本場として現に認められているのは東北の山村である。岩代（イワシロ、福島県）を南限地帯として、東北を縦断する脊梁山脈の両側、その山腹または山麓で

ある。木地屋が住んでいなくとも、地名に木地山、木地小屋、木地畑などあるのもそのゆかりの地である。もとは「木地」でも、今は「雉」とかいてあることもあるからわかりにくい。東北に木地屋の多いのは、その昔、蒲生氏郷（ガモウウジサト）が会津転封のとき、祖先がこれに従つて猪苗代湖（イナワシロコ）の南岸、安積郡（アサカゲン）福良

村（フクラムラ）に移住したにはじまると木地屋の子孫は伝えているそうである。そういう一団も確かにあつたかも知れない。そのはじまりとならば、しかし、もつと古きにさかのぼる。

会 津若松城はそのかみ黒川城といつて、華名氏代代の居城であつたのが、その後（紀元2249、天正17）伊達政宗に攻略せられた。その翌年、豊臣秀吉が小田原征討の序に奥羽をしたがえ、政宗も帰伏して、その侵地を返した。秀吉は家康と相談して、蒲生氏郷を適任とし、勢州松ヶ島12万石から会津100万石に抜擢して奥羽の押えとした。木地屋の東北初住説は、その時のことを指すらしいが、ロクロ細工組は平泉に栄えた藤原氏の世にも椀を製造していた。蒲生氏以前、会津を攻略した伊達政宗は、会津磐梯山（パンダイサン）の北、檜原湖畔から、木地師新国掃部を召抱え、その子孫が今も仙台市の西北部に近い大沢村滝の上にいる、ともいう。木地屋の東北漂泊はそんなに新しくはない。

仙台のことをいえば、東北本線白石駅から西へ約2里金創の湯として古くから名をえた鎌先温泉から、湯川という溪流をさかのぼること半里のところに12、3戸の部落がある。刈田郡福岡村大字八宮字弥次郎という部落で例の東海道中膝栗毛の栞面屋（トチメンヤ）弥次郎兵衛を、駿河府中の出身とするのは紛れもない嘘で、実はこの村の出身者だ、その生家もこれこの通りあると村人は意張っている。部落のはずれに、惟喬親王（コレタカシンノウ）の石碑というのがあり、ここの学校（分教場）

・随筆・

椀からコケシへ

—特殊工人
木地屋の話—

横田精一郎

(29. 12. 17 受理)

ではその命日が臨休となる。惟喬親王は、木地屋の祖神とあがめる人。この地は鎌先温泉へコケシを供給する木地屋部落である。

惟喬親王とは、いうまでもなく第55代文徳天皇（紀元1510、嘉祥3、3～1518、天安2、8、在位）の第一皇子である。例の在五中将葉平の仲よしで、葉平夫人の父（紀有常）と親王の母（紀静子）とは兄妹、葉平夫人と親王とはいとこ、という間柄でもあつた。異腹の弟（母藤原明子、祖父藤原良房）、惟仁親王（清和天皇、紀元1518、天安2、8～1536、貞観18、11）が皇位を継承して、その身をひいた。その隠棲の地が近江愛知郡小松ヶ畑小椋郷（近江愛知郡東小椋村）の山中で、その墓というのが洛北若狭街道を三千院の少し手前から、近江の仰木に越える路の南の山際にある。

親

王は藤原氏の出でないために、薄幸世を回避した。その親王に伝説がからんで親王はロクロ工業の祖神となり、小椋（オグラ）村は木地屋の本拠となり、ロクロ文化の発祥地となる。伝説によると、つれづれなるままに、ある時親王は、ドングリのへたをもてあそび、その着想から腕をひく機械を考案する。二人の樵夫に実験させて軽便簡易のロクロが生れる。一人に伯爵守小椋光吉、一人に信濃守藤原良久を名乗らせる。墨附をいただいて、これが木地屋の元祖となる。ざつとこうした経緯で、その後木地屋の姓には、小椋、小倉、大倉、大蔵、佐藤、高橋、というのが多い。こういう姓の人には、木地屋さんの子孫もまじっているだろうということにもなる。

伝説のお墨附から糸をひいて、木地屋には由緒書の一巻がある。木地屋文書というのがこれである。かれらはこれを見たと眼がつぶれる、と伝えてきたが、それには「轡轡の立つ所から馬の蹄の通る所」天下御免、伐木勝手たるべしという意味の、都合のよいことや、ロクロをひくには、天子の前でも安座して然るべしという意味の特権公認の趣旨もあるらしい。漂泊止住して、先住者から軽視されがちのかれらである。これは一種の支柱として、かれらに、ほこりと心の慰めを与えたことだろう。それ以上のものであつたかないかをいうなら、それは小説の領域となつてしまう。

木地屋は、祖神とする惟喬親王を小野宮という。しかし、小野宮は一名小野明神ともいつて、この神の歴史は古く、分布もまた全国的にわたる。これを祖神とするのは小野氏であつて、例の猿女（サルメ）氏につながる特殊信仰の宣伝者。その故郷は近江の湖西小野郷であるから、小椋庄の小野宮もその一環。木地屋文書が、小野宮惟喬親王を祖神とするというのは、とにかくおかしい。それよりも、小椋庄にまつてある蛭谷の筒井八幡宮、君が畑の太皇大明神、この両社は木地屋にとつては、祖神の問題ということもあるが、身近に迫る生活の問題として交渉が深かつた。

の両社では、お互に惟喬親王の御廟と称して対抗をつづけ、明治のはじめまでは、両社の人々が毎年各地に巡回した。木地区との連絡をはかり、奉納金の勧進に当つたのであるが、もつと底の問題は、ロクロ師の免許状の検察や下附が眼目だつた。これを氏子狩と称し、この鑑札がないと木地屋も渡世がならなかつた。かれら特殊生活者からすれば、これが一種の擁護と独占となつたのであるから、金をとられる毎に信仰はあつくなつた。筆者の親しい坊さんがいつていた門徒衆は、金をとつてやらないと、寄りつかない、有難がらない。それはそれとして、惟喬親王の伝説は一種の祭神と皇子潜幸物語との結合らしい。

ロクロは木地屋の生命の綱である。動力が出来るまでは、綱をつけて手でまわし、足踏みで回転させた。陶器は心棒を縦にまわすが、木の細工は横に回転させる。この工程を「木地を挽く」といい、その製品が人形ならこれを「木地人形」といつた。コケシを作るとはいわない、削るともいわない、「コケシを挽く」という。鑑札をとつて、故郷をなつかしみ、故郷と連絡をとりつつ、悠々かれらはこれで渡世した。

木地屋はその製品を売るとき以外、一般に里人との積極的交渉を避けて生活した。金属や陶器が進出するに及んで、かれらの挽く腕も、盆も、折敷（オシキ）も、景気がわるくなつた。温泉の発達につれて、コケシは擡頭した。独楽（コマ）も挽いた。かれらの鉄を使わぬ独楽を、東日本ではヴグリ、ツングリという。櫓（カシ）の実をドングリというのとおこりは一つらしい。玩具は売れたが、その他の雑器も下火となつた。その転向組の多くは、半農半製炭に走つた。製炭が全国的に普及した歴史は存外あたらしい。江戸や京阪の附近、山林の多いところでは約300年の歴史よりもたない。それ以前にも炭は焼いたが、それらは多く鍛冶炭であつた。主として、金属細工の人々の間にそれが多く行われた。会津地方の木地屋は、木を井桁（イゲタ）に組み、火をつけ、頃合いを見計らつて、土または水をかけ、砂がまじると、刃物を鍛えるのにわるいとして、雪の中で炭焼をしたと伝えられる。炭焼きなら、木地屋の腕におぼえがあつた。

その経緯組が、今も温泉の裏町に、また少しはなれた仕事場に、ロクロによるコケシ文化の源泉をなしているのもおもしろいが、この間、かれらの来住を基礎とし、かれらの参加を契機として、わが漆器工業の発達をみたことはすばらしい収穫だつた。会津の漆器、日野腕、吉野塗、但馬（タジマ、兵庫県）の竹田腕とかぞえて、この方面に投げたかれらの足跡は、大いに認められてよい。

山村を創り、炭をやき、畑をひらき、神社をたて、農村の副業や林産工業の上に、いろいろの示唆をあたえた木地屋は「腕からコケシへ」今も栄えている。コケシの話も、漆器の話も、あつさり無視されてしまつた。またの機会ということになる。

・1・ 林木の品種改良

林業試験場造林部
育種研究室長

岩川 盈夫

「品種改良」または「育種」ということばは割合耳に親しいが、さて林業ではとなると、今まで林木についての品種改良が、あまり実行されなかつたために、林木の品種改良ということがいまだに耳新しく思われる一般林業家の方々も少なくなかろうかと思う。林木の育種については、すでに2、3の好著もあることではあるが、この頃になって「精英樹」という言葉をよくきくようになったし、林木の品種改良が問題になることが多くなつてきたように思われるので、この機会に林木の品種改良ということが現在の段階ではどんな内容をもつたものであるか、また、これからどんなことが実行されようとしているのか、そのあらましをご紹介してみることにした。何かのご参考になるとすればうれしいことである。

I 林木育種とは

A 林木育種の意味

育種（または品種改良）というのは、一口にいえば、従来ふつうに栽培されているマツやスギなどよりも、実用的にもつとよい性質をもつたスギやマツをつくることである。また、いくらよいものができても、1本や2本では実用上は何のやくにも立たないから、この苗木をつかつて林を仕立てるに足るだけの数にふやさねばならない。だから育種ということは、今までのものより良いものをつくるというだけではなく、これを実用上に役立つまでに増殖するということも含んでいる。

いうまでもないことだが、造林成績がよいかわるいかを決定する要素は大きく分けて3つある。第1に気象や土壌の状態などの環境条件、第2に苗木の育てかた、うえ付方法、除伐、枝打、間伐などのやりかたというような育林技術、第3には林木自身のもっている生れつきの素質がよいかわるいか、この3つである。その場所の環境条件、つまり気象状態や土壌などを都合のよいように変えるということは、とくに林業ではむずかしい。農業では畑地をたがやしたり、堆肥を入れたり、いろいろの肥料をつかつたりなどして、ある程度まで人工的に改善することもできるが、このようなことは大面積の林地では、まず困難なことである。だから林業では、まず造林しようとする土地の環境条件にもつとも適した樹種を選び（適地適木）、その土地とその樹種にもつとも適当

な育てかたをして、できるだけ良い収穫をあげよう、という方向で造林技術の研究がすすめられているわけである。

ところで、品質のよい収穫物をできるだけ多く得ようという場合に、もう1つの方向がある。それは収穫のもとになる植栽材料、つまり林木そのものの素質の良いものを使うということである。苗木がもともと素質のわるいものであれば、どんなに手をつくしても、ある程度以上の収穫はのぞめないが、素質のよいものを使えば、より以上の収穫がずつと楽に得られることになる。林木の育種というのは、何かの方法で林木の素質をより良くしようとするのである。

素質の改善にはいろいろの場合がある。玉石混淆の林の中から素質のよい木のみを選んで、これからタネをとるとか、サシキ苗をつくるとかすれば、この苗から育つた林の素質は、もとの林にくらべて、ずつと良いものになるであろう。また、いくら良いものを探してみても、いずれもそれぞれ長所あり短所ありで、こちらが欲しいと思うようなものが無いということになれば、それぞれのもっている長所を組合わせて、いくつかの長所を兼ね備えたものを新しく育成することが必要になる。また、いろいろの方法で人工的に素質を変化させて、今まで全然無かつたような新しい性質をもつた新種をつくることもある。一般には「品種改良」という言葉が広く使われているが、この言葉から受ける感じでは「野生植物や在来品種を改良して、もつとよい新品種をつくること」とだけに考えられ易いが、現実の林木の素質を改善する方

法は、必ずしも新品種の育成に限られるものではなく、ごく簡単な原始的な方法でも効果をあげる可能性はあるし、また、わが国には今まで無かつたような外国産の樹種や品種を新しく導入する場合も含まれてくることもある。こういう意味では、むしろ「育種」という言葉の方がよいという人もあるが、言葉のせんさくはどうでもよいとして、要するに林木の育種（品種改良）は、このような広い意味に解しておくのがよいと思う。

B 林木育種の範囲

前節でもちよつとふれたが、林業の現在の段階で、林木育種ということは具体的にはどんな内容をもっているものであろうか。

育種の進んだ農業や園芸では、育種といえば、その仕事の大部分は従来の品種をもとにした新品種をつくることになるが、林業でつかっている林木はほとんど全部が野生植物のままといつてもよい。品種改良もまずこれからという状態である。このような、いわば初歩の段階では、第一高度の優良品種をいきなり作りあげることとはなかなかむずかしいし、またそれほどのものでなくても充分やくにたつものである。だから少くとも現在の状況では、林木の品種改良といえは具体的には次のようなことを実行することになるであろう。

(1) 造林木の遺伝的な素質の低下を防ぐこと

これは改良とはいえないが、良い木だけを伐つて利用し、使いものにならないような悪い木はタネ親に残すとか、タネはとり易い木からとるとするような従来のやりかたをそのまま続けていると、林の素質は代を重ねるにつれてだんだん悪くなるおそれがある。このような、品種改良とは全く反対になるようなやりかたを中止することからまず初めねばならない。

(2) 林の素質を全体として高めること

林業でも農業や園芸にみられるような優良品種が広く普及するような状況になることが一番望ましいが、性質のはつきりした優良品種をつくりあげすることは、なかなか簡単な仕事ではない。しかし、こんなはつきりしたものを作らなくても、林の素質を全体として次第に良くしてゆくことは割合容易に実行できることである。品種改良が比較的むずかしい林木については、このような初歩的な、簡単なやりかたも大きな応用場面をもっている。

(3) 優良新品種の育成

いうまでもなく品種改良の本命である。林木でも品種改良が進歩してくれば、上にのべたような方法は問題にならなくなつて、もつぱら新品種の育成ということが育種の仕事の中心になるであろう。

(4) 在来品種の検討

スギやマツなどには各地方に昔から品種といわれるものがあるし、また近年にも民間で育成されたスギのサシキ品種がいくつも知られるようになった。これらを他の地方に移入してみるということも、その地方の林木の素質を高める手つとり早い方法である。ただし、これらの品種や品種のようなものは、それぞれ、それができた地方では良いことがわかつていても、環境条件の違った他の地方へ移すと必ずしも良いかどうかはわからないので、これをそのまま事業的に使うことは危険だから、まず試験的に植えてみて、その地方に適するかどうかを検討する必要があることは勿論である。

(5) 外国産樹種や品種の導入、馴化

上でのべたと同じように、今度は我国には無かつた特徴のある外国樹種や、外国で改良された品種などを導入してみることも、我国の林木の素質を向上させるという点では広い意味で育種の仕事に含めてもよいであろう。

ストロブマツやテグマツは大体良さそうだとわかつたが、このほかにも色々な樹種が試植されている。とくに最近、ユーカリの成長がはやいことに目をつけて、大々的に試験されていることは御承知のとおりである。

外国から直接輸入したタネでは思わしい成績が得られなくても、これを何代か栽培しているうちに、次第に変化して我国の気候その他の条件に適したものに変わつてくることもある（馴化という）。

II 林木育種の基礎になること

林木の品種改良のやりかたを述べる前に、なぜそうやれば品種改良ができるかということを理解する助けになるように、いろいろの基礎的な事項について、ごくざつと説明しておく方がよいと思う。

農作物の改良は、農業というものが始まつて以来、すでに何千年も前からやられていたということである。こんな昔の人達が遺伝学や植物の生殖現象についてそんなによく知つていたとは思われない。遺伝学が発達したのは、だれでも知つているようにメンデルの再発見以来、近々50年ぐらい前からのことである。だから何も学問的な知識がなくてもある程度までは品種改良はできるのである。ただ、これではよい品種ができるのは全くの偶然で、非常に無駄が多いことになる。できるだけ無駄をばういて能率的に改良の仕事をするためには、現在までにわかつている基礎的な原理を理解して、これに基いた計画をたてるべきであろう。

A 変異

スギを例にとつてみよう。同じ林の中の木でもよく見

ると、成長のよいものもあればわるいものもあり、幹の肌、枝の太さや長さや数など、枝下の高さ、クローネの大きさや形など実にさまざまである。さらに細かくみると、小枝の分れ方、針葉の角度や曲りの程度、長さ、球果の大きさや形などについても種々様々である。冬になると針葉が赤味がかつてくるのが普通だが、中には冬でも緑のままで色の変らないものもある。同じ 50 年生でもすばらしい大森林になった林もあれば、やつとどうやら生きていくという程度の林もある。また地域的にも色のちがいがみられることもある。たとえば裏日本に分布しているものには、クローネが尖った円錐形をして、針葉の角度が小さいスギが多いが、表日本にはクローネの形が丸味をおびて、針葉の角度も大きいものが比較的多い。このほかにも極端な変りものでは、矮性で、さつぱり大きくならないものあり、春先の新芽が白いものあり、鶏のトサカのように綴化するものあり、小枝があまり枝分れせずにヒヨロヒヨロと長くなるものあり……という状態である。このように個体により、林により、また地方により種々様々のちがいが見られるということは、なにもスギに限ったことではなく、程度のちがいはあるにせよ、マツでもヒノキでも、その他どんな樹種についてみても同じことである。このような色々の差異を**変異**と呼んでいる。

ところで、このような様々な変異はどうしてできるのであろうか。現在林地で生育している一本一本があらわしている性質（**形質**という）は、その木が生れつきもつている**遺伝的な素質**に、いろいろの環境の影響が加わったものである。つまり、

形質 = 遺伝的素質 × 環境

したがって、形質の変異は、素質が同じでも環境が変ればおこるし、反対に環境が同じでも遺伝的な素質が変ればおこる。現実の林木の示す種々の変異は、この素質と環境との両方が様々に変化して、それが互に色々の組合わせになつてできているものであるからにはなはだもつて複雑である。

上述のことから分るように、変異は大きく 2 つに分けることができる。

変異 = { 環境のちがいによる変異
 遺伝的な素質のちがいによる変異

(1) 環境のちがいによる変異

遺伝質は同じであつて、全く同じ環境で育てば全く同じ形質をあらわすはずのものが、温度や湿度や光線、植物自体の栄養状態などの広い意味の環境の影響のためにおこる変異を**環境変異**、**一時的変異**、**適応変異**などといっている。また、この変異は遺伝しないので**非遺伝的変異**ともいう。それはともかくとして、この変異は育林技

術の分野でとりあつこう変異であつて、可能なかぎりいろいろの環境条件をととのえることによつて、その林木の能力の範囲内で出来るだけ成長をはやめたり、品質をよくしたりすることが育林技術なのである。

形質には環境変異をおこしやすいものと、おこしにくいものがある。球果の形やタネの色などは割合変化しにくい性質であるが、成長量などは植える場所によつてはなはだしく違つてくることはだれでも知つてのことである。

(2) 遺伝的な素質のちがいによる変異

林木が生れつきもつている素質が相違するためにおこる変異で、これは子供につたわる、つまり**遺伝する**ので、**遺伝的変異**といつている。育種に関係があるのはこの遺伝的変異である。育種というのは、様々の遺伝的変異の中で、われわれの目的によくなうものを選び出して、その素質を親からうけつた子孫を増殖することである。だから、その変異が親一代かぎりでも子供につたわらない環境変異だけしか無いとすれば、われわれは、これをどう改良しようも無いわけである。

遺伝的変異のおこる原因にはいろいろある。遺伝的な素質の異なる両親の交雑でできた子供からは、両親とはちがつた素質をもつたものができる（**交雑変異**）。また枝変りなどのように、何かの原因で遺伝因子や染色体に変化がおこることもある（**突然変異**）。

遺伝的変異は勿論自然にもおこるが、人為的にもおこすことができるので品種改良の手段としてつかわれる。

上述のように変異には遺伝するものと、しないものと 2 つがあつて、実際の林木はこの 2 つの変異の組合わさつた複雑なものであることは前にのべた。たとえば成長のはやさという性質は、環境の影響ではなはだしく変化するものであるが、それでは成長量の差はすべて環境変異かということ、そうではなくて遺伝的変異もあるのである。育種をやるためには、この遺伝的変異をつかまなければならないが、それが遺伝的なものかどうかを判別することが、特に林木の場合では一番むづかしく、また重大な仕事になるのである。



「間伐 50 年」の正誤表について

前号掲載の寺崎博士と坂口技官による対談「間伐 50 年」は編集部の手違いにより、対談両氏の充分な校閲を経ずして活字となつたため、両氏及び読者の皆様に大変ご迷惑をかけることとなつた。これは比較的難解な字句の多かつた速記録の整理の不手際と印刷締切の期日が非常に切迫していたために起つたもので編集部として誠に申し訳なく思っています。

寺崎博士にはこのため、ご多忙中にもかかわらず直ちに次の正誤表をお書き下さいましたので、これを掲載し読者のみな様にご訂正をお願いすると共に両先生へも深くお詫びいたします。 —編集部—

頁			誤	正
30頁	左	下から 7行	吉野の川上地が	吉野の川上地方が
	右	写真の下から 6行	シオノサカから	入ノ波から
		13行	$y = ae \pm \frac{b}{x}$	$y = ae \pm \frac{b}{x}$
		14行	本数曲線は	本数曲線はブ
		15行	マイナス	ラス
		15行	それをいろいろ	それで x をいろいろ
		16行	あるし、出	あるし算出
		7行	大正 14 年	大正 4 年
31頁	左	写真の下から 4行	鉦煙で国有林の一部	鉦煙で長木沢国有林の大部
		5行	葉が	木が
		5行	伐採事業	他の地域の伐採事業
		6行	山が	以下 山とあるは 凡べて林
		8行	知事	稚樹
		9行	ミヒラ	恐山ヒバ林で
		10, 11行	今はじめかかつた	昔から疑問にして今はじめかかつた
		12行	デントルグラフという	Centralblatt für das Gesamt Forstwesen という
		8行	一単位	米単位
		7行		
		3行	仕事を	仕方で
31頁	右	上から 5行	古いのにはでて	古い山林会報にてで
		6行	材積法は……て、	又材積法も……ている。
		13行	伐られる	伐期に伐られる
		19行	林間に	林冠を疎開してその間に
		23行	北の方でも	そんなこと起ると思うた
	右	下から 21行	なつたか	なるか
		16行	常道	適正
		10行	ガイヤーの 4 版	ガイヤーの造林学 4 版
32頁	左	上から 5行	多分桂	多分児玉
		24行	上層	下層
		23行	haut	bas
		22行	そうする	そろっている
		21行	両木	成木
		19行	優木だけ	優木の内のもの
		16行	それにかいて	それにかぎつていない
		14行	樹間	樹冠
32頁	右	上から 4行	について	立脚して林を
		14行	と	の
		18行	植生	植相
		21行	別	基礎
		18行	ではない	はない

頁		誤	正
32頁	右 下から	16行 尻	理屈
	"	14行 の台と	を土台
	"	14行 こられ	こわれ
33頁	左 上から	1行 もので ホモ	ものを道具のモノサシで
	"	4, 5行 ホモゲニヤ	ホモゲニヤス
	"	5行 にも来	に出て来る
	"	11行 丁度、会	丁度日本で
	"	13行 ある	出る
33頁	右 上から	1行 と、とつかまえて	と此の問題をとつかまえて
	"	8行 かして 御料	瀬尻の御料
	"	11行 自分の山	自分のいる山
	"	16行 単独では	担当区員では
	右 下から	22行 聞いても、日本の	あの世は行かれぬ。然し日本の
	"	14行 その前に大学を出て	その前に山林局に林業講習所というものが明治33年に始め出来て明治34年に目黒の山林局試験苗圃に建築されてあり
	"	12行 あつた	あつて大学院学生のままで嘱託となつた
	"	10行 実験	試験
	"	3行 山林区	山林局
	"	2行 造林地が	造林地の林冠はどれも
34頁	左 上から	3行 儀式	忌引
	"	7行 参考人として	参考人として東大農科大学の造林学担任教授の本多静六博士と
	"	12行 が信濃	と本多博士と信濃の北佐久塩野の
	"	13行 入り	泊り
	"	14行 3年	また生存競争がハツキリ見えないからまだながくかかる
	左 下から	23行 真楽寺では	真楽寺脇の担当官舎では
	"	19行 はつたり	倒したり
	"	18行 それが	それは
	"	15行 ないデコデコ	なくゴチャゴチャ
	"	14行 ない。そこで	ない。それはヨーロッパの間伐は Kraft の幹級別の図式にある通り明かに層別出来るように生存競争が明瞭に識別する時代からのものである然るに当面のカラマツ林はそうでない、これが問題である。そこで
34頁	右 上から	8行 した	された
	"	12行 つまつて	うまくまとまつて
	"	28行 必要なのだ。	これをモノサシとし計量するから主観でない
	右 下から	3行 樹間	そういう樹冠
35頁	左 上から	16行 グライヒツヒ (gleichlig)	グライヒゲウィヒト (gleichgewicht)
	下から	22行 フィラデルフィヤ、ロツキ	シベリヤ、満洲
	"	7行 泥	土
	"	4行 木	柱
	"	3行 桜	波
35頁	右 上から	1行 泥	土
	"	5行 樹間	樹冠
	"	20行 れが 25 年	れが太平洋沿岸地方でも 25 年
	"	22行 層成	単層
	右 下から	22行 へこんだ	単層林だ
	"	20行 た。今	たとき今
	"	19行 湧泉場	所に冷泉場

頁		誤	正
35頁	右下から	18行 マツをやつた	マツ林を間伐した
	下から	17行 こういう山	上記のような林
	下から	16行 造林も	造林地としては
	下から	15行 ない、やめ	ないから、やめ
	下から	14行 他の所	他の所(村松のアカマツ林)
	下から	13行 やつて	間伐して
	下から	9行 例の方を	赤谷の林を
	下から	6行 もう 25 年	一般に 25 年生
	下から	2行 いうやつに	いうような林に
	下から	1行 こういう優	こういう工合に優勢木劣勢木を
36頁	左上から	1行 クローネでもつて	クローネを主体として幹級別をすれば各層に
	"	5行 やつを	(図と写真を示して) 林冠をしているものを
	"	6行 低いやつは	低い 3 級木は
	"	9行 こわいから	奈良の高取山の試験地で最初にやつたが浅間の
	"	" 試験地では	試験地ではすぐにはやらずに様子を見ていた
	"	13行 一人で	自分で
	"	15行 } 24, 5 年 以下同様	24, 5 年生
	"	16行 }	
	"	20行 場合は	場合では、(ヒノキの場合でもマツの場合でも) 私が一般収穫表を編成林業試験報告に示した通り最近林野庁から出版された各営林局で調査された標準地調査表を比較研究すると主副林木合計の成長曲線は略同じものとして取扱つて差支ないらしい事実があると同様に
	"	23行 一つの、	一つの phase といふか stage といふかがあつて
	"	24行 それからして	それから(成長曲線図を示して)
	"	27行 C種は早くやつた	C種の方はB種のものより早くから複層林間伐をやつた
	"	29行 C種の方はうんと伐	C種の方は3単層林として3級木を殆んど伐り而かも1級木を伐つているからうんと伐り
"	下から	14行 今はこれの	今のは(成長曲線図を示し) この
"	"	13行 局の	局に御願してその方に
"	"	10行 一口に	一つの曲線に
"	"	" やつた材料	やつたアカマツの材料
"	"	9行 して	トル
"	"	7行 みんなないので	65 年生までで
"	"	1行 そういうやつに……やつて	そういう若いものに対して比較試験して
	右上から	6行 ツツツイて	材料を調査して
"	"	7行 何は	グラフは
"	"	9行 をつかまえて	の方の手あきの
"	"	19行 人の材料……先を	林野庁の収穫表作成の資料即ち現実の事実によつても 60~70 年以上のものを
	下から	11行 あつて、持ち続け	あつてその冠型を持ち続け
"	"	10行 2になり	Bになり
"	"	" これを	1を
"	"	9行 6になつた	Bになつた
"	"	8行 2 a	B a
"	"	7行 この形	e 形
"	"	6行 いう形	いう d 形
"	"	5行 まん中	まわりの
"	"	4行 何もかも知れ	何の力によるか知れ
37頁	左上から	1行 だめだ	伸び得ないのだ
"	"	14行 こうなる	b, c となる

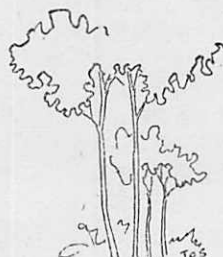
頁		誤	正
37頁 左下から	25行	いつて	いく
"	24行	私の勘でもつて、やると	私の計算で私がドイツ、オーストリアの先覚者の調製した収穫表から連年成長から微分方程式を誘導してその第二次微分方程式を誘導して見ると成長曲線は外力の成長エネルギーに対する効果としてみることが出来る
"	23行	何かの	D. メーラー
"	22行	天然成長	連年の成長エネルギー
"	21行	ものの	外力の抵抗とその抵抗に対する抵抗というものの
"	20行	こういうもの	此の成長方程式というもの
"	19行	それを	それで
"	14行	の Möllert	の C. Möller
"	"	近頃は深	近頃研究の結果を取纏め
"	13行	始めて	デンマルク林業試験報告に発表している
"	13行	しかしペーカーの使つ	なお Baker が造林学の本に引用して
"	6行	第一の部分	第一微分
"		第二の部分	第二の微分
"	5行	抵抗力の……相手……の問題が	外力の抵抗力とそれに対して成長するというエネルギーの抵抗力の問題が
"	2行	第二の部分	第二の微分
37頁 右上から	6行	本物の	本問の

質

疑

応

答



問

次の文献について御教示下さい。

1. 木材流送路、特に開設に当つての工事、測量、施工等に関するもの。
2. 貯木場（水中、陸上）に関するもの。

和歌山県庁林政課 塚本技師

答

1. 木材流送路、特に開設に当つての工事測量、施工等に関するもの。

題名著者発行所発行年月日

- 1) 秋田の伐木運材 加島繁太郎 清水利久 共著 日本木材加工技術協会 昭 28. 8. 10
- 2) 伐木運材図説 関谷文彦 賢文館 昭 16. 3. 25
- 3) 森林工学補遺篇 工学士 中村猪市 成美堂書店 昭 8. 10. 6
- 4) 実用伐木運材法 中原正虎 三浦書店 昭 5. 6. 15
- 5) 木曾式伐木運材法 帝室林野局 昭 3. 1. 4
- 6) 上村 森林利用学 中巻 林学士 上村勝爾 成美堂書店 大 2. 6. 5.

2. 貯木場（水中、陸上）に関するもの。
前項 1) 及び 6) に併載されている。

（林業試験場経営部 上田 実）

昭和 30 年 1 月 10 日発行

林業技術 第 155 号

編集発行人 松原 茂

印刷所 合同印刷株式会社

発行所 社団法人 日本林業技術協会

東京都千代田区六番町 7 番地

電話 (33) 7627・9780 番

振替 東京 60448 番

三浦伊八郎外 10 名協力作

改訂 林業実験と実習

A5. 426頁 価 480 円

本書は林学に関係する諸部門を実験・実習に適する様に各権威者が詳述した名著で、本書により体験をより豊富にする事である。

島田 錦蔵 著

改訂 林政学概要

A5. 296頁 価 450 円

林業政策は自然的制約の下に長期計画を必要とす。もし諸政策・諸施設を誤るならば森林に及ぼす影響大といえる。本書は日本の林業の現状を前提として創造的立場から論じた名著。

吉田 正男 著

林価算法及較利学

A5. 140頁 価 230 円

本書は評価論と収益論の基礎概念を論述したもので林業経営に必要な書である。本書により経営計算は再検討される事だろう。

1. 地価の評定 2. 林木価の評定 3. 平均収利率の測定、他。

井上 元則 著

林業害虫防除論

上巻 A5. 220頁 価 300 円

中巻 A5. 320頁 価 450 円

生産の確保は林業経営上重要な問題である。経営の合理化は病虫害に対する手当法を心得た事により達成される。本書は防除法に重点を置いて理論と応用の立場から詳論したもので林業技術者の必携書。

中村 賢太郎 著

育林学原論

A5. 418頁 価 400 円

各地方の自然条件により林木を仕立て、撫育する事は収益を大小にするかの結果を生む。本書は森林の撫育の基礎事項を詳述した力作。

伊藤 一雄 著

図説 樹病講義

A5. 300頁 予価 600 円

本書は原色版 4 枚、図版 260 余図からなり伝染性、非伝染性の樹病の病徴・病原菌・防除法を懇切に書かれた書。2 月下旬発売

三浦・蘭部共著 訂正 標準林学講義 価650円

内田 繁太郎 著 実用田畑山林測量法 価120円

岩井 亥之助 著 理論活用椎茸培養法 価150円

北島 君三 著 椎茸ナメコ榎茸の栽培法 価150円

御注文の際は「林業技術」と
御記入の程願います。送料各50円

地球出版社

東京港区赤坂一ツ木 31
振替東京 195298 番

謹賀新年

日本林業技術協会

測量指導部

理事長 松川 恭
専務理事 松原 茂佐

橋谷 昊
顯川 徳一
中曾 根武夫
丸山 正
堀江 道夫
久保田 鉄雄
村山 美代子
滝沢 貞子
殿岡 志津子
成沢 英一
藤田 稚市
林憲 二

製材経営の秘訣

土居 禎夫 著

附録・用材の日本農林規格他

日本図書館
協会選定

最新刊
B6 フランス装美本 二七〇頁 価二〇〇円 千三三円
製材工場の経営について理論的・技術的・採算的に徹に入り細に亘つて極めて平易に判り易く「儲かる製材」について懇切丁寧な説き、原料の仕入れから製品の販売に至るまでを詳述したもの。

農林 最

木材技術研究会編

改正丸太製材材積表

素材石数早見表

材積換算表

五〇〇円

二五〇円

二五〇円

二一〇円

農林省山林局編

立木幹材材積表

製材技術者必携

實用製材技術

田中勝吉著

實用木材工学

一五〇円

一四〇円

一四〇円

一四〇円

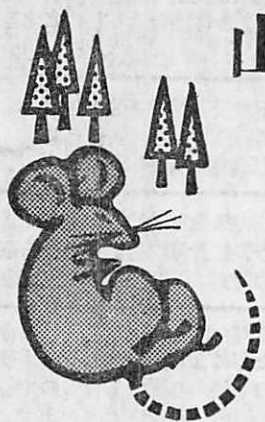
一四〇円

内容見本呈

東京・神田・小川町 3 の 10

森北出版

振替東京 34757
電話(29) 3068
2616



山林の鼠を

確実に

コロリと斃す!

三共の強力殺鼠剤

モノフルオール醋酸ナトリウム製剤

フラトール

特長 ●喰いつきよく、殺鼠効果は100%

●毒餌のつくり方はとても簡単

●わずかな費用で広範囲の駆除に絶好



農薬部宛お申越次第説明書進呈

三共株式会社農薬部
東京都中央区日本橋本町4の15

…新刊案内…

~~~~~ 林業技術叢書 ~~~~~

第13輯 東大教授・農博 中村賢太郎 著

造林学入門

(植林の手引) A5 価 60円 66頁 千 8円 (会員 55円)

~~~~~ 林業普及シリーズ ~~~~~

No. 38 内田登一 著

苗畑の害虫

価 120円 (会員 110円) 千 16円

No. 40 加藤誠平 著

運材用索道主索の設計と検定

価 100円 (会員 90円) 千 8円

No. 41 上田弘一郎 著

竹林の仕立方

価 90円 (会員 80円) 千 8円

~~~~~ 林業解説シリーズ ~~~~~

第68冊 亀井健三 著

巢まき造林法

—ソヴィエトの林業技術—

第69冊 渡辺啓吾 著

育苗図説

第70冊 太田嘉四夫 著

野鼠の調査法

第71冊 井上元則 著

林業用薬剤

第72冊 寺田喜助 著

風災5700万石

いずれも 価 40円 千 8円

東京都千代田区六番町七

社団法人 **日本林業技術協会**

電話 (33) 7627・9780 番

振替口座 東京 60448 番